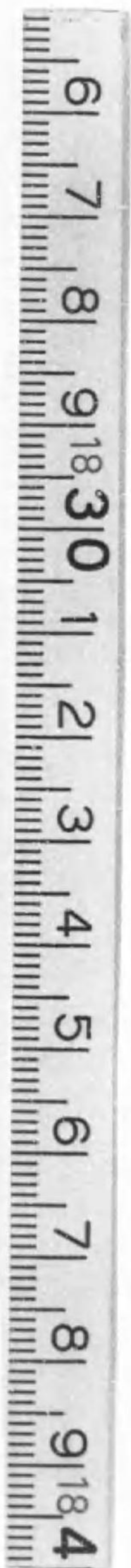


始

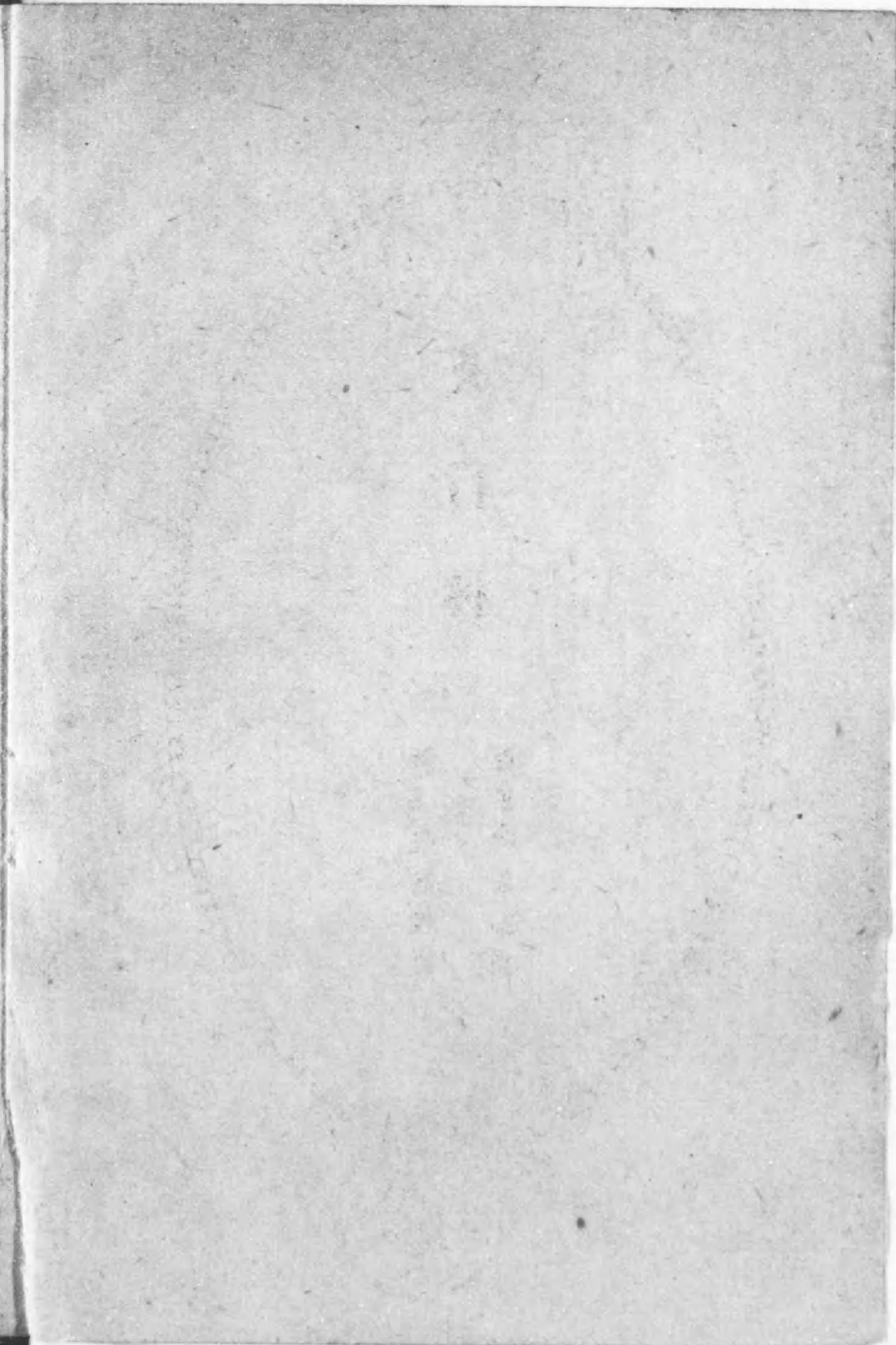


特217
276



行
林

獅子吼無畏說
百獸聞僉腦裂



刊 例

一、さきの上木せる「靈學筌蹄」の言ひ及ぼさざりしところを説かんが爲めに本書を出だすことなれり。筌蹄と此の天行林とは相關するものなれば兩者を併せ研究せらるゝことを要す。固より世上蕪穢の俗書と交渉するところ一もあること莫し。學者は須らく芳潤に嗽ぎ英華を含むの見識なかる可らず。

一、本書一卷十二林、或ひは各章獨立せるが如く或ひは然らざるが如く、秩序無きが如く或ひは然らざるが如く、これを一讀せる感想は必ずや甚だ漠然たるものあるべしと雖も、倘し潛思して再讀し三讀するに至らば、忽ち眼睛の清涼を覚え、全卷幾千萬言、一句として其の處を得ざる無きを知るを得む。一讀して去る人のためには本書は全く無價値なる平々白話の雜録に過ぎず。要は卷頭の一字より卷末の一句まで、これを駁撃し去らむとの決心を以て精讀せざる可らず。卒意に通覽して泰山を目睫に失ふ莫かれ。

一、本書もと忙裏咄嗟の著にして多くは口授になると雖も、亦みづから執筆せるところも尠なからず。業務の都合上數日間全く講述を廢せることもありて全卷敘述の體裁に統一を缺くものなきにあ

らされども其の内容はひそかに自ら許すところにして決して責任を筆録者に嫁せむとするものにあらず。此書尙ほ含糊を免かれざるもの往々にして之れあるは中薄の忌むべきが爲めなり。もし夫れ本書中より幾多の祕寶を奪ひ去らむとする漢あらば、そは其人の腕力に屬す。壺中の仙境かならずしも往來することを咎めず。

大正十二癸亥年八月二十三日

蘭花香處の北窓下に於て

著 者 誌

わが夢は高雷火こえて天鳴矢

昆侖あたり天かけりたり

阿蘇火は壽と白さむ天行居に

たまちはへませ不死の大神

Because "*Electricity and matter*" cover the major portion of modern physics, during the last twenty years our ideas on this subject had been revolutionized, though the idea of the atomic nature of electricity had come in almost unnoticed; at present the title of his lecture might, in fact, be "*Electricity and no matter*" (サー・ルザフォード教授講演の一節・天行林第二章参照)

昭和十七年版について

本書は大正十三年の刊行であり、友清先生が今から二十年前に講述せられたものであるが、先生の靈識は常に時勢よりも數十年先行して居り、本書の内容は今日に於て真に一層の光輝を放つものである。これ世間的廣告手段を用ひずして版を重ねること六回に及び、時局下出版多難にして偶々印刷運る、や督促集し、之を求むる者の渴仰歇まざる所以である。

本書は特に近代科學の洗禮を受けたる知識層を対象として、力めて科學の分野に取材し、外國の文獻等に交流して惟神大道を開發するの深き用意の下に成れるもので、現代人を警策するところ痛烈切實なるものがある。今次勃發した大東亞戰爭は人類の世界觀を一變せしめたが、次ぎに来るべきものは必然惟神文化即ち靈的文明であらねばならぬ。今や新しき世紀の曙を迎へむとする時、本書は新たな装ひを以て人類の靈魂を淨化すべく世に出づるのである。耳あるものは靈的文明の力強き聲音を本書に聴くであらう。

卷末の「開室妄書」は本書發表後の大正十四年、現在の神道天行居の機關紙『古道』の前身たる『天行新聞』に五回に亙つて連載されたもので、友清先生の豊富なる靈的體驗に基づく含蓄深き天衣無縫の隨筆で、本書に續く『古神道秘説』の先聲をなすものとして新たに増補したものである。

昭和十七年二月十五日、新嘉坡陷落の大捷報を聴きて (編者謹みてしるす)

目次

子	林	(一)
丑	林	(二)
寅	林	(三)
卯	林	(四)
辰	林	(五)
巳	林	(六)
午	林	(七)
未	林	(八)
申	林	(九)
酉	林	(一〇)
戌	林	(一一)
亥	林	(一二)
一路	林	(一三)
附錄	林	(一四)
開室妄書	林	(一五)

天行林

子 林

友^{トモ} 清^{キヨ} 歡^{ヨシ} 眞^{マコト} 述^{ツト}

朝鮮の南方の或る深山の中に「方夫人戈口或禾多」の八字を彫り込んだ石碑を立てたものがある。それは今から五百年ばかり以前のこと(李朝の初)で、天行居の先靈道洗老人が李朝の前途を卜して其の運命を記前したものであつたが、その八字はどう云ふ意味のものであるか誰れひとり感づくものも無かつた。ところが其れが漸く此頃に至つて解釋されて來た。即ち方^ウ夫^フは庚^{ケイ}、人^ニ戌^{シユ}は戊^ブ、口^コ或^ニは國^{クニ}、禾^コ多^タは移^{ウツル}、つまり「庚戌^{ケイニシユ}の年に國が移る」と云ふ意味である。果して明治四十三年庚戌年の八月に韓國併合條約が成立した。

朝鮮とバルカンは世界の禍機の伏在する二大スフキンスで、現代の日本としては朝鮮の統治策が

何よりも重大な問題で、而かも最も厄介な問題であるが、伊藤公以來歴代の役人達のやりかたを顧みると少し酷評かも知らんが殆んど失敗の歴史と云つて差支へあるまい。今の日本には殆んど活眼の政治家無しと言はれても此れでは申し開きは出来さうにない。併し政治上のことは堂々たるお歴々が日比谷だけにでも馬に喰はせるほど澤山に居られる筈だから吾々草莽微賤の輩が彼れ此れ申上げる筋合ひのものでもなからう、私が今朝鮮を引出したのは、朝鮮は今から二百年ばかりすると沙漠になつて了ふといふことを一言しておけばよいのである。斯う云へば随分驚く人もあらうが、悲觀でも樂觀でもイヤでも應でも左うなるのである。朝鮮は日本の統治に歸して以來植林事業砂防排水等大いに見るべきものがあつて、禿山も年々青くなつて來たことは萬人ひとしく知るところであるが、それが二百年後には荒涼たる沙漠に化して了ふのである。これは所謂造化の神の大規模なる計畫の遂行であるから如何なる科學的施設を以てしても如何ともすべからざるもので、倘し私が茲に提言するところを疑ふものあらば去つて氣象學の大家に訊してみるがよい、専門家の意見にも多少の異同はあらうが、恐らく十人の七人までは遺憾ながら此の提言を否定するものは無からう。

古代の世界の文化の起原及び其の通路を考證せんとする學者の通弊は、今日の不完全なる言語學及

び發掘物の分類を第一に主眼として判斷を下す輕舉である。言語といふものがどれだけな變化を重ねて居り、地形や地質が如何に驚くべき移動轉變を遂げて居るかといふ問題は、固より其れ／＼の専門學者によつて研究されつゝあるところではあるが此の至要重大な研究はマダ／＼ほんの初一步を進めただけで、古代文化の出自、通路等を精確に推定せんとする資料にする迄には、餘りに遠き距離を有して居るのである。主として堆積岩 (Sedimentary Rocks) に残された記録を其の構成の材料としてやつて來た地史學がモット目醒ましい發達を遂げたならば或ひは斯ういふ方面からでも意外の光明を投げかけられはせぬかといふ期待もないではないが、今日までの學界の研究報告では甚だ心細い次第である。日本上代の神々の大活動舞臺たりし中央アジア方面の地點 (西藏、トルキスタン、波斯、メソポタミヤ、亞刺比亞諸地方) と今日の日本との南方 (主として海上) 交通時代にしても其後の朝鮮、滿洲、北支那、青海、西藏を連絡した北方交通時代にしても、今日からは殆んど想像も及ばぬほどの地形、地質の變遷があつたので、今日大沙漠になつて居るところが昔は海 (大湖) であつたところも多ければ今日の蒼々たる沃野や湖水が沙漠であつたところもあり、又た植物でも動物でも人間でもトモ今日の普通の科學的常識では肯定し難いほどの大移動をして居るのであつて、それに上代の交通は、海上でも陸上でも或る意味に於て今日以上の發達をして居たといふことは漸く近來の篤學の専門

家が承認しかけるやうな傾向になつて來たのであるから、世界文化の起點や其の發展した経路といふものは、今日の普通の學者が考へて居るところと正反對の流れを辿つて居るところもあり、或ひは前後因果の關係が實はアベコベに展開してゐるところもあるので、丸善仕込の香水臭い學者が日本の神典の所傳を有りふれた只の神話傳説の類ひと輕々に考へ去つて、日本は何といつても昔から世界の田舎で、日本の古代の神々といふものは何れも其の「世界の田舎たる日本」の未開時代に於ける權力者の群れであつたに過ぎないと見るのも、一應無理からぬ次第であらう。ヒマラヤ山の七八合目で海棲動物の化石が出て、辨慶の安宅の關が、今日では海岸から一里も距てた海上になつて居ても、つい先達てまで海苔を生産して居た靜かな淺草の海が今や活動寫眞や觀音様で騒ぎ立て、居ても、日本の古墳から發掘される多くの金環や寶劍の金色が電氣メッキであることを西洋の學者に注意せられても、そんなことは一切研究に値ひせぬものと見くぶり、横文字でおどしつけぬ限り八風吹けども動ぜざる大悟徹底の日本の學者なるものには滅多に手のつけられるものではない。

山口縣の阿武川の上流の溪谷は二三年前から其の風景美を世間に紹介せられ、長門峽の名は一時に天下に高まつたが長門峽の入口の丁字川の形成は甚だ珍らしいもので、同方面の岩石は第三期層の石

英粗面岩から成つてゐるが丁字川はもと津和野川上流にあつたものが津和野の青野山が噴火してその流域を塞いだ爲め御堂ヶ原を中心とせる一帯の盆地に流入して一大湖水を成しそれが風蝕と水蝕とそれに水壓が加はり西に流失して阿武川の上流に繋がり其の流域が今の長門峽となつたものである、御堂ヶ原一帯が二十萬年以前に湖水であつた證據には現に浸丘が残つて居るのでわかる、かゝる丁字川の成立は世界に類似少なく日本ではまだ一ヶ所も學者の注意を惹いたものがないさうであるが、とにかく地形の變遷移動は、大小新古の別こそあれ日本到るところ否な世界到るところにその面影を残さぬところはなく、桑田變じて海となるの嘆は昔の支那の感傷詩人ばかりの問題ではないのである。獨逸の天文學者ウエーグナー教授が近頃發表したところによると、大陸は徐々に今日でも移動しつゝある、英國のグリニッチと米國マサチューセツツ州のケムブリッジとの間の經度の差は四十二年間に〇、七二度だけ短縮したと云ふことであつて、今日まで説明の出來なかつた氣候の變化の理を解決するに可なり貴重な發見であるらしい。しかし地形は斯くの如く徐々と變化するばかりでなく古代には種々の事情で突發的の激變も尠なくなかつたであらうし、それに古代の民族は今日でもアレウト人が一人乗りの革舟に乗じて荒海を乗切つてゐるやうに單獨的で冒險の旅行をやつたのみならず大集團を催して數百千里を踏破して或ひは東し或ひは西したもので、その文化の航路は單簡に論斷することを

許さないのである。古代民族の大集團が移動するといふことは、必ずしも游牧民の間に行はれたばかりでなく農耕時代でもいろ／＼の事情で耕地の作業が困難になると、思ひ切つた行動を執つたものである。先達ての伯林電報によると、フランツ、ウエドリントンといふ人が瑞典海岸のボフスランドの岩石に彫られてある古代文字を研究した結果、それが一萬年以上の古い歴史を有するものであるといふことが判明し、その記録によれば南米にインカ帝國を建てたのはゲルマン族並びにスカンヂナヴィア族の先祖なるルギア族であつて、彼等は既に世界を知り、埃及の文明に先んじてナイル河を探検し農具類や車輛等をも發明したのだといふ、また彼等が瑞典にゐた間に大饑饉があつて、全土不毛に歸したので彼等はバルチック海を渡つて獨逸に行き植民地を開かうとした、同時に多數の馬を連れて行き多量の馬肉をも送つた、そして瑞典に残つたものはやがてベーリング海を経て遠く亞細亞にまで渡つたのだといふのである。無論これが果して精確な研究であるかどうかは未だ審かでないが、これに類似した古代民族移動の事實は世界各所に行はれた歴然たる證據のあることは世界の學者が其れ／＼専門の立場から研究主張して居るところで、この古代文字研究者の發表した事實を其のまゝ承認することにしても別段不思議がるほどのことでも珍らしがる程のことでもないのである。

二十九年間富士の古文書を研究して綜合撰輯したものだといふ三輪義熙氏の「神皇記」を一讀したが、その中には、神武天皇以前の鵜葺草葺不合尊ウガヤフキフヘズミと稱せられた皇祖が五十一代あつたことになつて居り、その頃は稍や代々の神皇も御長壽で此の五十一代だけが（短かいのもあるが）二千七百有餘年になつて居り五十一代各神皇の御治績が具體的に記録され、御陵墓も大部分明かにしてあり、更らに其の以前には天照大御神より日子火々出見尊に至る豊阿始原時代があり其の以前に高天原時代が長く続き其の以前に天之御中世時代が又た長く続き、その又た以前に天之世時代が悠遠に續いて居ることになつて居り、神祖は某方面から先づ附島（今の長崎縣對馬國）に天降られたことになつて居る。その記録する事實は上記ウガヤフキの記録するところと頗る髣髴たるところがあつて兩者を對照すると隨所に或るヒントを與へられるのを感じるやうである。上記は貞應二年、從四位侍從大友左近將監藤原能直朝臣（源頼朝卿の二男齋院次官藤親能主の養子で豊後國守護職）の編輯に成るもので全部一種の神代文字で記され、高千穂記、出雲記、新治記等の古文書十五部を引用して出來たものらしく、その一部分は明治十年吉良義風が譯出して（杜撰だとの攻撃もあつたさうだが）其後間もなく別に全譯が大分縣あたりで上木されたことであるが私は未だ其の全譯を見ない。私が見たのは義風の譯出した三卷で數年前日向から神戸へ向ふ船中で退屈まぎれに讀んだだけであつて、これを以て上記そのものの價値を評

論するのは失禮であるから差控へねばならぬが、上記では鵜葺草葺不合尊と稱せらるゝ時代が七十一代になつて居たやうに記憶して居る。とにかく神皇紀といひ上記といひ我が神武以前の敘述が一面より云へば科學的であり歴史的であるのは誠に結構であるが、日子火々出見尊以前の記述は遺憾ながら承認し難い點が多く且つ極めて重要な間違ひ（記者の想像の産物或ひは誤傳の混入ともみるべき）があるのみならず鵜葺草葺不合尊時代の記録にも一見して否定し得らるゝ箇所が散見するのは多少の見識ある人士の感を同じうせらるゝところであらうと信ずる。併し何れにせよ三輪氏や上記撰述者の勞は大いに多とすべく、我が上古史の研究上参考とする價値は充分にある。私は徒らに古事記や日本書紀の神聖を維持せんが爲めに、少しでも記紀を裏切らんとするが如き資料が見つかるゝと無理由に此れを抹消し、眼を蔽うてそれを見まいとするが如き或る種の神道學者の如き卑陋な態度を學ぶことは出来ぬ。彼等は眞に神といふものを知らぬのみならず眞に人といふものを知らぬから神武天皇は人間であり、その前は直ぐに人間とはかけはなれた神であると誤信して居るので、木に竹をついだ様な、皇祖論をふり廻さねばならぬ窮地に陥入るのである。上記や神皇紀の如きものが又た別に幾ら出て来たからと云うて其れで記紀の神聖が動搖したり値打が上つたり下つたりするものでは決してないこと云ふことが腹に入つて居らぬから尻の穴のせまい考へに襲はれ、自由自在の研究の活眼を洞開すること

が出来ないのである。何れ斯うした方面の問題に就ては「天孫降臨前後の日本」を刊行して聊か卑見を天下に披瀝して世の叱正を乞はんとする決心である。

（さきに豫告した「有史以前の日本」は「天孫降臨前後の日本」と改題して出版するこゝにいた）

いつたい吾々は人間であるが、人間を考へようとするには人間が現に住んでゐる此の大地について考へなければならぬ。地球が一種の瓦斯状態でありそれから液體となり固體となり太陽や月と分離した悠久な昔のことは此れを考へるに餘りに茫漠としてゐて、吾等の現生活上の意識に没交渉であるが、兎に角地球を構成する最古の岩石の年齢は凡そ幾つ位であらう、或る學者は百六十億年といひ或る専門家は二千五百万年といひ、其差の餘りに大なるは如何に今日迄の研究が雲を掴むやうなものであるかと云ふことがわかるであらう。であるから其れさへも先づ吾々の頭脳には格別の感興をひくものでない、吾等が知るを要する點はせいゝ二三萬年以來の地上の出來事で、中央アジアが大きな海であったこと位から以來の事を知れば、吾等が研究せんとする目的物を描き出すことは困難ではないのである。その當時この中央アジア海は一方は遙かにヴォルガの流域にも達し、西方にも長驅して黒海に連なつてゐたので、現代の裏海、アラル海、トルキスタン沙漠の一部は昔の大海の名残りである。

それかと云つてサハラ沙漠の如き、海が乾あがつて出来たのではなく、これは烈風の爲めに熱砂が吹きつけられて、それより以前は豊饒であつた國土を埋没して了つたのである。さういふ風に幾多の變遷があり、行通路の如きも幾度か隔世的大變革が行はれたが、太古の諸民族は或ひは駱駝によつて大沙漠を横斷し或ひは孤舟を大洋にあやつり、天涯萬里に往來したもので、青雲のたなびく極み白雲のむかふす限り雄大な交通が行はれたものである。支那人の祖先なぞも昔は雄大で、四千年ばかり前までは殆んど一面の立木であつたのを西方から移住して來た民族が焼き拂つて牧畜業から耕耘業に商賣換をしたのである。多分ペルシャのイラン高原あたりから流れて來たものらしく、各自に天幕を携へて天山南路を経て、黄河に沿うて下り遂に周以前の國家を組成したものと見える。支那人が當時の有様を想像した詩に「掣馬驅駝半婦人、白羊黃犢亦隨身、不愁終日移家去、翻愛他鄉草色新」といふのがあるがこんな氣持で悠々とやつてくれば大集團が何千里を踏破するのも今日のハイカラ者類が考へるほど困難ではなからう。ずつと世が下つて元が荒び廻つた壯圖にみても昔時大部隊の兵團を數年間にわたり所謂懸軍萬里の大活動をやることさへ可能であつたことがわかる。成吉思汗ジンギスカンの孫の拔都バグダドが歐洲征討の總司令となるや、先づ長驅してモスコを破りキエフを抜き、ワルソーを叩きつぶし、クラコーよりブタベストに入り、武威赫々歐洲全土を震はしたものであつたが、折あしく元の皇帝が

崩じたので一應引揚げねばならぬことになつた。大山脈も大海も昔の人間の前には何でもなかつた、汽車や汽船がなくても自由に懸軍萬里をやつたものだ。その親分の成吉思汗とは何者か、日本を落ち延びて蝦夷から靺鞨に渡り、蒙古のオノン河畔から星色をトして蹶起した源九郎義經ではないか、愛妾靜を追憶して悶々の情やるかたなく其の氣晴しにやつた大芝居であつた。斯う云へばイヤ成吉思汗は義經ではないといふ者もあらうが、現にロンドンの博物館にある成吉思汗の遺物には篋龍膽サリシソウの紋がついてると云ふではないか。清の乾隆皇帝御撰の通鑑綱目明紀に皇帝親しく、「秀吉が若し存命であつたなら支那も取られて了つたことであらう」と書かれてあるから太閤様も義經流の人間であつたであらう。イヤ義經や秀吉の如きを數へるばかりでなく、家康が「徳川家」の子孫安泰の爲めに取つた政策は「日本家」の古來の雄大なる家風を塗りつぶしたが太閤以前の日本人の膽略は神代以來一家相傳のもので、しかも中央アジア方面に活動された時代の神々は征略的でなく文化開拓的であつたのである。それは色々の系統の神々であつて必ずしも大物主神や少名彥神の系統の神々ばかりに限つたわけではない。アレウト人がアレウシヤン群島から樺太までの荒海を一人で革舟を乗り廻してやつてくる（その距離は九州からフィリッピンへ渡るよりも遠い）やうに、古代の神々は一層の靈智を働かして如何なる險難をも冒して千萬里に活動され、ひたすら原始文化の開拓修理に努力せられたものであ

る。しかも中央アジア方面ばかりでない、日本に近い朝鮮、満洲、支那あたりにも相當に活動せられた足跡がある。支那の漢民族の祖先が遙かの西方より移住し來るズツと以前のこと、たとへば山東省の泰山の如きも日本の神々の一つの行在所であつたのである。これに就て思ひ出すのは、今から二千五六百年前、齊の管仲が泰山に登つて神庫を檢閲したときに、七十餘王の遺物が保存され、その中に無懷氏に始まつて伏羲神農より周成王まで十二王の名は知れたが餘の六十餘王の名が知れぬと云ひ、その後孔子は西麓の魯國にあつて亦た登山して神庫を檢閲したが其の言ふところは管仲と同じである。これについて久米邦武博士は、「今より數ふれば一萬年以前より泰山に神を祀られてあつたことを裏書するものである」と云つて居られるが、無懷氏より以前に泰山に封禪の大祭典を行つた六十餘王の年代は、そも／＼如何なる神祕を語らんとするものであらうか、神さびたりとも神さびたり。

支那の古典などを讀んでも海といふ字が沙漠を意味する場合が多いことさへもわからぬ様な此頃の官僚學者達には、私のいふことは頗る奇怪なものであるかも知れぬが、此章にも豫定の頁數があつて長い議論は出來ぬから沙漠の砂とも海底の砂ともエタイの知れぬ砂をひと攪みバラ撒いて諸君の點眼水に換へることにする。固より砂のことであるから其の一粒々々が何を語るかは耳の穴が三つや四つ

あいた人でないとわからぬかも知れぬが、それまで世話をやく必要もあるまい。——先づ支那に於ける神仙の大宗は西王母であらうが、西王母の住むといふ崑崙山の所在は一體どこであらう。それを知るには禹貢及び山海經を眞面目に研究せねばならぬが、その山川湖海の多くが現在の支那のそれに符合せずして却て西域と合するのはどういふわけか、禹の時代の所謂禹域なるものは今の支那本部でなくして天山南路ではあるまいか、禹の臍の緒を切つたところは更らに葱嶺の西なるタシケントで彼等は葱嶺を越えてタリムの盆地に來り終に于闐に歿したのではあるまいか、西洋學者の中央アジアを探検するものは其の風俗習慣のすべてがバイブルの中の記事に吻合するのに驚くが、竹書註によつて禹の人物を研究するものは必ずや其のバイブルと赤の他人でないことを發見して驚くであらう。バイブル中のモーセは竹書紀年の涂孟とどれだけの相違があらうか、ノアの洪水と禹の治水とは何を意味するものか。ラコウベリー氏は一八九四年の出版物に於て、「神農黃帝みなバビロニアの人である、神農は Sargon であつて黃帝は Nakhunte である、蒼頡が始めて文字を製したことは支那の歴史に見えるが蒼頡はカルデアの Dungi で此れが文字を製したのはカルデアで生じたのである、また黃帝は蚩尤と涿鹿の野に戦つたことが支那の歴史に見えるが、涿鹿は Tigris 河のことで、この戦争は黃帝の本國即ちバビロニアで生じたのである、黃帝は此の如き戦争を終つて後その種族を率ゐて耶蘇紀元前二千

二百八十二年に支那に乗込んだので、その頃には既に支那には澤山の土民部落があつた」と説き更らに「堯は遷徙者の子孫であるが舜はさうでない、土民の酋長だ、堯は舜に位を譲つて支那帝國が出来上つた」と主張して居るが、この問題についても如何なる點までを否定し去る證據があるであらうか。女媧氏が五色の石を鍊つたのは煉瓦製造の始めで、爐灰を聚めて以て滔水を止むることは人造漆灰で護岸工事を起したのでなくて何であらう、神農以前でさへ左うだから神農に至つては更らに以上の開化時代を支配した筈であるのに、斷木爲_レ組、揉木爲_レ末、始_テ教_ニ耕作_ニ蜡祭_ス、以_テ三_緒鞭_ニ鞭_ニ百草_一、始有_ニ醫藥_一、教_ニ人日中爲_レ市、交易而退とあるに至つては舞臺が釣り合はぬが、女媧氏は風力強き沙漠の人で、木を得るに困難だから石室を造り、禿山が多くて水害が多いから漆灰を用ひたけれども、神農氏の居たところは樹林を開拓するに努めたので女媧氏と神農氏とは其の建國の地點が全く別の世界であつたことを知らねばならぬであるまいか、神農氏は天文臺を築いて天體の觀測もやり、蒸溜機械で酒も造り、發電の材料たる石磷の玉も使用したのは争へぬ事實ではあるまいか、聖武時代大佛建立の當時ビルシヤナ佛に塗りつけた黄金メツキは百濟出生の佛工國中の連公磨であらうが、彼れはその祖父德卒國骨富の時に亂を避けて我國に歸化したものだが、百濟は西域庫車の片割れが東漸したもので電氣技術に得意の連中であつた。黄帝——はバイブルのアブラハムと同一人であつて、その黄帝即ち

アブラハムは釋迦が佛教建築の用材にした婆羅門族の一人である事を發見する學者があつて、耶蘇教も佛教もその親元は同一原流から出て來たことを知つても山の芋が鰻になつた程にも驚かぬ時代は今や世人の眼前に迫つて來て居るのではあるまいか。——黄帝が鼎を鑄たのは何の意味か、婆羅門族は西藏から出た種族であるが西藏一帯には遺物崇拜の習俗があつて其子に家督を譲らうとするときには必ず金器相傳の式がある、西藏から婆羅門と俱に出たシキテン族は三種の神器ならぬ四個の金寶として鋤、耨、斧、盃を傳へるのである、釋迦の如きも其の妃耶輸陀羅女より國王相傳の四個の金盃をその子羅喉羅に傳へんことを乞うたことがある、後世佛教徒が衣鉢を傳へることを稱するも其の經路が何ういふ風に廻り廻つて來てゐるかを一考する人はあるまいか。——黄帝が龍に乗つて上天したといふのは駱駝に乗つて遙々と故郷に残した女房や息子や孫の顔をみに若水くんだりまで出かけたのであるが、この駱駝はその當時鄯善國に多しといふことが前漢西域傳にみえてあるが其のシャン／＼とはサラブサン川のサラブ族が東方に移住した後其の原住地を名乗つたものではないか、シャン／＼はサラブサンで又の一名を樓蘭といふのはラブルハムといふ彼れが東漸後の稱ではあるまいか、ラブルハムは黄帝の系統で西藏種族の最高貴族で、ラブノールの湖邊に住したブルハン族のことではないか、ブルハムは漢字に音譯して婆羅門で、いま西藏の西南に藩屏たるクルガ族が即

ちそれではないか。——上野の博物館にならべてあるキリシタンパテレンの押収品をみたものは聖母マリヤの像が觀音の像に酷似してゐるのに驚くであらうがそれは何を語らんとするものであるか言葉の變化は宇宙の祕密で、一切の神祕が言靈の中にこめられてあるが、釋迦の母もマリヤ、耶蘇の母もマリヤそのマリヤは一人の固有名詞でなく古代の原始的宗教に於ける水神に奉仕する女の名である。觀音は元南海フダクを司り、フダは水のブツから來て、甘露水を以て衆生を救ふ意義、フダの原音はブルタで、ブルの轉はムル、マリと働き、マリヤは水宮の事である。太陽を拜し火を拜した古人は清い水のあるところが生活上の根城にもなり靈地ともなつた、火を守るものも尊く水を守るものも尊かつた、耶蘇のバプテスマも佛教の灌頂も我が水祓も本源は赤の他人ではないのである、水宮の神事の時刻におちごに出た娘はその祭事に關與せるタンクト族の博士のために徹底的のまじなひをせられて耶蘇を生んだ、その博士は耶蘇の生れる時期を見計らつて生れた子供の顔を見に行つたことはバイブルの中に頗る藝術的に書かれてある。古典を読むものは眼を高くつけねばならぬ、ハカセ(博士)は元來いま蒙古に存在せるバクシを音譯せるものでフィシユンを方士と譯したと同じ筋のものである、その根本は西藏語のマハカシバから出たものでマハは大、カシバはカシクで日本語の賢もこれである、サンスクリットの摩訶迦葉も同音同義だ、古代の博士の職掌は印度に於て摩訶迦葉が頭陀の業をとり、我

國でも陰陽博士が宗教的方面にあづかつた如く、始皇時代の博士が神の素性を講釋せるが如くいづれも神人感合の問題を看板にしたものだがその中には隨分如何はしい人格のものも少なくなかつたことは争へない、タンクト族は博士の本元(本元の本元は別として)たるアカチス人である、バプテスマの淵源は西藏で、西藏では七月十三日から八月五日まで天幕を張つて河岸に至り、親近者擧つて男女同浴する、その川の名をブルフマ、ブットラといふ、ブルフマは梵であり日神であり後に造物主のやうにも譯せられるやうになつた、ブットラは水だ、西藏人のこの水を尊ぶことヨハネの徒のヨルダン川に於ける如く、シバの徒のガンヂス川に於ける如く、回々の徒のゼムゼムの水に於ける如く、大本教の由良川に於けるが如しである。ブルフマは又たオスルとも云ふ、スルはソラで天だ、ヒルの轉シルから出たもので太陽の譯もあり梵語のスリヤがそれである、ブットラは又たマウスンとも云ふ、マは太、ウスンは水、つまり綜合すると日大河(出雲の簸川の轉)である、回々教のウスルマサンの咒文の本で、ブットラがバイタラと轉じバイタラが彌勒と轉じて佛教のミロクの本地となりマサンがマサー、より耶蘇のメシヤと轉じたので言葉は宇宙の祕密である、ビルシヤナは實はビルシヤナラで、ビルシヤは太陽、ナラは大水、やはり日の大川だ、これを佛教では大日如來にまで洗鍊して行つたのである。耶蘇教では其の川上の一山名をとつてキリストを出した、キリストはシバ教の神の居る山の

名、それはブルフマブツトラの上流カイラス山の上だ、カイラスの山名が神格化したのがキリシナでナ行とタ行は萬葉にも例のある如く相通音でキリストとなつた、キリストはシバ教では人格具體の名詞としたが根本は法王といふこと、それをヘブリウではメシヤといふ、メシヤは梵語の菩薩がモサーとなりメシヤとなつたので希臘譯でキリストとなつた、キリは大、ストは梵語の薩陀で、つまりキリストは大薩陀のことだ、即ちメシヤキリストとはボサツマカサツといふだけのこと、この佛教的傾向を猶太へかつぎ込んだ苦勞人はエツセネの徒で、それから少し面目をひねり直して打つて出たのがバプテスマのヨハネであつて、それを又た改革したのがナザレのイエスで彼れは表面は大工の倅ではあるけれど本統は宗教的素質のある東方の博士（出口王仁三郎とか多田青蓮とか飯野吉三郎とかいふ風な）の血を受けてゐるので驚くべき天才を發揮するに至つたのである、その東方の博士とはウバニシヤツドの畑に育つた婆羅門族の中の一人であつた。チャンパーレン氏は基督は猶太人でないと論じてゐるが實は婆羅門の博士の子である、キリストのヘブリウ稱號メシヤとは膏を塗つて王位についたものことになつてゐるが、膏を塗るのは西藏の國風で、今日でも同地の上流婦人は顔に白粉を塗る代りにトウイチヤといつて赤褐色のねばり氣ある藥液を塗るといふ話だ。上古此の地方では王者とか貴族とかいふものはバタを塗つて肌の荒れを防いだもので黄帝の黄も實はアブラの色から云うたものであ

る。言葉の祕密を知らぬものには奇怪に聞えるかも知れぬがアブラといふ語は日本だけのものではなく蒙古でも油をアブラといつてゐる、アブラがオブラ、オヒラ、オイルに轉じたのが今の英語だ、黄帝はアブラハムであると前にも云つておいた。神奈川縣の大山阿夫利神社も實はこれから出てるんだが誰れひとりそれと氣のつくものもないのも浮世であります。——植物學者は西藏高原の植物が地続きの支那方面に分布せられずにヒマラヤを超えて琉球に入り我が日本本島にまで連絡することを説くが世の中は極めて神祕に組み立てられてあるので、私が往年一夏を過ごした日向の青島は全島悉く南洋植物で満たされてゐるが、その附近どこにもそんなものは一本もない。——キリストはカイラスの山名から出たといつたがカイラスの山名は實はカイラスといふ靈獸から出て來たので、この靈獸は毛の美麗なること油を塗つて光澤を出したやうだとのことだ、キリストは十二歳の時にエルサレムで神學博士と論辯してから三十歳になるまで踪跡をくらました、それは東方の博士たる實際の父に導かれて遠く遊學して印度哲學を研究したので、天才の彼れは虎に翼を得たるが如く、當時やはり東方で研學してゐたバプテスマのヨハネも深くイエスの非凡の識見と人格に敬服しひとあし先きに歸西して熾んに太鼓を叩いて前ぶれをやつてあるいたものだ。——日本の或る系統の神々が太古に於てアジアの高原で垂示せられた種々の思想や儀式は民族の移動と時勢の變遷のため、單純な植物が時代を重ねるに

つれて幾十百千種と變化して行つたやうに變遷して行つたが、それは必ずしも良い方面にばかり伸びて行くわけには行かなかつた、或る時代は種々の護持者、宣傳者のためにあやまられて非常な不淨なものとなつたり、甚だしく迷信的なものになつたりしたが、又た幾多の天才の蹶起や眞仙の指導によつて淨化發展したこともあつた、一たび衰へて又た興つたり、一たび西して又た東したりするうちに、いつしか全然別物となつて唾み合つたりすることもあつた。——耶蘇の十や佛教の卍や我が神道のもの、または十やも本來同一物でひとしく神の符であり、決して二千年や三千年の昔から始まつたのでなく極めて古い歴史を有つて居るので、現にこれらの神符は古石器代の骨に描かれた繪にも見らるること近來の考古學者が幾多の犠牲を拂つて研究した發掘物に立證せられつゝあるのである、吾れ豈に辯を好むものならんや。——海底の砂とも沙漠の砂ともみる人の心にまかせるが、かうして木に竹をついだやうな断片的の消息を並べたのは本書全卷を精讀せんとする人に、一切の先入主の思想を取り去つてもらひたいが爲めで、すべて何でも高等研究といふものは小さな習慣性偏見にこびりつかず、白紙となつて冷靜に考へて貰はねばならぬ、たとへば易の如きも文王が幽囚中の作だといつて、一切が文王に始まると考へるやうな人には何を語つても駄目だ、その遠く由來するところの秘義に達せばそれが直ちに大光明を發して宇宙の秘機をも探るべしであるが、それでなければ小さな周代の思

想の一體系に過ぎぬものとなつて了ふ。兩部神道の徒でも山伏のヤマが役所の義であり、フシはアラビヤの道術者フイズの轉であり、支那で方士フアイシとなつたことをも知らずに伏して修行するから山伏だらう位ぬ俗解をして山伏に對して野伏まで拵へた時勢の變は雲間の白鶴ならでは知るものも稀れであらう、日本人でありながら日本の古典たる古事記や萬葉の訓註さへ不完全極まるものであるから無理からぬことではあるが、梵語の漢譯などになると一層滑稽なもので、タタガタを譯して如來にしたり、アシユカを譯して阿育にしたり、それに段々理窟をつけて妙なものにしたのであるが、タタは父でありガタは神で、タタガタとは父尊または父神、父なる神といふ義であるのにそれを「如が來た」とか「來れる如し」とか説いて甚だしきは如とはつまり今日の電子のことだぞとかしこがる學者の説が立派に通用する世の中である、アシユカも實は石神といふだけのこと、若し印度最古神の一たる阿修羅は波斯の善神アブラと同じだと云ふなら何によつてそんな轉音があるかと疑ふかも知れんが印度の北音Sを波斯は南音shにひゞかせただけのことヒマラヤ山とシマラヤ山とが同じ山であるのと同格の轉である、修羅は實は日本語のソラで其れに不定冠詞の阿をくつ付けたのがアシユラだ。ヒマラヤは氷室山ヒムロヤであり、ヒモロギは靈山の木の枝に肉をかけて神を祭り、鳥が來て喰へば神の使ひが嘉納せられたものと信じた當時の習俗でヒモロギは一名をトリキといふ、その用材の木に移つたのが英

語ツリーの源で、その用材の石に移つたのが日本語のトリキで、トリキとは鳥の居るところだ、古代に於て木造家屋に住んだものが却て石を尊重し、石材の多いところのものが木を尊重したことは考古學者も認めるところである。後世の學者がヒモロギや鳥居についても色々の高尚な説を立てたのは面白い説ではあるが架空な面白い説である。こじつけの高尚神祕の解釋をしなれば神々の有難味アリガタミがないやうに思つてゐる頑固な神道學者の説は、人間といふものが神の子である事を實際に知つてゐないため、神を崇敬せんとして却て神にそむくこと千萬里であります、人間といふものが如何に神祕なものであるかがわからぬ學者は、わが神道者ばかりでなく佛、道、耶、回、いづれも同じ秋の夕暮である。毎日々々朝から晩まで神前で祝詞を奏上してゐるも悪いことではないが、靜かに裏の畑で大根の一本でも作つてみたら却て神性や神徳が體驗されて、限りなき神の榮光に歡喜することが出来るであらう。日本もモウ大正十二年だ。

地上一切の人類が平等公平に神々の恩寵に浴してゐることは勿論であるが、今の日本國は今の地上神界御活動の中心的機關であり、日本國の今日あるは太古よりの神界の經綸の發展に外ならぬものであり、しかも今や地上人類は驚く可き一大時機に迫られて居り、わけでも日本人は今、特に神に歸ら

なければならぬ大切の瀬戸際に迫られて居るといふことは私が年來の主張であります。もう大機も日に迫つて來て、かれこれ談論を許さぬ場合であるので、この一書も突如として世に現はれんとするに立ち至つたが、言はんと欲して忌み憚るもの多く、馬を指して鹿とは説かぬまでも言々句々に賊機が伏せてあるから、本書を寝ころんで漫讀するものには何の意味をも爲さぬが、こんきよく最初の一字より最後の一字まで一字々々字相字眼に着手し、くり返して心讀せられる間には、平々白話の間にも髣髴として好風景に接する怪しからぬ人もあらうと信じる。私は日本を世界の宗國といふが、いま世の中にありとあらゆる目ぼしいものは物質的のものにもせよ精神的のものにもせよ何も彼も今の日本の國土から出たものであるといふ程の野暮漢ではないのである、たとへば我國が瑞穂の國の國號を負ふところ、我が國民の主食物たる米の如きについても多くの神道者のやうな頑迷な説は持ち合せてゐない。何も米に限つたわけでもないが私はいつも「日本は床の間だ」と話して聞かせることにして居る。世界を一家とすると日本は床の間である、床の間は一家の光榮の府であり權威福祥を維持するところではあるが、さればといつて一家は床の間だけでは成り立たぬので、臺所も書齋も玄關も寢室も便所もなくはならぬ、一家の物質的生活の本場は却て臺所にあるので、床の間に鍋も釜も味噌もあるといふわけには行かぬ。多くの頑固なそして實際に神靈の性質もわかつて居らぬ神道學者が床

の間で糞をたれるやうな議論は鼻持ちがならぬではありませぬか。——米の起原については古事記によれば速須佐之男命が大氣津比賣神を殺されたとき比賣神の身に生れるものとして蠶、稻種、粟、小豆、麥、大豆を擧げて示してある。これについて古來學者の意見は區々であるが少し風變りの面白い説の一つとして敷田年治の古事記標註をみると「爰に見えたる五種の穀物は此神の御身に生初て、其種を植繼ぎ、吾國は更にも云はず名もしらぬ遠き國人も此大神のみたまのふゆに免るゝものやはある、神の御所爲は靈しきものにはありけり、爰に思ひ合すべき事あり、文久二年の夏越後國頸城郡田麥村市郎右衛門と云るもの垣内の李に云ひしらぬものおびたゞしく生たり、形は豆莢に類て色は膏藥の黄ばめるごとくなり、其内に米粃、大麥、白大豆、青大豆、小豆、稗、蕎麥の類ひ二三粒づつあるを其地を預り知れる大草太郎右衛門より夫れ／＼桐の箱に納れ其由を書き添へ、徳川氏へ届け出しは其年の六月廿三日なり、年治疾く聞きつるまゝに其日の未明に江戸本郷弓町なる太郎右衛門が第に行て、手に取り見たりき、是れ即ち神製にして今のうつゝに神の御所爲のあなるに合せて神代の神態のおぼろげならざりしを思へ」とある。これは如何にも結構な説で私もその事實を勿論承認するものであつて其れ位な神異の事實は少しも怪しむを要せぬ次第である。けれども古事記にある此の稻種の由來は今少しく深く解釋しなければならぬと云ふ天行居の立場から遺憾ながら敷田大人と所見を異

にして居るのである。神々の奇靈なるみはたらきは固より今日の普通の學者の考へてゐるやうなものではなく、たとへば古代の交通にしても必ずしも舟がなければ海上が渡れぬとか駱駝がなくては沙漠があるけなとか云ふ不便なものではないので、神通自在ではあるけれども、併し此の國土を修理固成し文化の基調を開かるゝについては深き神慮の發展に基づくもので、粒々辛苦、今日普通の人間が努力するやうな手続きと手段を以て長い／＼年月を費して努力せられたもので、後代の民草を神習ひに習はせるため、事情の許す限り所謂不思議を行ふことを避けしめられたもので、この秘義を知らざるものとは到底俱に語る可らずである。この秘義に徹せざるものが兎角いつも理窟をこねて、全智全能の神が、どうして今日の如き不完全な社會を存在せしめられるのか死後の審判なんて面倒くさいことをせられるよりも一切の悪人をこしらへぬやうにせられた方が便利ではないかと云ふやうなことを言ひ出すのである。稻及び米の稱呼については學名(羅甸語)では *Oryza Sativa* (オリザ、サテバ)となつて居り英吉利語で *Rice* (ライス) 獨逸語で *Reis* (ライス) 佛蘭西語で *Riz* (リツ) 伊太利語で *Riso* (リン) 和蘭語で *Rijst* (リット) 西班牙語で *Arroz* (アロツ) 希臘語で *Oruzá* (オルザ) 梵語で *Ushit* (ウリヒ) 波斯語で *Brizi* (ブリツ) 亞刺比亞語で *Bouz* (ラウツ) 亞富汗語で *Ursh* (ウルシ) となつて居る、日本では和名「イネ」は古事記に「伊禰」日本書紀に「伊奈」又は

「之禰」日本紀に「ニヒバリ」大神宮前記に「ナヤゾラ」諸國貢記に「トネマノムベ」匠材集に「タノミ」藻鹽草「にタノミグサ」藏王集に「スメラミグサ、タミノハグサ、アキマチグサ、」黃傳抄に「ヒカゲグサ」日本武尊筑波記に「ツクバグサ」來朝異事に「トミグサ」など見え、支那の稻及び米の字については古來幾多の研究があるから茲には省くとして、埃及では米のことをアルス、又はルスと稱し、印度各地の方言でアリ、アリシ、ウリ、ウール、ウルイ、ネバリ、ネルーなど云ひ和名ウルシネはアフガニスタン語のウルシに最も近いが、要するに各國の名稱を綜合して考へると梵語のウリヒから轉じたものであることは争へないと思はれる。稻の原産地はどうしても亞細亞南部であるらしく、植物學者の意見ではアフリカ其他にも稻の野生種があるとのことであるが恐らく南方アジアから移つたものであらうとの説が有力である。エフ、ミュラー氏によれば濠洲にも原稻があるとのことだが、これについては學界でも大分議論があるらしい。モリソン氏は東印度に野生稻を發見し、ロツムスバルグ氏も東印度のサーカス湖畔に自生稻があると言ひ、十八世紀末アーチエル氏も東印度で野生稻を見つけたといふし、トムソン氏は東印度モラダバッドで發見したといふ。中央アフリカのセネガル地方が稻の原産地だといふ學者もあるが、やはり印度のインドス河畔あたりが原産地だとする學者の主張がおだやかなやうに思はれる。さればと云つて印度のスイキム國の本名レエジョンが瑞穂國と

いふ意味であり其の北方トルム峰上の巖窟に天孫降臨の遺跡あることなどに考へ及ぼす必要はない。稻種の我國への傳來は日本書紀の記事が適當なヒントを與へてくれるが、その種類も各段にわかれて二様にも三様にも輸入せられたやうである。天孫降臨以前出雲地方の開拓者の間にもすでに米作が行はれて居り、天照大神が、狭田、長田に稻を植ゑ給ひし事實もあり又た海神が彦火々出見尊に訓へて兄神が高田を作り給はゞ尊は下田を作り給へというたやうなこともあるから日本に於ける稻の耕作はよほど古く、少なくとも五六千年以前であり或ひはモット／＼古い時代からであつたものと信ぜられる。印度方面の土人が野生稻を喰つてゐたものを取りよせて耕作せられたので恐らく耕作といふ點では世界で日本が最も古い歴史を有してゐるやうに思はれる。支那でも三千年の昔、周代に米作のことがあつたのは史實に徴して知るべく、歐米では東洋のやうに米食の風が行はれないから米作は今日でも餘り振はぬがその歴史も比較的新しい、歐洲での先づ米産地たる伊太利に稻種の入つたのは西暦千四百六十八年で、その以前にバビロニヤ、シリア等を経過して波斯、アラビア、埃及を経て地中海方面に移つたのさへ西暦六百年以後であらうといふのが大體に學者の意見の一致してゐるところである。希臘に傳はつたのは亞歷山大王の遠征後である。北アメリカの如きは最も新らしく一千六百四十七年初めてバージニア州に輸入し、その後四五十年してからカロリナ州に移して成功したのが今日の

有名なカロリナ米で、その前途は益々好望であるらしい。今日の米産地を産額の上よりみればやはり印度が世界第一で二億五千萬石以上で毎年約一千五百万石を輸出して居る、日本は産額は第三位で五千萬石位のであるが、品質に於てはさすがに天下無雙だ。稻の原産地が今の日本國土でないにしても瑞穂國の光榮には何等の動搖も來すものではないのであります。

朝鮮は二百年後に沙漠になる、そのやうに世界は各地とも精神的にも物質的にも大變革が行はれるのであるが吾々地上の人類は今、二百年とか百年とか五十年とかいふ將來の問題でなく、極めて近い將來に大いなる謎を釋かねばならぬ運命に逢着して居るのである。それがために此の「天行林」一巻が微力ながら相當の使命を帯びて世に出て行くのである。本書は今神のことを彼れ此れ申すことを禁じて居る。さういふことは紫雲遙かなるところに仰ぐにとどめて、各章ともひとへに人間を主材に語らんとするもので、しかも賊馬に乗つて賊を逐ふわけでもないが努めて他者の言説を籍りて我が大道の一端を示さんとするのである。できるだけ佛耶道儒乃至今日の自然科学の材料及び言説を假りに用ひて、事を辨ぜんとするのである、傳家の寶刀は主人今日は腕短かくして使ひ難し、自携瓶去沽村酒、還來著衫作主人、これ天行居の暗號密令である、舶來のナイフを以て今日の御馳走を料理せんと

するのでありますから不^{かて}手^{まは}際の點は幾重にも容赦をして頂くことにする。——昨年鹿兒島の高等農林か第七高等學校かの先生が墓の大きな奴を一疋捕獲してこれを切開してみたところ、その腹の中から中指大の長さ一尺五寸の蛇が現はれた、何しろ學界に前例のない珍事だから参考標本として保存するといふ新聞記事を読んだ記憶がある。天下の人心は今や古聖の危言微辭に驚くことを忘れたから斯うした默示も與へられるのである、人は金錢と獸的慾望を以て頭のさきから足のつまさきまで満たされ、あらゆる宗教も今や殆んど無力で大きな寺や殿堂も白晝の怪物に過ぎないではありませんか。甲も乙も丙も丁も、總ての人々は之からドツチへあるいて行かうとするのか。

丑 林

本來からいふと人にも物にも死なるものはない。死なるものは人の神變の一現象に過ぎないものである。「死は神變也」とは天行居の標語の一つである。しかし兎にも角にも死といふ現象が何者の上にも行はれて居る、それは何者の上にも生の現象が行はれて居るのと因果關係必然關係にあるので、本來は不生不死なるものであるが、不生不死なるが故に生死の現象があるとも言ひ得られる。何にしても表面上誰れひとり死なぬものはないやうに見える、そして此の死といふやつ、甚だ奇妙なやつで想像や推理や、記憶の鋭敏な人間といふいきものは殊に死を危ぶみ、死を怖れる、毎日太陽は西山に没するやうにそのわかり切つた必然のことでありながら人はその死のために惑はぬものはないやうである。自分は別に死といふものについて何等の不安も恐怖も遺憾もなく、殆んど死なるものを考へたこともないといふ人でもその人が意識して居らぬだけのものではやはり死について不安を懷いて居らぬものはない、日常の生活について常に精神が平靜、快活でなく何者かに曇らされてゐるのは、その心の底の底に死に對する準備の出來てゐない證據で、表面は金錢問題とか衣食問題とか事業上の問題とか社交上の問題とか家庭的の問題とかの爲めに思ひが絶えぬといふ人も、靜かにその由來するところを

徹底的に探つて行くと結局やはり死に對する精神上なり物質上なりの準備の不完全から來てゐるので人はたゞに自分が重症に罹つたときばかり死の問題に悩まされるものではないのである。而して死及び死後といふものをつかりと見究めをつけて置いて其上でのことでないといふ事も皆な嘘でありませぬ。氣がついて居ないだけのことです。日々夜々、人といふ人は殆んど目前に突ツ立つてゐる死といふ暗い影のために悩まされ通しに悩まされてゐるのである。「昨日まで人のことぢやと思つたにやが死ぬとはこいつたまらぬ」と昔の滑稽な坊さんが歌つたさうだが、先づ試みに、自分が今、重病の枕にいたとして考へてみるがよい。或ひは深夜強盜に襲はれて縛りつけられて胸先きへ三尺の秋水をつきつけられたと假想してみるがよい、何の不安も恐怖も思ひ残すこともないかどうか、自分の死そのものの苦痛はともかくとしてあとに残した女房子供や老いたる父母や財産や事業やの上に乗まで考へ及ぼしてみても果して何等の心を曇らせるものがないかどうか、噂話でなく眞剣に深くこれを考へてみなければならぬ。又自分の死を考へた次ぎに今度は家族なり自分の親方、益友、資本主といふやうな者の死を考へてみるがよい、死は神界の忌み言葉だといふことを曲解して、死の問題を考へまいとするのは卑怯な人間である。死といふものについて徹底的の見究めがつかぬうちは、何事をやつても皆うそごとで、この土臺の上からしつかりと踏み立つた人でなければ大小公私とも人間らしい人間とは

申されぬ。愛兒がまさに死に瀕したとき、その兒の死後は果して如何と考へぬ親はあるまい、死とは眠つたやうに何も彼も一切が消えて了ふのか、それとも靈が存続するのか、存続するとしてもどのやうな風に存続するのであらうか、佛教の地獄極樂といふやうなところへ行くのであらうか、耶蘇教の天國や地獄といふやうなところへ行くのであらうか、神道者のいふ高天原とか根の國とかへ行くのであらうか、そして何れにせよ其の存続は精神的の存続に過ぎないものであらうか、やはり現界のやうな風に肉體のやうなものや衣服のやうなものや色々な娛樂機關などもあるところであらうか、うまく行つて神様やアミダ様のおそばに行つたとしたら却て窮屈で困りはせぬであらうか、極樂へ行くよりもやはりカフェーや活動寫眞や鰻飯のある現界の方が戀しいことはなからうか、もしも自分が死んだら先きに死んで行つた家族のものや友人などに會へるであらうか、日本の神仙界に出入した人の消息や西洋のレイモンドなどの幽冥界から通信した消息や古來支那や印度で行はれた他界の消息や佛教信者が數日間死んで一旦蘇へり死後の極樂莊嚴の光景を物語つた消息や、あれやこれや區々まち／＼であるが、果してどれが本統のことであらうか、あんな色々な消息は何等か關係者の一種の精神作用か何かであるか或ひは横から妖魅の類が演じた芝居に過ぎぬことで實際は全く無いことではあるまいか、やはり人間は死んで焼かれれば灰になるものでツマリ一種の物質に過ぎぬものではあるまいか、

さうするとなれば待て／＼此世に居る間にやりたいだけのことをやつた方が得策ではあるまいか、食ひただけ食ひ飲みただけ飲み取り込みただけ取り込んだ方が間違ひのない幸福で結局かしこいやりかたではあるまいか、死後のことをかれこれいふのはつまり、方便に過ぎぬのではあるまいか——とか何とか人によつて色々な考へが起るに相違ない。死とはそも／＼何であるか、死後は實際どうなるものであらう、これがわからなければ人生は澤山の盲人ばかりが舵のない船に乗つて居るやうなものではありますまいか。何といふたより、ない、心細い、まッ暗くらなことであらう。いかなる國の如何なる時代の如何なる人も、何より彼より眞ッ先きに解決を要するは此の大難題でなければならぬ。死といふものに就て徹底的の見究めのつかぬうちは、いかなる智者も愚者も所詮犬や猫と異なる理由を發見することが不可能である。楠公も愈々討死といふ前日に楚俊禪師に見えられて、生死交謝の時如何と問はれた、禪師は截斷生死、一劍倚天寒と言つた、楠公ほどの人もいよ／＼自分が死に當るに就ては尙ほ多少の不安を免かるゝことが出来なかつたと見えて更らに畢竟如何と詰問され、禪師大喝して無生死と喝破するや楠公背汗淋漓始めて徹底せられたと傳へられてあるが、先づ自分の死、父母妻子の死、國民の死といふところから考へて、切實に、噂話にならぬやう適切に眞面目に眞劍に考へて其の上に、その基礎の上に築き立てた靈學でないといよ／＼の場合の役に立たぬのみか印度あたりの魔

術使ひと擇ぶところなきものとなつて了ふのであります。これはひとり靈學といふ特別世界の問題であるばかりではないので、一切の人間生活の事業、大小公私を問はず此の眞劍の處から叩き上げたものでなければ駄目である。大西郷は大膽識と大誠意とを以て天下に立つた偉人であるが「金もいらぬ名譽もいらぬ生命もいらぬといふ人間は手のつけられぬものであるが、此の何うにも斯うにも手のつけられぬ人間でなければ本統の仕事は出来ぬ」と常に言つて居たさうであるが、これは深く味ふべき至言であると私は信ずる。その大西郷は青年時代、三尺の秋水を天井から糸で逆しまにぶらさげて、その下に顔が丁度刀のキツサキのところと五寸位離れるやうに仰臥して修養されたといふ傳説があるが、これは必ずしも戰場に於ける膽力を練る爲めといふやうな軽い意味のものでなく、「死」といふ千古萬古のスフィンクスに對する眞劍な、徹底的な用意の工夫であつたらうと思はれる。死といふものを眞劍に深く考へて大疑團に取り巻かれ、それを口頭や文字で古人の眞似をして解決したといふのでは駄目で、眞劍に此の問題にぶつかつて、白汗通身で此れをブチ抜いたところでないといふ實際の靈の問題などは話せるものではないのである。たゞ或る種の術の極意とか祕傳とか言ふものを授けられて、少しばかりそれに修練が出来て多少の神通が湧いてきたからとて、所詮それにどれだけの價値のあるものであらう。基礎工事の不純な不完全なところへ建てた家は、たとひ其れがペンキで廢木を塗り

つけて一見美觀を呈したにしても一朝の風雨に叩きつけられて了ふので、沙上の樓閣と擇ぶところはないのである。世を救ふは愚かなこと、或ひはその身一つを救ふことさへも聊か疑問であります。

明治十年後、肥後の豪傑上田久兵衛が長崎で刑死に臨み、一寸待てと聲をかけた、さすがの豪傑もおくれが来たかと思ふと莞爾として、イヤ小便がつかへた、同じ死ぬなら快く死にたい小便を垂れさせてくれと言つた。彼れは死といふものを何う見たか、鎌倉あたりで安物の印可を受けた野狐禪者流も平常は大きなことを言つて居るが、さて愈々眼光落地と来た場合随分と見つともない醜態を演じさうなのが其處らあたりにごろ／＼して居るやうだ。——天保二年信州飯田侯の奥女中のふちと申すものが二十二歳の時、侯の愛妾某が國政を紊り誅求を事とし領民百姓は塗炭の苦に陥つたのを憂へて、愛妾を刺殺して禍源を絶つた、申す迄もなく殿様の怒りにふれて領民百姓擧つて命乞ひをしたにも拘らず刑死といふことになつたが、その時にも此のふちが一寸待つて下さいと云ふ、死を送る爲めに雲集した人民は、「あゝ如何に烈女でも女は女だ、おくれたか」と思ふと、彼女はおもむろに「お恥かしながら月經の不淨があります、願はくばしばらく御免下さい其の始末をつけ刑に就きます」と言つた。元來月經といふものは多少の驚きがあつても止まるものであるが、死をみることに歸するが如き漢でな

いと此の落ちついた舉動は出来ませぬ。吉田松陰先生が刑死の際墨丸がのんびりと垂れてゐたのと好一對の佳話でないか、こんな涼しい話は聴くだけでも三伏の炎塵を洗ふに足るやうだ。平田篤胤門下の矢野玄道翁なども、無病ではあつたがあらかじめ死期を知り、知人に通知状を出して御馳走をしてその席で身を淨めて悠然と甘睡に入る如くに歸幽せられました。

死といふものを考へるには先づ生命の本體なるものは何であるかといふことを知る必要があらう。此の天行林一卷は私の從來の同志に示すばかりでなく反對意見を持つてゐる人達にも見せる豫定であるから、今此處では自然科学の方面から此の問題に觸れてみたいと思ふが、それについては電子説を以て説くのが便利であり十人向きのやうであるから電子について簡短な敘述をすることにする、ア、電子かと思はずに百も承知の先生達もしばらく茲に傾聴せられるだけの雅量があつて欲しい。先日の倫敦電報によると、米國一流の外科醫であるクリーヴランドのクライル博士が人間電池説なるものを發表した。それによると、生命をその起源にまで遡ればそれは水素原子と陰電氣の原子との結合であるといふので、同博士の説によれば人類も其他の動物も共に無數の細胞より成り立つた電氣化學的構造物であり、そしてその細胞は小さいながらも陰陽兩極を有する電池であつて兩極の間には普通人工

的の電池と同じく異つた壓力が通じて居る、たゞ異なるのは人工の電池に比すれば此の有機細胞は高度の電氣量を受入れ且つ保有することが出来るのである。細胞より發するエネルギーは人及び動物にその身體を動かす力を與へる。最も重要なことは各細胞を常に飽和せしめねばならぬが休息及び睡眠の間に飽和状態は恢復されるのであつて、有機體を動かす電池の電位差も一日中の活動で減少してゐるのを此の間に恢復するのである、そして死は即ち完全に飽和された細胞が平衡したことである。電池の陽極は腦髓であり陰極は肝臓であつて兩極の聯絡線は即ち神經である、そして肉體が刺戟物有毒物または天候氣温の影響を受けるに従つて體温と共に肉體の電氣状態にも變化を來すことが證明された、殊に恐怖又は憤怒の情に驅られた時には陽極たる腦髓の電位が高まり、陰極たる肝臓の電位が下ることが實驗された。以上はその要領で、ロンドンで開催された國際外科學大會の席上、クライル博士は幻燈を用ひてこれを説明し、水素原子と陰電氣原子とが無機より有機に進化して行く有様を示し、吾々人類も徐々に今も尙ほ向上進化の過程にありと主張したといふことである。私は今直ちにクライル博士の説を丸呑みに渴仰するものでもないが面白い研究であると思ふ。それは兎も角として先づ今日の學界の定説になつてゐる電子説について當面の問題を瞥見したいと思ふ、私は電子も單原的のものでなく其の奥に玄子とも稱すべきものがあるといふことを一昨年出版の「靈學筌蹄」に主

張し、今日も依然その信念を有して居るのであるが、アインシュタインのAの字も日本の學界に紹介せられざる時に於て第四容積論を私が發表して世の嘲罵を受けたと同じくこの玄子説は今日のところ地上に於て私ひとりきりで合點してることなので、一般の學界に通用するにはまだ十年早いから今は矢張り今日の學界の定説となつて居る電子説によつておく事に致します。

今日では小學校の子供でも皆な識つてゐることであるが元素といふものが發見せられたのは漸く百五十年ばかり前のことで、佛國のラバジエー等によつて提唱されたものである。元素とは水素とか酸素とか窒素とか金、銀、銅、鐵、炭素といふやうなもので段々にそれから其れへと發見せられて行つて三となり四十となり五十となり遂に八十幾つの元素が數へられるやうになつて來た。これらの元素の性質といふものは水素は水素、銀は銀、炭素は炭素と絶対に各別固有の素質を有してゐるもので其の大きさを量なり性質なり何れも一定不變のもので永久に變質することのないものといふことに見られて居たのである。こんな風に見られて居たから此の大宇宙間といふものは此等おの／＼獨立せる八十幾つの元素を以て一切の物質が組織されて居るといふのが例のダルトンの原子説で、原子は絶対に不可變性であつて化學的變化の單位をなすものであるといふことになり此れが爲めに化學は目ざましい

發達をして今日の地上の人類文化の生活に重大な關係を有する幾多の化學工業が行はれたのであつて、その效績といふものは實に莫大なものであります。併し其の代りに神だの靈だの中すものは全く痴人の思想上の遊戯に過ぎぬもので、此の宇宙間といふものは永久不滅の不増不減不變質の八十幾つの元素の消長活動であるといふことになつたから、人心の墮落はこれにつれて非常な速力で暗闇のどん底へと落ちて行つたので唯物主義の經濟學も築き上げられ、世の中は綺麗なキモノを着て綺麗な家に住んだ獸類の巷と化し、人倫も臺無しとなり、たゞの守錢奴と攻錢奴との鬭争となつたので其の餘波は今日の地上に益々熾盛となり、世界は今や其の爲めに懊惱して居る次第である。であるから此の先きに電子説が發見せられなかつたら化學者が世界を墮落させたことになるのであるが神の啓示に導かれつゝ研究を進める人間の智力は恐ろしいもので遂に電子説を發見するに至り、一旦神に離れた人は再び神に歸らねばならなくなり、科學は哲學宗教と出入融合せねばならぬ場合となつて來たのである。然るに依然として唯物論的證據から騒いで居る今日の勞資鬭争を始め多くの社會問題なるものは、それにたづさはつてゐる人達はイッパンの新らしい人間の積りであらうが實は今日の學問が如何に進み、眞理の闡明がどんなところまで達して居るかを顧みぬ時代おくれの憐むべき人達であります。さういふと今日の其等の人々は電子説位のは百も承知だ、承知の上で此の騒ぎなのだといふであらう

が、百も承知であつても一も知つて居ない思想に愚弄せられて居る目前の事實は何うだ、私と雖も今日の資本家の横暴驕慢をにくむことに於て人後に落ちるものではない、又た今日の經濟組織、社會組織を完全なものと思つてゐるどころか大々的に此れが匡正の必要を痛感し、從來これを絶叫したのは過去の政治的生活時代以來の終始一貫の信念で、普通選舉の如きも今より十六年前に於て天下まるで問題にしない時代から門司毎日新聞（當時社長眞野氏）の社説欄で嘔心吐血の論陣を張つた程であるが、併し今日の多くの世界的煩悶——社會問題——を解決するには唯物史觀から出てくる舊式（こせ）の思想では解決出来るものでない、眞理の示すところ、人智の進むところに伴ひて一段と高い（こせ）眞理に立ちて、眼を高くして解決の研究を要するのであります。鈴木某といふアメリカ戻りの青二才に煽てられて日本の勞働者が小使錢を捲き上げられて其上に監獄へ這入つたり出たりする間に鈴木某なるものは十數萬圓の淨財をふところにして何時の間にかブルジョアの犬か何かわからないやうなものになつたといふ話を聞いた。又た「死線を越え」かねた偽善者や普通人間の虛心坦懐でやる一寸したことをするにも奉仕とか何とか勿體をつけて廣告をする一燈園の化装せるゴロツキどもに隨喜の涙を流すやうな無智、無識、輕浮のともがらの多い今日の日本の讀書階級のアタマといふものは、おそまつと申すにも釣錢を貰はねば引合はぬぐらゐな始末ではありませんか。——さてダルトンの原子説

物質萬能謳歌の聲が天上下を蔽ひつくして世界は美しいキモノを着た半死の病人のやうになりかけた十九世紀の終りになつて、奇しくも妙なる神啓が、一物理學者の手にせる小さな真空管内に於て起つたのである。その人は英國の物理學者クルツクス氏であるが、氏は針金も何も入れてない真空管内に強力な電氣を通じてみると不思議な光體のちらつきの認め一層電壓を高めて行くと明暗一定の狀の現象を呈したので段々と研究を進めて行きますと、動力作用があることがわかり光線に似た性質があることがわかり磁氣作用を有することがわかつて來たが、どうも此れは摩訶不思議の怪物で何う考へてみてもその光線的物質は固體でもなく液體でもなく氣體とも受取れぬ怪物だ、いつたい固體、液體、氣體以外の物質は有り得ないことになつて居たのに、こいつはどえらいものにぶツつかつて了つた。さあ其れから色々の學者が其れから其れへと研究するやうになり大正十二年の春死んだレントゲン氏は去る明治二十九年（？）にエックス光線を發見した、又たケンブリッジのトムソン教授達の熱心な研究の結果此の怪物は宇宙間で最も軽い物質の窮極だと信じられてゐた水素原子の重量の千八百分の一ほどのものであることがわかり、一八九一年にジョン、ストーナーによつて電子と命名されたのであります。この電子の質量は一瓦の億分の一の其の又た億分の一の其の又た億分の一の千分の一といふのであるから殆んど考へ得られない位ゐるものである、假りにたとへて其の比例をみると、髪

の毛の太さ、針でついた程の此の髪の毛の太さの約一萬分の一が水素原子にあたるから此の水素原子の大きさが如何に小さなものであるか、想像されるが其の水素原子の直径の五萬分の一ほどのものが此の電子先生である。そして彼のクルツクスの最初に発見した真空管内の現象は此の電子即ち陰電子が陽極に向つて運ばれる現象だと説明されるやうになつたのである。この真空管内の放電現象は非常に興味を以て學者の研究するところとなり遂に一八九九年に至つてキュリー夫妻の手でラヂウムが発見されるに至つた。ラヂウムと云つても元素の一つなので、八十幾つもある元素が友達が又た別に一つだけ発見されたからと云うて左のみ驚くにも足りないやうではあるが、このラヂウム元素の発見によつて、すべての所謂元素なるものは従來の學說のやうに一定不變の性質のものでなく全動變化して行くものだといふことが詳しく判つて來たのであるから實に驚天動地の大問題であらねばならぬのであります。即ちラヂウムは一千年を経て其の半分はラヂウムエマナチオンに變化し、エマナチオンは三日目にラヂウムAと變り、ラヂウムAは僅か三分間でラヂウムBと變化し、Cに變化し更に一時間でDに化けて行く、Dは五十年でEに變りEは一週間でFに變りFも亦た段々變つて行つて、一瓦が百萬圓もするラヂウム元素は終には鉛にまで變化して行くのである、絶えず光線様のものを放射しつゝ段々と斯ういふ風に化けて行くのである。宇宙間に於ける化合物の數は如何に少なく見

積つても二十萬種類位あるさうであるが、それを一々分析してみると結局八十幾つの元素に還元されるのでその元素こそ物質構成の根源で幾千萬年経つてもそれ以上に分けることの出來ぬ絶対的のものといふダルトンの物質不滅論が忽然として茲に崩解して了つた。すべて元素なるものが何れも移り變つて行くものであることが幾多の實驗の結果わかつて來たので、さあ物質の本質なるものは一體全體何者であらう、この八十幾つの元素なるものは何か或るものによつて組織されて出來て居るものではあるまいか、彼等は何れも互ひに獨立したものでなくて或る種子があつて其の結合の加減で斯く八十幾つの元素が形を現はしてゐるものではあるまいかと云ふことになり段々と戸籍調べを嚴重にしてみると、とうとう正體が曝露されて來た、それはあらゆる元素なるものは總て陰電子と陽電子の組み合わせから成立して居り、陽核の周圍を陰電子がグルグルと飛び廻つてゐる姿であることがわかつて來た。前に述べたやうに元素の大きさは極めて小さいもので到底想像することも出來ぬところの億分の一程ほどのものであるがその元素を世界としてゐる陰電子の直径は其の小さな元素の五萬分の一であり、陽電子は又た陰電子の千分の一ほどのものであることが十露盤に乗つて來た。茲に愈々物質なるものの奥の奥の奥の靈々妙々なる本尊電子先生はすべての物理及び化學の方面からつきつめて行つた究極點であることになつたのである。各元素を組織する電子の數は勿論同一でないので、水素は一

1
つの陽電子の周囲を一つの陰電子が飛び廻つて居るのであるが、ヘリウムは四個の陽電子の周囲を二個の陰電子が運動して居り、酸素は十六の陽電子のぐるりを八個の陰電子が飛び廻つて居るといふ風であります。であるから物質なるものは一切が不連続性のものであることがわかつた、すべて物質を組織して居る元素なるものは、實は何れも陰電子が五萬倍も大きな直径の周囲をぐる／＼廻つて居るのでその内部はガラスドウである、丁度太陽の周囲を地球が廻轉してゐるやうなもので、この蒼々たる大空の如き大空の連鎖が物質なので、鐵でも銅でもどんなに質の密着したものでも實際はガラスドウである。穴だらけといふもをかしいが空々たるところを想像することも出来ないほどに小さな電子が悠悠と飛び廻つてゐるのである、針金に電氣が通するのも針金がガラスドウであるからこそ電流が通するのだといふことが始めてわかつた、その以前は針金に電氣の通する事實は誰れでも知つてゐたが其のわけがわからなかつたのである。斯ういふわけのものであるから神通現象も科學的に證明され得る黎明期に達したのであります。千尺の地下や金庫の中を透視出来るのも不思議であるまい。深山で大きな墓が激流奔湍を距てた谷から谷へ渡るときには殆んど眼にも見えぬ霧の如きものを全身から噴出しつゝ段々小さくなり、對岸の岩の上に一二滴の水滴のやうなものがポツリと出てそれが段々ふくれて墓になる可能性も多少のけんたうがつく筈である。と云ふわけは此の電子たるものは實は物質と

して取扱ふわけに行かぬので、それが常に動いてゐるからこそ其の存在を感じ得られるので、それが一旦靜止した場合には最早その存在を考へる事は出来ないといふので此れは學者間に理論的にも實際的にも既に實證せられてゐる學說であります。つまり黄金も綺羅の衣裳も樓臺も萬龍や須磨子の眸も鼻も紅唇も千鳥の香爐も内田信也の時計もコレラ菌も仁丹も一切のものが電子のばけものであるが其の電子なるものは物質ではないといふことを深く腹の底でちつと考へて、能く噛みしめて徹底的に覺悟しておいて貰はぬと私のいつも話してることがまるで判らなくなるから寢ても醒めても此のことを克く克く忘れぬやうに腹に入れて置いて貰はねばならぬのであります。十圓紙幣はその昔は花の咲いた木であるが今この紙幣を焼くと灰ともなり土ともなる、土をみゝすが喰ふとみゝすの細胞になるのもある、其のみゝすを鯉が食ふと鯉の細胞にもなる、その鯉を加藤友三郎氏が食ふと溶せこけた總理大臣の細胞にもなり、やがては小便にもなり、肥料にもなり楮の木にもなる。たとひ灰になつてもつめの垢になつても電子先生はまめそくさいで、活機凛々として大活動をつゞけて寸時の休息もあるものではないが、この火に焼いても斬つても突いても死ぬることのない電子は太陽系にも比すべき一大宇宙をなして居るのである。元來時間の觀念や空間の觀念は人間の主觀(妄想)で比較的のもので、普通の人間は水中に潛んでは五分間も辛抱が出来ぬが魚の感じには空氣の如く水の觀念のなきこと吾々が空中

にあつて何の感じのないのと同じで魚が水面を離れて空中に出れば吾々が水中に入つたと同じ感じである。「等しくこれ雨なれども天宮に落つれば七寶となり人中に落つれば潤澤をなし餓鬼の身に落つれば變じて大火となる、衆形に定質なし皆な罪福の所感に隨ふ」とは佛經の文句であるがそれに間違ひはない、眞智の眼より見れば大小もなく長短もなく古今もないので、粒よりも幾億萬倍も小さい電子世界も太陽系の如く其中に大千世界を包蔵して居るので、考へてみるとつめの垢でも靈妙不可思議のものとなるので、茲にも神通の妙機を捕捉することが出来るであらう。大宇宙は一大生命體の活動で、生死は固よりのこと其他一切の現象は大海の一波一瀾の起伏に過ぎぬことが合點が參るであらう。この不生不滅が惟神の實相であります。だいぶん鎮魂の一式を體驗してゐる白隠和尚曰く「臍の下に心しづめてよく見れば死ぬも生きるも大うその皮」。併し兎角安悟りは邪道に陥りやすく、一步踏みはずすと地獄に入ること箭の如しだ、所謂撥無因果になれば浮ぶ瀬はない、神道即人道で人間の道を踏みはずすと忽ち動きはとれなくなり神誅を蒙ること鏡花水月三界に免かるゝ隠れ家とては一軒もないのである。白隠は駿河の原宿に居つたが或る日箒に贊をして曰く「安悟り拂はんためのこの箒」とすると側にゐたおさんが直ちに其の下の句をつけた「先づ一番に原のはく隠」。ニュートン以來、物質があつてエネルギーがあり、虚空に充滿するエーテルがあるときまつて居つた。この物質、エネルギー

1、エーテルの三體を以て宇宙一切の現象を説明しようとしたのであるが電子の發見によつて物質は無に歸して了つた。ついで物理學によつて實在の如く考へられて居た「時間」と「空間」との二大怪物も實は單に便宜上の比較に過ぎぬことがアインシュタインによつて釋明せられ、エネルギー先生もやつぱり電子の一つの姿に過ぎぬことが明かになつた。ところが物質も電子、エネルギー(勢力)も電子としてみると其の關係がかしいではないかといふ大問題となつてくるのであるが、アインシュタインは物質なるものの上に行はるゝ法則はエネルギーの上にも行はれるものであることを主張し、星の光が太陽面をかすめて地球に届く時に其の光が太陽の重力に引かれて必ず一、七三秒曲ると言ひ出した、光線が曲るといふから大問題だ。そこで英國の天文學會は大正八年の五月にアインシュタインの主張を確めるため二組の天文學者を組織してアフリカ西海岸の沖合なるプリンシッパ島と北部ブラジルのソブラルに出張し皆既蝕を利用して天體撮影をやつてみた、實に學界は此の天下分け目の戦ひに固唾を飲んで其の報告を待つた。然るに其の結果は愈々天下を震ひ動かした、星の光は果して曲り、その曲率はプリンシッパ島では一、六〇秒弧度を示しソブラルでは一、九八秒弧度を示した、この二つの平均は一、七九であるからアインシュタインが豫言した一、七三に殆んど接近したのである、茲に於てか理論と實際の觀測が一致して眞理が實證されたのである。そこで眼に見ゆる物質なるものは見え

ざる勢力で出来てゐるものであることが明かとなり、いかなる物質でも其れに光線の速度を二乗すると完全にエネルギーになるといふ理が證明せられたので、物質もエネルギーも其の本體が立派に解決せられたのである。次ぎに残されたのはエーテルで、この世界いつばいに充滿して、力の傳達者と假定せられたものであつたが、これも學者の研究で名残りなく葬り去られ、今や此の世界には物質あるなくエネルギーあるなくエーテルあるなくたゞ至靈至妙の精の又た精、玄の又た玄なる電子あるのみとなつて來たのであります。つまり一切の物質と申すものは速度の變化で姿を變ずるだけのものであり其の一切の物質の根源たる電子なるものは物質を超越した「或る物」であつて、心とか靈とか精とか云ふより外に學者も手のつけやうもないものとなつて了つたのであります。

この大生命體（大宇宙）は一滴の水の如きものであり、その一滴水の中に行はるゝ一切の現象は本來不生不滅のものであると觀るのが惟神の實相で眞の神傳の惟神の古道に於ては格別きは立つた教へも科學も哲學も宗教もない大玄おほらなものである。人類が種々の妄想から生死の現象を喜憂するやうになつたのは漸く一萬年前位なものだといふことが神示にもある通りである。（靈學筌蹄所載の「夢感」参照）死は神變である。ラヂウムが鉛に變ずるのも神變である。這ふ蟲が蝶となるのも神變である。

たゞ神變であつて死でもなければ生でもない。萬有は如何に死にたくても死ぬるものではない、一切の觀念（一切の妄想也）を截斷すれば、たゞ一劍天に倚て寒きをみるのみである、元來心情ココロなるものは無いのである、心情ココロの無いのが魂コトの體である、強ひて形容すれば心情ココロなるものは靈魂上の波動に過ぎないものである。この無いものを有るやうに考へるのが妄想である。煩悶に煩悶をして居るので本尊には關係ない、病氣が病氣をして居るので本尊には關係ない、さればと言つて現に病氣をして居るために元氣も衰へ肉も瘦せ苦痛もあり何時死ぬかわからぬと云ふ、いかにも其の通り其れに間違ひはない、本體は本體、現象は現象、水は水、波は波、柳は緑、花は紅、親が死ぬれば悲しい、女房と一しよに寝ればぐあひが良い、あたりまへのことだ、水は水であたりまへ、波は波であたりまへ、妄想は妄想であたりまへ、病氣は病氣であたりまへ、迷中の迷悟は迷悟ともに迷、夢中の是非は是非ともに非だ、夏が來た暑い、あたりまへだ、天ぶらを喰べた美味い、あたりまへだ、たつた其れだけのこと、本尊に關係はない、であるから一切の妄想の波が靜まれば大宇宙は一滴水だから直ちに神通自在である。さあ斬るなら斬れ焼くなら焼け、本體様は斬つても斬れず焼いても焼けぬ、煮ても焼いても喰へぬのがお互ひの本體で天天下唯我獨尊と出てくるところだ。煩悶といふのは心情ココロがあるからであらうが、心情ココロといふものを引つぱり出して煩悶を除けるがよからう、洗濯シャボンで心情ココロを洗ふが

よからう、輕石かろいしでこするもよからう、湯ゆのしにかけるもよからう、その序でに心情ココロの寸法でも能く計つておいて、他人の心情ココロと取り違へぬやうに名札でもつけておくがよからう、それほど大切のものなら折角のことに人に盗まれぬやうに大事にするがよい。いつたい自分の心情ココロとは何者乎とキツト見究めをつけるがよいのであります。

とかく間違ひの起りやすいのは一を知つて二を知らぬが爲めである。電子が発見されたからといって八十幾つの元素はやはり八十幾つの元素である、やはり水素は水素に違ひない、酸素は酸素に違ひない、銅は銅に違ひない。世界は一大神靈の支配下にあると同時に八百萬の神々の神徳かんとくによつて守られ導かれて居ることを知らぬものは邪道に墮したものであります。また本來は不生不死であるから神眼赫々顯幽無しであるが、とにかく現象として死ぬることは間違ひなく死ぬる、昨日まで叱言こいごを云つて居た奴が物を言はぬやうになつて冷たくなつて醫者が死亡の診斷書を書くのをみると確かに間違ひなく死ぬるのにちがひなからう、さうしてみると却説、死後は如何となつてくる、それは詳しいことは近業「幽冥界の研究」に譲らねばならぬが、要點を一言しておかぬとけんたうがつくまい、諸君が一たび冷たくなつてから白いキモノを着て急に天行居へ問合せられることになること一々應接が面倒で

あるから其の災難よけのためにでも茲に一言する必要がある。からだは死んでも心は死なぬといふだけなら印度九十六種の外道の見解もたいいてい左うで、身は船のやうなもの心は船頭のやうなもの、船は破壊しても船頭は何時まで生きどほしで又た外の船に乗換へるといふのが例の心常相滅で昔は勢力のあつた學説だ、釋迦は此の心常相滅の妄見を打破する爲めに出たものと見てもよいので、身心不二（物質即精神、精神即物質といふ方が此頃の若い人には分りやすからう）の太鼓を叩いて三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別と絶叫した、このところを金剛經で應無所住而生其心とも謂ふ、此處までは見方によつて敢て異論もないが、さて禪坊主等が七つ道具の一つにして能く振り廻す長沙の頌「學道之人不識眞、只爲認從前識神、無量劫來生死本、癡人喚爲本來人」と云ふのを丸呑みすると飛んでもないことになつて了ふ、禪坊主は此れを斯ういふ風に説く「識神とは靈魂のことぢや、靈魂といふやうなものが身體のどこにかあるやうに思ふ、識神とは本來無いものぢやが其れをどこかにあるやうに思つて其の始末に苦しむから其れが却て生死即迷ひの種ぢや、この妄念さへ打破しさへすれば即得解脱で邪魔ものが無くなるから脱洒自在、身心脱落ぢや」などと吹き立て、棒をひねり廻して見せたりするが此の外道め地獄へ入ること箭の如しだ、さればと云つて西方淨土を講釋する程の風流漢も氣の毒なものだが、靈魂といふものは正に確實に存在する。心情ココロと

いふものは本来無いものであるが靈魂は確實に存在する。恰かも陰電子の周流する中央に陽核が存在するやうなものである。元來吾等の肉體を組織する幾億萬の細胞にもおの／＼靈魂が存在すると同時に一人の人となれば一人格をなせる靈魂が確實に存在する。そして人が死と假稱する神變現象を通過するとすると、肉體は或ひは灰となり土となると電子は活き通して種々相に變化活動發展して寸時も休止するものではないが、それでも生存中よりの因果律によつて其れ／＼の影響を受ける場合もある、而して生存中一人格をなした靈魂は何うかといふに、生存中の思想、言行等によつて儼然たる宇宙の神律に照らされ一人格のまゝに存続するものもあれば大靈に歸して了ふものもある。靈魂の人格的存続を生存中に信ぜず意識せず過ぎた人は善惡ともに大靈に歸して了ふのが多い、大靈に歸したものは大生命體に溶け込んだものであるから或るタイムを經過して神律のまに／＼何れにか化現展開する事もある、木にも草にも牛にも金魚にも火鉢にも人間にも石にもなる、佛教の輪廻轉生説も半面の眞理である、たゞ再び人間に生れ代るといふ事だけは特別の事情によるのである。さて人格的に存続する靈は必ずしも善人には限らぬ。格別の悪人や何か宿怨にこびりついてゐた靈も一時(或は數日、數ヶ月、數ヶ年、數百年)は人格的に存続して佛教の言葉でいへば生前の業を果し終るまで存続し、其上で大靈に歸して又た相當のタイムを經過して化現展開する、ひどいやつになると何千年間も人格的に存続

して居る惡魔も居るが、つまり其の間苦しむのである。比較的正しい人の靈で人格的に存続するのは此れも一概には言へないが縦にも横にも幾多の段階があり幾多の環境があつて幽冥大神の神律に照らされておの／＼其の然るべきところに安住して各自に仕事もあり趣味娛樂もあること大體に於て現界とあまり變つたことはないであります。現界と異なるのは警察、監獄、病院等の必要がないのみか衣食の爲めに苦勞する必要がないくらゐなものである。さういふと待て／＼其れではやつぱり死にたくない現界の方がよい、衣食の苦勞といふが苦勞してこそ樂みもあれだ、馬關の河豚、廣島のかき、長崎のカステラ、大阪のまむし、東京の天ぷら、さては三越や白木屋の陳列あつてこそ生活も趣味あれ、衣食の心配のないやうなところは氣樂は氣樂かも知れぬが眞ツ平御免だ、と尻をまくる人も有らうが、それは猫が雪舟の山水畫を見ても何とも思はず鮎が寶石を見ても何の感興をも起さぬのと同じで、人が次ぎの世界に行くと趣味も娛樂も藝術的氣分も一新變化向上して行くので、とても其の心持ちは只今考へてみるやうなものではないのである。又た飲食物や衣服が無いのではない、そのために苦勞することがないといふだけのこと、少し語弊があるかも知れぬが、謂はゞ何でも好きなものがあるのである。さういふとそれではつまり夢をみてるやうなものではないか、それよりも現界で一升が一圓八十錢の酒、一尾が二圓五十錢の鯛、このまちがひのないものを飲んだり喰つたりする方がよ

いといふであらうが、夢といふなら現界も皆な夢だ、人は夢に生れ、夢に勉強し、夢に結婚し、夢に苦勞し、夢に病氣になり、夢に死ぬのだ、釋迦は夢に悟り、有島武郎は夢に首を縊つて夢に蛆を湧かした、カイゼルは夢に戦争して夢に敗北し、原敬は夢に首相になつて夢に兇刃に斃れたのである。電子的宇宙觀から能く考へ合してみるがよい、元來冥幽界といふ文字がいけないので、「次ぎの世界」又は「眞の世界」といふべきで、その次ぎの世界からみれば現界の人々こそ夢をみてるのである。電子説のいふ如く一切の物質、勢力、精氣は實に電子の一如に歸するので、この電子は物質でもなく、靈とも妙とも精ともいふやうなものであり、その數の加減で一切森羅萬象が出来るのであるから、死後もしばらくして現界の肉體のやうなものが出来、衣服も什器も山も川も樓臺も書畫も何でも必要なものを與へられるのである。それは決して普通の意味に於ける夢のやうな現象ではない、實在である。吾々が今、山や川や衣服や新聞紙や女房や座蒲團をみて實在と言ふならば、次ぎの世界の第一層の確實味のある實在であります。又た一口に幽冥界というても、仙界の如きは次ぎの世界と此の世界との中間にあるやうなもので（語弊があるが只今適當な言葉と思ひつかぬ）死後の第二の人間の居るところとは限らぬ、又た其の仙界にも種々の段階もあり地方的色彩もあり且つ現界が時代と共に甚だしく生活状態が變遷するやうに仙界の環境も變遷しつゝあるやうであり、仙界の一定の時期（數

百年或ひは數千年）を経たものは眞の幽冥界に入り階階して神列に入るものも少なくない、また仙界にありながら既に相當の高級の神位に列せるもあつて十把一とからげに言ふことは出来ぬ。普通の比較的正しい人で死後に人格的靈魂の存続を生前に意識してゐた人、又は左うでなくても特に幽冥大神から引拔されるか又は先きに歸幽せる人の靈より引拔せられた人で次ぎの世界に居るものは、それぞれの仕事もあり感興もあり愉快に活動をつゞけ、やがては段々と向上して何十年か何百年か何千年かの後に神位に列して次第に高いところへ行くものもある、否な其れが仙界の正則の順序であるやうである。低いところの靈界では日本は日本流、支那は支那流、歐米は歐米流といふ風に現界の生活及び思想の相違があるやうにやはり其れの特種環境があるが、その大綱を統べ知り給ふ神はやはり幽冥大神（大國主神）であり、地方々々で其の或る程度までの任務を各地の産土神が管掌して居られる。さう云ふと産土神とは一體なんだ、たつた百年か二百年か前に歸幽した昔の大名や武臣などを祭つて居るところもあり、中には随分如何はしいものがあるやうだが其んなものが斯様な大權を分掌して居るとは少し腑に落ちかねると云ふ人もあらうが、總じて仙界の消息は彼れ此れ露骨に申されない點もあるが、産土神は必ずしも表面の祭祀してある神靈とは限らぬ、そこには相當の神が主神となつて表面の神名にある神はその隠れたる主神の屬神であることもあり、或ひは吾々が普通の卑俗の考

へから、比較的近い時代の人間が祭祀してあると思惟して居ても、その神（その人）に幽冥大神の靈徳を賦り與へられて相當高級の神靈でましますことあるので猥りに彼れ此れ申すことは出來ぬのであります。外國はどうかといふが、外國でも何處でも神社のない山の中でも沙漠の中でも海上でも、其の處の幽事を知ろしめす神靈のないところは決してない。普通の人間の眼にこそ見えぬ神殿も何も立派にある、空中にも海の底にもある。普通の或る村の産土神といつても其の神殿がたとひ小さな見かけもないものであつても其れは普通の人間の眼に映するのは其れだけであるけれど必ず立派な神殿があります。それにしても歐米の方の交靈會などの報告を調べてみても、根ツから産土の神らしいものは無いではないかと云ふものがあるが、それは神界の消息が或る程度まで明かになる時節まで秘せられてあるので、時代相應の、環境相應の靈界通信が行はれるといふだけのことです。要するに人は現幽ともに産土神から非常なお世話になつて居るといふことを知らなければならぬ。故郷から何れかへ移住して居るものは生れ故郷の産土神と現住地の産土神とのお世話になつて居る。旅行中は旅行先の隨所の産土神のお世話になるのである、商人にしても旅行先きで其の土地の産土神に先づ参拜せぬやうな商人は永久的の眞の成功はむつかしい、えらい俗なことを申すやうであるが俗の問題でも非俗な問題でも同じ道理である。天行居では神徳といふことを語るときには産土神を最も重く

いふのは本田親徳大師以來の森嚴極秘の所傳があるからであります。産土神をさしおいて、他の神に願ひ事などするのは悉く神界の罪奴である。如何なる場合にも産土神を拜して然る後に他の神を拜す可きものであります。私は門人に對しても天行居に奉齋してゐる神々を崇敬せよと特に言つたことは曾て一度もない、天行居に齋祀してある神々を遙拜するとせぬとは各自の隨意であるが、誰れ人も先づ第一に各自の産土神を禮拜し、次ぎに伊勢、出雲の大神を禮拜し、次ぎに特に禮拜したい神があれば其の神を禮拜すべきであります。本末を誤つて徒らに御利益信心をするのは俗間の淫祠信仰と多く擇ぶところはありますまい。種々の教祖神道や教會神道の輩と異なつて天行居の天下に宣するところは眞の惟神の大道の示すところによるのでありまして、その間に毫厘の私心を挿むことも許されないのであります。

寅 林

神とは如何なるもの乎、神靈と人靈とは同か異か、同と云へば即ち同、異といへば即ち異、宇宙根本の大精神を神といふ時、人の靈魂はこれに對して假りに小精神と稱し得べく又た神と稱し得べしである。それと同時に神には八百萬の神があり幾段の大階段(殆んど別世界ともいふべき)があると同時に幾十百の小階段があり、縦にも横にも色わけが出来るので一口に神といふものの定義を下すことの困難なることは「靈學筌蹄」その他の舊著に於て述べたところであるが尙ほ「幽冥界の研究」に於て詳説する計畫である。本書に於ては能ふ限り神のことを中さぬことにしてあるので、本書は主として人間の靈魂を土臺に十人向きのするやうに説を立てるのである。従つて本書には此の目的に適當なる音靈法や御柱傳を説き又た年靈盤を解説するけれども眞の歸神法等については神威を潰さんことを畏れて一切説き及ばさぬ仕掛けにしてある。嚴格にいふと人間の靈魂の表皮の波動(一切の觀念)を取り去つた靈魂の状態を神といふことが出来る。併しこれも極めて誤解を生じやすく、とかく人間の靈魂以外に神なるものは無いといふ様な妄斷に陥りやすいので對者を見ずには話しにくい問題である。この頃の世間の歸神といふものをみるに、殆んど皆な低劣極まるもので、或る神名を名乗つて一寸氣

のきいた靈語をするものがあれば直ちに其れを神にしてさふ、そして神命のまに／＼身命を抛つて働きますなどと言ふが其の心根は同情に値ひすけれど是れ實に知らず識らず間接に眞の神威を冒瀆し奉るもので、實に畏れ且つ戒めなければならぬ次第であります。明治維新以前は姑らくおいて言はず、明治新政以後に於て眞の第一義の歸神なるものは大正十二年八月の今日に至るまで私の知り得る限りに於て種々の處と種々の人々と種々の時とを通じて僅かに數回あつたに過ぎぬものと確信して居る。他は何れも第二義の歸神で第二義の歸神でも純粹のものは勿論讃仰するに足るが、その最も正確直明と見られるものでも尙ほ且つ幾分或ひは大部分の不純屈曲を含まざるものはない。たとへば同一の審神者、同一の傳人(神主)、同一の侍坐者、同一の席に於ける靈語でも、第二の歸神に於ては混線、屈曲が多くて、傳人になる人の宿靈が早變りの俳優のやうに様々の手腕を揮ふことが多いので、これが取捨選擇は審神者の經驗、靈學的知識に待たなければならぬ。それをわけもなく混同して、傳人や審神者や侍坐者やの潜在意識に染みて不純となれるをも覺らず直ちに以て相當の神名を冠して發表するが如きは誠に恐懼の至りであります。相當の宿靈になりますと數百年前の神道者等の秘傳口訣に類するものや又は上古の言葉や現代の科學的知識も相當にありますのでそれを傳人、審神者、侍坐者達の潜在意識に織り込んで随分と人を驚かすに足る位なことをするが、これを看破し取

捨し選擇するには相當の眼力を要するのであります。廣い意味に於ける神人感合の法は種々雑多のものがあつて低劣なるものは隨所に行はれて居るが、これを審判し、善導し、向上せしめ、歸正せしむることが森嚴神祕の法術であつて、この審神學（假りに學といふ）あつてこそ始めて眞の歸神かむかひを語り得べきであるが、この嚴正なる審神學の樹立者が千年以前は知らず、近代に於ては本田親徳大師其人であるのである。本田先師以前に其人を求むるに難く、本田先師以後今日までに其人を求めて果して誰れを數へ得るであらうか、直接間接に本田翁の流れを汲めりとするもの、全く別流なりとするもの、始め本田の學統を受け後に啓發するところありて一個独自の門を開けりと云ふもの、全く別系統の神示によりて得たりとするもの東西屈指に違あらずであるが、さういふ様な人々を數へてみたり月旦したりするものは餘りに光陰の尊き所以を知らざるものであらう。本田親徳翁は鹿兒島縣加世田の地頭職の家に出で、大西郷等とも往來せられたことがあるが、その生涯に於て最も親交のあつた人は副島蒼海伯であつた。青年時代水戸の會澤正志先生に就て研究せられた外、すべて神啓によつて眞理の闡明に努力せられたのであるから其の見識は殆んど何派の學統にも染まざる孤峰特出するものである。明治二十二年四月九日六十六歳で歸幽せられたが御自作の産土百首の尾に「明治十八年五月六日、桓武天皇之皇子葛原親王三十四世平朝臣親徳謹詠、六十一年五月」と自署して居られるから御出

生は仁孝天皇の文政六年に當り香川景樹や平田篤胤の歸幽した天保十四年には未だ二十一歳の青年で、會澤先生が八十三歳で文久三年に歸幽せられた年には四十一歳であり副島伯の支那行きは明治六年の二月で本田先師の五十一歳（伯は此時四十六歳）の時に當るのであるが、それより四五年前には郷里鹿兒島に歸國して居られたこともあつて其頃は既に靈學上充分の研究を積んで居られた證據は薩藩神變記録等によつて明かである。本田先師は其の始めは隨分諸國の靈山等にも參籠せられ霜辛雪苦して研究を積まれたが、併し從來の行者輩の方法を全く排斥せられ、飽くまで理智的研究を進められたので、先づ一切の迷信的態度を非常に嫌はれて理智の眼を以て直ちに靈の本性を見究め、靈の問題は即ち靈を以て靈に對するといふ大原則を擲まれて解剖的に研究して行かれたので、遂に居然たる千歳の大業「審神學」の樹立に成功せられたので、先師の學則三條といふものを見ても、尋常神道學者の態度と雲泥の差あることがわかる。

神ノ默示ハ則チ吾俯仰觀察スル宇宙ノ靈力體ノ三大ヲ以テス

一、天地ノ眞象ヲ觀察シテ眞神ノ體ヲ思考ス可シ

一、萬有ノ運化ノ毫差無キヲ視テ眞神ノ力ヲ思考ス可シ

一、活物ノ心性ヲ覺悟シテ眞神ノ靈魂ヲ思考ス可シ

以上ノ活經典有リ眞神ノ眞神タル故由ヲ知ル何ゾ人爲ノ書卷ヲ學習スルヲ用キム哉唯不變不易タル眞鑑實理アル而已

斯うした高處から着眼しての研究であるから普通の俗間の歸神と稱することに、出頭没頭してゐる輩の、天狗とか低い龍神とか云ふものを、いちつて居るものとは同日の談でないことを知らなければならぬ。さればと云つて其れでは一神論者かと早合點するものは話の聞きべたと申すもので、宇宙根本の大神靈を認むると同時に高下幾多の階級の八百萬神を認め、場合によつては其の必要に應じてどんな靈にも感合し得るの道を拓かれたので森羅萬象に何一つ棄てるものはないのである。弘法大師の如きにしたところで如實知自心で五神通を得る立場であり、即身即佛を證する見識であると同時に幾多高下の神靈を認めた證據は澤山にあるので、たとへば天長四年（空海五十四歳）大極殿で百僧を屈請して雨乞をしたときにも自ら執筆して願文を作り（原文漢文）「仰き願はくは四智の法帝、五大忿王、十護天神、八部の靈神、蒼生を救ひたまへ」と書いて居るが如きをみてもわかる筈である。又た勝道といふ坊さんが日光山に登つたときのことを弘法大師が執筆して書いたものの中には（原文漢文）「諸神のおん爲めに經を寫し佛を圖し裳を裂き足を裏み、命を棄て道に殉じ、經像を強ひて負ひ、山麓に至り經を讀み佛に禮す、一七日、堅く願ひを發して曰く……」とあつて固より諸神靈の現存を確信し、更らに

「若し神明をして知ることあらしむるならば、願はくは我が心を察せよ、我が圖するところの寫經及び像等、まさに山頂に至り、神の爲めに供養して、以て神威を崇んにし、群生の福を饒はすべし、仰き願はくは善神威を加へ、毒龍霧を捲き山魅前導して、我が願ひを助け果さしめよ」とある。三界唯一心、心外無別法を早合點して諸神靈の存在を否定せんとする破れ圓頓の野狐禪者流とは眼光が違ふので、その諸神觀の内容に異算こそあつたらうけれど流石に弘法大師あたりは卓見の傑物で、誠の心を以て諸種の神靈を信じ、誠の心を以て山魅の類をも畏敬したのは理窟抜きに實際に靈界に交通した體驗の上からの信念であつたのであります。

茲にひとりの傳人（神主）があるとして、その一人の傳人を所謂「臺」にするときには相當の働きが出来ることが、その外には傳人を養成することも出来ぬやうな人は審神者としての資格はないこと勿論であります。それは要するに其の傳人の宿靈が働くだけのことで、その傳人は他の如何なる審神者の前に坐してもたいいてい其れだけな働きはするので、斯ういふ場合には問題は傳人の問題で審神者は論ずるに足らぬので一通りの心得ある人ならどんな人がやつても同じことで、既に傳人の宿靈が或る形式に固つて居るのであるから審神者の影響は甚だうすいものである。本來から嚴格に言ふときは傳人は鏡の如きもので神靈は此の鏡を假りて審神者に對せられるのであるから申す迄もなく審神者又

はその侍坐者中で靈誥の對者となる人が第一に問題となるのであるけれど、世間の第二義の歸神では要するに多くの場合傳人（神主）の宿靈コンソロイムの働きに過ぎぬのであるから少し極端に言ふと其の場合の審神者は格別問題となるほどのものではないのであつて眞の審神者たるものは十人が十人、百人が百人とまでは行かぬが大體に於て十中七八の人間に對しては此れを傳人（神主）に仕立てるだけの腕力が無くしてはならぬのであります。元來審神者の資格は學問、人格、徳操、實驗であつて、これを細説すれば長くなり又た本書の主目的でないから今多くを言ふわけに參らぬが、第一に眞の審神者たるものは宇宙の眞理の保持者、體信者でなくてはならぬといふことを銘記しなければなりません。そんなら茲にいふところの宇宙の眞理とは何であるかといふと、前章に説いた電子説を克く／＼噛みしめ、くり返しては味うて見て、我れとは何か、人とは何か、他人と我れとの關係はどうか、死とは何か、死後は如何、顯幽の異同交渉はどうか、と噂さ嘶にならぬやう自分のものにして深く／＼突きつめて考へてみて、此の小自己を犠牲にして大自己（宇宙根本大靈體）の向上發展につくすといふ、毫厘の私心無き忠義清明の覺悟を要するので、茲に始めて眞の公平といふ心境に立つことを得る、這の眞の公平の心を以て始めて靈界に向ふべきことを忘れてはならぬ、靈學上の究極の奥闕は斷じて此外に無い、この外にありとすれば斷じて邪道であります。自己を文り他を排するといふやうな心もちが微塵

だも動けば駄目である、人から我が心の状態について非難されて少しでも不快の念が起るやうなことはないかと省みて大勇猛心を振起して修養するの必要があります。此の眞の忠義清明のタマシヒの光りでなくては神は感動せぬ、本田大師が「道之大原」に於て「靈學の要は淨心にあり」と喝破されたのは四十年間の霜辛雪苦の研究實驗より得られた尊貴なる收穫であります。孔子の縱論横説したところも歸するところは無我の二字であり、釋迦が全生活も無我の證明であらうが、無我とは此の小自己を没却して大自己（宇宙大靈體）の向上發展につくすといふ忠恕の心に外ならぬものであると私は解して居りますが、これが宇宙の眞理であることを確信して居ります。此の眞理の具體化したものが皇道であつて人間が製造した假定契約たる宗教と申すものとは全く異なるものであることを忘れてはなりません。吾々は此の宇宙の眞理の保持、體信者でなくてはならぬ。この最重最大最要の大覺悟に立つた靈學でなくては役に立たぬ、印度の魔術使ひや世間の稻荷下ろしの類ひと多く擇ぶところのないものとなつて了ふのであつて、理窟でなく此の道理が眞に腹の底から見えてくるまで考へぬいて見なければならぬ、白汗通身、別乾坤に生れ代つたやうな心持ちになるまで考へぬいて見なければならぬ。さればと云つて行住坐臥いつも斯うした心持ちで居れるやうになるのは容易でないが、せめては沙庭サテイの席に列なるとき、または自修のとき、この心持ちに曇りが出ぬやうに心掛けて修養しなければなら

ぬ、それには、道理の上から電子説等によつて考へ抜いて見ると同時に、本書に説く音靈法や御柱傳の修行が甚だ有効であります。かくして眞の忠義清明の心境を拓けば、帝王の前にも立つべく、いかなる大神にも向ひ得べく、又た妖魅に對しても道理のあるところには服すべく、眞の公平の心そのものと成り切り得るのであります。電子説によつて考へても見當のつくやうに、この大宇宙森羅萬象は一滴水の如き眞理の一體であるから眞理の體信者には神通自在となつてくるのは必然であります。一面から言葉を換へていふと、眞にイノチガケにならねば駄目といふことになり、イノチガケになれば何でも出來るといふことに歸するのであるが、イノチガケといふことに就て深く考へてみるのも一方法であらう。イノチを懸けるといふが、イノチとは何か、イノチをかける何うなるか。——宇宙一切の現象は電子の速度の差の展覽會に過ぎぬものであるが、イノチガケになる速度の差で通徹の段階がわかる。斯う言へばとて、審神者たるものは傳人の前でウン／＼りきみ返れといふのではないので誤解のないやう深く字眼に注意して讀んで貰ひたいものである。——神典を善く讀む者は一面からみると犠牲的精神の記録であることを知るであらうが、小自己を没却して大自己の向上發展につくす忠義清明の心が則ち惟神の心であり宇宙の眞理であるが、この惟神の心は靈學に入る最初の門であると同時に最後の奥殿であります。この惟神の心よりせざるものは悉く無價値のものであり邪道である。佛教でいふ菩提心といふのが稍や此の惟神の心といふのに當つて居るやうであるが、今の地上の佛教徒に眞の菩提心のあるものが果して一本の桃の木の実の數ほどでもあるであらう乎。——眞の惟神の心になれば神、我に格り、我、神に格り、神と我との差別がなくなる、差別がないから通徹するのである、犬は人と話をする事が出來ぬと同じく、眞の神と話するには神にならなければならぬ、神にならずに話をした神は決して本統の神でないことが幾ら頭腦の悪い人でもわからぬ筈は無からう。世間俗流の技術的靈學は吾々の視野以外の問題でありまして、天行居所傳のものは斯ういふ風になつて居るのであります。

支那では古來我が少彦名神を青眞小童君といふが、青眞の二字はバテの水より清字を現はし青字となりブスマの潔齋より眞の字をあしらつたのでバプテイズムの水身清である。アブラハムの宗旨の正系を傳へた回々教ではバプテイズムをバテブスマといふがブスマの音はブイシユンで潔齋から來たもので秦始皇時代の方士と同じもので我が山伏の伏も同系統のものでアラビア本場の回々の衣冠も黃帝教の方士の衣冠も修驗道の山伏の衣冠も同一轍で其の教儀の大綱が酷似して居るからとて怪むに足らぬもので支那の回々教の寺は清真寺といふに定めてある。支那人はマホメダン徒をホヘスと呼ぶが此

れもフィッシュンを音譯したものに外ならぬ、バブは日本古代の雅言たるハフと同系統のものでハフは零であり靈であり天水の餘滴をいふのであり關西では俗語で水のことをブブといふも其の流れである。眞の審神者たらんものは先づ惟神の心になる修養と同時に靈界の消息に就て正しい理解がなければ出来るものでないので正直とか熱誠とかいふだけではやれるものでは決してないので、言葉は宇宙の祕密であることを知り、古代の世界的活動の神々の流傳が何ういふ風に彩色されて分布されて居るかといふやうなことに一と通りの見識がなくては餘りに不用意な店構へと申さねばならぬのであります。——回教徒みづからはウスルマサンと名乗つて居るが太秦の眞の語源を知つて居る人があらうか、バブテイズムのテイズムの轉タシマは日本で但馬の國名となつて居るが此處に渡來した天の日穗子は回々子であることを誰れが感づくであらうか、天の日穗子の肖像の服装等が悉く回教徒のそれと合致し居るのを不思議がる學者はあるが、此の日穗子の後のタチヒマモリがトキジクのカゲのコノミを求めたとは何のことか、トキジクが裏海のことであり後に大食とてアラビヤの國名となつたことさへ知らずに居れば人生何の憂ひが有らうぞ、——カトリック教のカトリに定冠詞のタを加へたものがタカトリで竹取物語の翁の名であること、カトリとは祭壇に於て犠牲を取扱ふ職掌であること、その翁は箭を以て犠牲たるべき女子を選択することを知らぬものは一篇の戯曲たる竹取物語が如何なる趣向を

凝らせるものなるかを疑はずに済むであらうか、支那ではヤ(箭)の音を爺であらはしてあるが此れは尊稱であつてマウロクオヤヂのことではない、古事記の丹塗りの矢は何を語るものであるか、三月をヤヨヒといふのは彌生の字を宛てるが古義は爺呼ひであつて、季春三月である、詩に有女懷者、吉士誘之とある吉士は即ちアカカド族のアカチスの稱、アカチスはキチシで婆羅門族のことであることを神悟する者があらうか。——支那では早くからアルファベットの使用が廢れた爲めに多くの古言を象形若しくは會意によつて傳へたもので、始めは借音に過ぎなかつたもので年所を経るに連れていつの間にか會意となり、他の意味に移つて行つた類は頗る多いので、日本でも支那でも古典を読むものは眼を高くつけなければ其の眞義古義を捉へることは六かしいのである。たとへば易を讀んでも其の觀の卦が歸神の行事を詳説してゐることさへも見えぬやうでは焚くに及かずであります。

天行居で言ふところの宇宙の眞道(皇道即ち眞神道)なるものは眞理の具體化したもので指一本もつけることの出來ぬものであります。天運の循環によつて人造の宗教は亡びもするが眞理の具體化した眞道は宇宙の滅亡せざる限り顯幽不二、古今一貫に活けるもので斬つても斬れず焼いても焼けぬものであります。いま世界の宗教はどういふところを歩いて居るであらうか、しばらく他の人に代辯し

て貰ふために左に松村松年博士が昨年発表したものの一節を紹介して、私はちよいと失禮して井戸端へ行つて水をかぶつてくることにする、モウ今日で二十日も照りつゞくので、熱時熱殺と我慢しても居れぬ。時だ、時だ。

牧師の説教の如きも陳腐に屬し到底聞くにたへられなくなつた、所が一方キリスト教の學校では今もなほ進化論の書物を教科書や参考書に嚴禁してゐる所がある前日米國ケンタッキーの議會で或議員がダーウキンの進化論を絶対に教科書や参考書に禁じたいといふ建議案を出した、けだしそれは從來のキリスト教の教義と矛盾しこれを破棄する事になるからといふのである、所がアウトロツクの記者ライマン、アボットはキリスト教の進化論と矛盾せざる事を説きこれは卅年前の當時にありては問題になつたが今では決定的となり如何ともする事が出来ないといつてゐる、然りキリスト教の教義より進化論と相容れざる分子を除却すればバイブルは成立しないのである、アボットの如く一方進化論を承認し置きながらキリスト教の教義と矛盾しないというた所が識者のたれもが肯定しない、既にアダム、イブの犯罪はスメリアの傳説であるしそれによりて起るの贖罪説もまたポロの教へであつて見れば、キリスト教には何があるか、キリストのオリヂナリチーは愛にありといふが、されどこの愛は既にプラトーンも、佛陀も、セネカもピツクテスも説いてゐる。然らば天國であ

るか、それもまた先驅者たるバプテスマのヨハネが説いてゐる、天父の思想はキリスト固有の思想であるといふが、これもまた大いに然らずである、それに就て既にゼウスは神々および人類の父であるといふが、これもまた大いに然らずである、またプラトーンは神を宇宙の父であると呼ばはつてゐる、更に昔時よりイスラエルの神は同族の父であつたのだ、然らば悪魔の思想は如何である、これは正に東洋の思想であるのだ、釋迦やゾロアスターは既に悪魔の誘惑に逢うてゐる、それに反して今日のキリストの教義にあるやうな仙人的の道德や他民族に對する情愛や、ルカ傳にある様な「人もし我に來つてその父母、妻子、兄弟、姉妹おのれがいのちまでもにくまずわが弟子となるを得ず」云々の教義は到底現代の人類の思潮と相いれざるものである、彼の有名なキリストの言「カイザルのものはカイザルに神のものは神にをさめよ」は全く社會道德を捨て、來るべき天國を待たしたものである、それは宗教生活と政治生活を明瞭に分離せんとしたもので、全く現代人類の社會とは沒交渉であるといふデラーはいうてゐる、しかり彼れキリストは、神の王國の喜ばしき福音を述べ、天父の慈愛を説き、神の子供として人間のなすべき正道を宣傳した、然し彼れキリストは何ものであつたか、歴史的のことは何にも認めることが出来ない、勿論聖書にもあるやうなキリストが神の子であるとか、救主であるとかいふことについては自分は一言もいつてをらない、總て弟子や、その後

の使徒が彼れを神にしてしまつたのだ、こゝにおいてか吾人はたゞ聖書がそのキリストを畫きをらざることを知るばかりである。

一方また文明が進み都會の生活が煩雜となつてくるにともなひ日曜日には皆々野外に出でて新鮮なる空氣をすひ、浩然の氣をやしなはざれば神經衰弱におちいつてしまふ、ゆゑに日曜日における郊外の散策をやめさせんとする牧師連の努力も徒勞になるのは無理はない、即ち將來の米國の教會は大いに考へものだ、今や教會よりも個人自立の問題にとらはれてゐる、これがため毎日かつばらひや掠奪の起るのもまたやむを得ない。

そも／＼過去の時代においては宗教はたしかに或役目を成就し來たつたにちがひない、生存競争の劇烈なる社會に殊に生命の保障なき野蠻時代にありては何等かの他力に依頼するの觀念は自然に起こつたにちがひない、この有限の世界の人は無限の世界をこひねがうたに違ひがない、彼のかげろふの如き短かき現世に人は永遠の實在を求めたにちがひない、この苦痛や悲哀のおほき社會に人は慰安と享樂とを索ねたにちがひない、これ等の要求に應じたものが即ち宗教であつた、上には莊嚴雄大なる太陽がかゞやいてゐる、時には天地晦冥の大暴風となり、時には霹靂耳を襲するの電光に出あふ事もあつた、ゆゑにかれ等祖先は何物か超人的の實在があつてこれを指揮しをつたと思つたの

も無理はない、下には剛健素朴なる生殖器がありてその無限にうまれ來たるの神祕に撃たれたにちがひない、これが太陽教となり、ゾロアスター教となりまた生殖教となつたのである、人は神を作りこれ等の觀念にもとづき宗教を製造した、人はこれによつて一時は望みを得た、これによりてなぐさめを得た、これによりて力を得た、これによりて平和を得たのである、然れど宗教は人類文化と共にその歩調をもひとしくし、神に對するの觀念もまた共に進化し來たつた、それがため種々異なりたる生活や道德や思想や人生觀があらはれ來たつた、これがため各民族に固有なる宗教がうまれて來た、ゆゑに何れの宗教もその宗祖の教義とは大なる逕庭があるのだ、彼の釋迦の教へたのは小乗の教へであるが、その大乘の教へは彼れの死後五百年頃に出來た事は歴史を繕く事によりて明白となつた、然も民族や人種の異なるに従つて色々の拜物教や多神教や一神教が起つた、彼の佛敎の他力の教へは三千年前のむかしには大いに有力なる宣傳であつたかも知れない、また地獄極樂の假説もその當時の劣等無智なる人類を濟度するに大いに與つて力あつたにちがひない、またキリスト敎の贖罪説や天國説も今より二千年前には大なる福音であつたにちがひないけれども今では小學の兒童にも否定せられて、たれもかへりみなくなつた。

卯 林

"If man is so ill as to say he is when he is not ill, he must be very ill, indeed"

(人が病氣と云つて来て、若し其の患者を診察して病氣を發見せぬときには其の患者は本當に病氣でナカ〜の重症だ)これは或る英國の大醫が言つたことであるが此れは何を意味して居るのであるか。お醫者さんには此れは内證の話であるが、實を申すと多くの病人なるものは實は病氣でも何でもないのであるが、その病人みづからは自分は病氣であると深く信じ切つてゐるので、それこそ本當の厄介千萬な病氣なのである。であるから斯うした患者を治療するには、その患者が得心の行くやうな方法をとらなければならぬ、名醫になると此れに何の必要もない輕微な外科的手術を施して全快させたりする例が尠なくない、或ひは必要もない下劑をかけたり發汗させたりするがさうすると其れによつて不思議によくなる。よく胃の悪い人が千振せんびんを飲んだりするが、あれも千振の成分には何等の胃病を治する力はないけれどあの^い感じが飲む人の神經を働かして快方に赴かせるので、結果からいふとやはり効果のあつたことになるが、多くの醫藥といふやうなものも大抵かういふ風のもので、徹底的に考へてみると隨分滑稽千萬な話なのである。善い意味に於ても悪い意味に於ても「信」の力

ほど恐ろしい、不思議なものはない。宇宙一切の現象は悉く電子の速度の差の展覽會に過ぎないものであつて、人の信念の速度は即ち其れが電子の速度であるから、一切のものが「信」の力によつて成るものであることが合點が參る筈である。自分は病氣になるかも知れんと思ふ人は必ず病氣になる、自分は全快するといふ確信のある患者は必ず全快する。全快するやらせぬやら分らぬと考へてゐる患者へ、他から必ず全快するといふ何等かの暗示を與へると又た全快する。自分は幸運だと思ふ人は段段と幸運になり成功するといふ確信のある人は必ず成功する。自分はどうも不幸ふしあはせだと思ふ人は人は益々ふしあはせになつて行く、これは机の上で仕事をして居ても時計のセコンドの音は聞えないが時計の音に氣を移すと直ぐに音が聞えてくるのと同理のものである。元來大宇宙森羅萬象は無形の電子の波動に過ぎぬもので徹底して考へれば一切「無」である。それを「有」と觀するは「心の影」に過ぎない、故に佛教では「心は工畫師の如し、一切の五蘊を畫く、一切世界の中に物として造らざるなし」といふ、印度哲學(佛教)なるものを私は哲學とか宗教とかいふものに見て居らぬ、佛教は心理學也と見て居るが、心理學としては二千年前に於て驚くべき精微を究めて居る、故に靈學の研究者は佛教を宗教として見ず心理學として冷靜に利用すれば得るところが尠なくない。印度の魔術師がフランスへ行つて多くの各般の學者の前で小さな鉢わしに荊果の種子を蒔く、さうすると見る／＼うちに芽

が出て大きくなつて花が咲いて實が結ぶ、そこで列席の科學者等が手品だらうと思つて寫眞に撮影を試みるけれど苹果の實體は眼前に見えてゐながら何うしても種板に感光せぬ、いつたい其の苹果は「有」か「無」か、魔術師は笑ひながら其の苹果を一つちぎつて科學者等に御馳走するとやつぱり美味かつたといふが、それを不思議がるほどなら諸君の眼前にあるもの何一つ不思議ならぬものはない、何一つ摩訶不思議のパケモノならぬものはない、諸君の机も火鉢も煙草も衣類も家屋も乃至は其の糟糠の妻も愛兒も摩訶不思議のパケモノである。それは「有」でもなく「無」でもなく、只さうしたものである。故に一切の「現象」は「信念」そのものである、信念即現象である、ひとり靈學ばかりでなく一切俗世間の事業も藝術も悉く信念の表現である、成功も失敗も幸運に向ふも悲運に陥るも心一つの置きどころで、赤を思へば赤くなり青を思へば青くなる、心一つで病氣にもなれば健康にもなる。名優が豊太閤にもなれば鼠小僧にもなるのと同じことだ、「泣いて暮すも五十年、笑うて暮すも五十年、泣いて暮すも笑ふのも、心一つの置きどころ、テケテツツテ」といふラツパ節が昔流行したが此の一曲の俗謡が佛教八萬四千の法門の極意である、この外に佛教なるものはないのである。とかく世間では病氣見舞にでも行くと「どうぞ御大切にさい、此頃の感冒はよくありません、肺炎になります、誰れも死にました、彼れも一昨日死にました、少々およろしくても油断をなさいませぬ

やうに」などといふが此れは立派な強力な悪い暗示で、来る人も来る人もこんなことをいふと、始めには軽い感冒でも遂には肺炎になつたり死んだりするのである。醫者でも精神の威力のわからぬ籤醫者はこんなことを言うて知らず識らず病人を製造する。他人ではない家族のものまでが、やはりこんな風な暗示を八方からやるのだから何ともやりきれないのである。きくかきかぬか知らんが此頃肺病の藥の大廣告が新聞紙に大々的に掲載されるが、あんな記事を見て知らず識らずの間に肺病になるものがどれだけあるかわからぬ、西洋の昔囃に、或る流行病の神が五千人を殺す豫定でアラビヤへ行つた其の歸り途で外の神に出逢つたとき外の神が「どうだい君は五千人を殺す豫定で行つたのに五萬人の病死者を出したのは不都合ぢやないか」といふと流行病神が「イヤ拙者は確かに五千人だけ殺したんだがアトの四萬五千人はそれを見て自分で勝手に病氣になつて死んだのだ」と答へたといふが、一大真理を含んだことである。病氣は外因だけでは起らぬ、外因と内因とあつて始めて起るが内因だけでも立派に起るのである。明治年代の傑僧原坦山が「今の醫の所謂病源と稱するところのものは只その病縁にして未だ病源に達せず、凡そ病源の由て来る所は外觸にあらずして實は内觸にあり」と喝破し惑病同源論を唱へたことは天下周知のことであるが何も新らしいことでも何でもなく支那でも三千年前に於ての定説であつたことは素問などをみても誰れでもわかることである。無住國師の沙石集に

は老子の第五十章を引いて「老子云、道徳ある人は兕虎も爪をさしおくとろなく甲兵も刃をまじふるところなしと、その意は大道を心に修め妄念なく身に死地なきものは殺すべきところなきが故なり、この故に魔にとらるゝは先づこゝろ魔となり佛に度せらるゝは先づこゝろ佛となる驕慢即魔也、菩提心即佛也、大般若の意は般若を念ずるものは軍に入るに刀杖身を犯さず、その故は般若は無相平等の智より同體無縁の慈悲を起し、こはきものおのれと損し落ちうせる山を説かれたり、薪を焚くに木の中の火起て後、外の火はつくなり、生木は中の火起ることおそし、故に火の燃ゆることおそし、すべて心より萬事起て後、外の縁は来るなり」と説いて居るが本書第二章と照合してよく／＼玩味して、噂話にならぬやう讀者の自身のものとして貰ひたい願ひであります。わたしは「信」の力を會得して頂く一つの材料として、近ごろ手ごろの小冊子が見つかった、それはマーデン氏の「How to get what you want」で中には私と所見を異にした點も一二ヶ所あるが、大體に於て實に同感で、よくも此れだけ私共と同感の人が西洋にあつたと思ふ位の愉快を感じた。いま左に私と全然同感のところの要點だけを抜萃させることにする、私のやうな下手な敘述よりも巧妙に説いてあるから代辯して貰つた方が私共の獨斷説でない證據にもなつて旁々好都合と思はれる。(上谷續氏の譯文を其のまゝ、借用す)

比喩談に斯ういふがある。

『兒獅子が或日、母獅子の眠つて居るあひだに、森の中で、獨り遊び戯れてゐた。種々變つたものが、氣を引くので、兒獅子は一寸探險を試みようといふ心に成り、自分の家からはなれた、大世界は如何の様なものか、其れが見たいと思つた。やがて兒獅子は遠くにさまよつて、歸路を見失ひ、何時の間にやら迷兒になつてしまつた。

兒獅子は驚いて、氣も狂はしく八方に走り廻り、悲鳴を擧げて母を呼んだが、母の答へはなかつた。つかれはて、せんすべもなくつた時に、恰も好し、此頃兒を失つた羊が之に出くはした。羊は憫れな啼聲を聞き付け、兒獅子の近くに來て、やさしく世話した上、遂に養子として其れを取つた。

羊は此迷子を愛して育てたが、其内に其れが羊よりも大きくなり、時には何だか薄氣味悪く見ゆる様になつて來た。其の眼の底には、羊の了解の可能きぬ、不思議な光を見る事も度々であつた。當分の間は養母と養子と共に幸福な月日を送つて居たが、或日向うの山の彼方に空を壓して、大きな一頭の獅子が勇姿をあらはした。獅子はふさ／＼とした立髪を振つて、谿谷に木玉となつて鳴り響く様な吼聲を發した。母の羊は恐れて立ちすくんだ。併し此不思議の音響が、兒獅子の耳に達した

時に、兒獅子は魔に打たれた様になり是迄嘗て覺えない感じがして、全身がわな／＼と殆んど震へ上る様な気がした。その獅子の吼聲は兒獅子の心の底の琴線に觸れ、是迄に無き新しき力を生ぜしめた様に感じたのである。新しき慾望とも云ふべき、力の不思議な自覺が発生したのだ。

新生の力は兒獅子の心を動かした。是に於てか兒獅子は自ら何をすることも考へずに、殆んど自然的に獅子の吼に應じて吼り返した。そのうちに、自己の内に勃然として起つて來た新しい力、自ら恐怖と恐愕の念に充ちて慄へながら、一旦醒めたこの動物は、情深き目で母羊を見やりながら、向うの山の獅子の方に飛び去つて行つた。』

迷子の獅子は自己を發見したのだ。此時迷兒獅子は小羊の様に母羊の傍に遊びくるつて居た。仲間のものが爲し能はぬ様な事が可能きるとか、普通の羊に比して格別大なる力を持つて居ようとかいふ事は、夢にも想像しなかつたのである。まして山中の百獸を威服し能ふ様な、力があらうなどとは想像もしなかつた。彼の考は只單純な羊の考で、犬が見えたらば逃げ、狼の呻ゆるのを聞いては戦慄するものとしか思つてゐなかつた。然るに今は是等の犬や狼が、己を見て直に逃げ隠れるに至つたのを見て、自ら驚いてゐるのである。

兒獅子も自ら我は羊なりと思つて居た時には、羊の如く臆病にして因循であつた。随つて羊丈の

力と勇氣しか持たず、到底獅子の力を出し能はなかつたのである。他から注意するものがあつても、『仲々獅子の力など出せるものか、僕は普通の羊である、普通の羊と異なるところは無い、他の羊の爲し能はぬものは、僕にも到底可能きぬのだ』と云ふに止まつた。獅子と云ふ自覺が出來た今日、此兒獅子は茲に心機一轉して新しき動物となり、山中に於ても豺と虎の外には競争のしてもない、森の王と成つたのである。自覺は確に彼の力を二倍、三倍、或は幾層倍にしたか判らぬ。此力は彼が獅子の咆吼を聞く前の瞬間まで彼には全然不可能のものであつた。

兒獅子の自覺を喚起した、向うの山の獅子の咆吼が無かつたら、兒獅子は永久羊の生涯を續け、遂に自己の内に潜在した獅子性を知らずに済んだのであらう。さればとて、獅子の咆吼は、彼の力に一物を加へた譯でも無く、單に内にあつたものを喚起し、己に持つて居たものを喚起したのみである。が己に斯る大發見が可能きた後は、兒獅子は最早や羊の生涯に満足し得られなかつた。獅子の生涯、獅子の自由、獅子の力、及び山野は己に彼のものであつたのである。

各個人の内にも眠れる獅子の性格はある。たゞ問題は如何にして之を喚起すべきか何事か私共を目醒まし、私共の心の奥底を掻き動かし、我等の内に潜在して眠つて居る力を引き起すものがあるかの點だ。

恰も兒獅子が一旦目醒めてから、羊の生涯を送る事を満足しなかつた如く、我等も亦たゞの土塊にあらざる、人間以上のものである事を自覺し、神性を有するものなる事を知つた時には、土塊の生涯に満足し能はぬに至るだらう、乃ち我等は己の内に正に湧き上らんとする新しき力を感得し、再び浮薄なる理想や、安價なる成功に満足すること能はざるに至り、我等は愈々向上の心を起し、次第に高き地位に向つて憧憬するに至るのである。

フキリツブ、ブルークスが常に謂つてゐた言葉に、人が若し只だ半面の生活しかして居なかつたことを自覺したならば、他の半面の生活を自由に活躍せしむるまでは心を安んずる事が可能無くなる、そして従來の半面の生活には遂に満足する事が可能なくなる、といふのがある、人は自己生存の意義を明かに覺知し其眞髓が神であつて、自分は不可分的に全能の力と共に在ることを自覺した時、其全身を通じて、湧き返へる神の力を始めて感得するに至るものだ。而して自己の神性と其向上性を信するに至り、遂に卑怯懦弱であり得なくなり、何事にも躊躇せず、何に對しても臆病になり能はぬは勿論、自若として、宇宙と共にあり、無限と密接なる接觸を保持する事を自覺し、無限の力が己の全身を支持し、無限の腕が己をささへ、且つ捧げつゝある事を感じるのである、同時に自分の地上に於ける使命は神によりてさづけられ、又神によりて、援助されつゝある事も感ずるのである。

るのである。

多くの小兒は其近隣の同輩と等しきものと自ら觀念し、貧民窟に生長して、特に光ある將來の期待をも持たず格別の事も無く、其の單調なる周圍の間に死せるが如き水平線の上で生長して居るのであるが、一朝事件が偶發し、彼の大々的の心意に劇烈なる驚天動地の號令を下す様な一事件、一騒動が持上つた時には、是迄の彼とは全然異なりたるものである事に自ら氣が附いて驚くのである。乃ち或るものが彼に觸れ、彼の内に潜在せる或るものが喚起され、或るものが、彼に示すに、彼が從來持つて居たとは思はない、驚くべき潛勢力を以てするので。然して彼は躊躇せず其或るものに呼應するのである。彼は大世界に飛び出し、安價の成功にも、其從來の自己にも満足せず從來の周圍には當然不満足を感じるものになるのである。

世には愈々大事業を成し遂ぐる迄、斯る事ができようとも思はずに居た人で、現に世間の各方面に大事業を爲し遂げた多數の男女がある、此に一例を擧ぐれば二十五年以前のチャールズ、エム、シュワツプ氏がその今日あるに至るべきを思つたものは當時一人もなかつたのである、二十五年以前に若し今日の彼を豫め想像して、將來斯くくくなるべしと云ひし人あらんには、シュワツプは之を嘲笑し、必ずや『それは全く方外の談だ、其は他人の似顔である、吾輩は他人にもあらず又天才

でもない。吾輩は世間並の勤勉なる労働者であるばかりだ」と言つたらう。併しシユワツプは當時未だ自己を十分に了解して居なかつた。彼は各人皆な進歩の可能性を持てる事を了解して居なかつたのみならず、殆んど斯様の考を持つてさへ居らなかつたのである。彼は當時僅かに其内にある巨人の片鱗をあらはして居つたのみで、其れが巨人の全體を顯すべく殘餘の部分が喚起せらるゝまでには、或る時機まで事件の到來を待たねばならなかつたのだ。

世の中には多數の青年男女がある、此人達は僅か一年の後には、大なる責任の地位と、大なる權勢の地位を占め得る事を思ひまうけずして暮して居るが、確に其可能はあるのだ。將來の大將軍や、大事業家は、今日の兵卒や、今日の事務員の内に睡りつゝある。將來の大なる首腦者や、大支配人は今日、事務所の給仕、小使、又は飲食店のボーイの内にも潛んでゐる。

新しき力を發見し、新しき能力を發見するにつれて、新しき努力と勤勉とは更に誘起せらるゝものだ。普通の才能を持つた普通の事務員で不意の進級をした爲に、それが刺戟とも發展の良劑とも成つて奮發したのが因を成し、將來の成功に對する新しき希望を生じ、遂には從來夢想だもせざりし、新しき力の泉を發掘して、其才能を三割も五割も、多くならしめた實例は多々ある。つまり、此種の人々は一旦機會の到來する迄、自己の裡に存在せるものを知らなかつたのだ、眞に動機が誘

發され、そして、是迄遂に夢想さへせざりし力を解放し、自由に活動せしむる迄は、全然之を自覺しなかつたのである。

今度の世界戦争に於て、自ら勇氣もなく、甚しきは戰場に於て正に怯懦なるべしと自ら信じ居つた數千の青年は、一時の昂奮によりて戰場に送られたが、實戰に臨むや遂に大なる人物となつて、其戰に殉じ、敵の彈丸や、大砲に向つても、勇敢に立ち向つたのである。家庭では一向役にも立たぬものと呼ばれ、其教師や兩親には馬鹿よ、無能者よと呼ばれた、數多の青年が此戦争に出て行つた。其れが一旦軍隊に入りて後は、勇氣を出し、決斷も強く勇敢にもなり、くつゝいたらば放さないと云ふ執着力をあらはした。

かく自己が自ら想像したより、幾倍も大なる人間として、自己を實現したる多數の青年の經驗は、今日迄に成功して居る人々でも猶ほ其れく、更に偉大なる未知の發達力を有して居るものである事を我等に教へるのである。

人に最も主んすべき事は、如何なるものになりたるかにあらず、是より如何なるものに成り能ふかにある。請ふ汝の大なる能力を其まゝ墳墓に持ち行くことなかれ。汝若し實業家ならば、大なる資本を銀行に寝かして、利子も生まず、利用もせず置くことはしないであらう。汝は斯る人を呼

んで愚者と云ふならん。焉ぞ知らん爾は更に一層の愚者なるを、何となれば汝は不滅の資本を自己の内に死藏せるにあらずや。爾は何故に之を利用しないか、爾は多額の不用資本を有し、多大の信用を有するに拘らず、終生斯る小資本による小馬の一端主義で行くのか、何故に其等を利用しないか？出来ぬ筈はない、一つ之が實現に努力せよ。爾は從來未だ此可能性の如何なるものなるやを試みずに居るのだ。何故に此大なる富源此の如き未だ利用したる事なき富源即ち嘗て爾より實現をする事なくして、埋藏せられたる才能を發揮しないのか。爾の天賦と直覺と汝の向上心は爾の内に嘗て爾が使用し又は自覺せるより更に大なる人格が潜在せる事を爾に語つて居る。爾は之を直覺的に感得する事あらん。何故に爾は之を用ひざるか。何故に此人格を實現しようとしぬか。何故に之を喚起しないのか。何故に之をゆり動かさないか？何故に爾は此巨人の如き彈藥に火を點じ、爆發せしめないか？（中略）

エミリー、ケデー氏の云うた語に、「供給無限の世界に於て一物を得んとする慾望の念其物が此一物を汝に與ふべしとは神の確實な約束である」とある。即座の豫想が如何に悲觀的なるにせよ、又汝の將來が一向に光明を認めずとも、飽迄汝の希望に執着せよ、汝は必ず是を實現することを得べし。先づ理想を畫け、汝の達成せんとする成功を夢想せよ、汝が達せんとする位置に自分を置きて

想像せよ。決して自ら限度を附する勿れ、其欲する成功の外何物をも己の心中に想像する勿れ、汝の慾求するもの以外に何物をも想像する勿れ。困難を排除するの途は只だ是のみ、汝の前途に於ける昂上せる位置の門扉を開くの途は只だ是のみ、一層幸福にして而して光榮ある状態に汝を導くの途は只だ是のみなり。

名優「クリフトン、クラウフォード」が、米國に於て初めて斯の道に入りし時、彼は小さき町から町へ安芝居を打つてゐた。或夜の事、一座の先達から彼の藝は善く無くつて、是れでは到底成功はすまい、寧ろ郷里の蘇國へ歸つたが宜からう、と云はれた事がある、此れにも關らず、また其外彼の爲めを思つた批評や忠言をも顧みないで米國に居残つて、其藝道を續けてゐた。が僅かの間に人も羨むブロードウエーの花形役者と成つたのである。紐育で第一回の大當りを得た當時先きに彼に忠告をして其郷里に歸る事を勧めた友人に出遇つて、其當時かゝることもあつたと語り合つたと云ふことである。クリフトン、クラウフォードの成功は、彼の慾望したものに對し、始終心の結合を絶たず、又他人の悲觀的風聲に心を傾けずして常に自らの心の聲に耳を放さなかつたことにある。

我心はそも何故に

まだ踏みも見ぬ高き山や岡に

もだえあこがるゝか、

人は之をあこがれの聲とよび

我は之を神の聲と稱ふ。

何とかして引き出し度いと思ふ、心の中に潛める一物こそ、汝を呼ぶところの神の聲である。此憧憬の心を恐るゝことなかれ、其内に自ら神の心あり、其望が餘り大なりとて又餘りに架空なりとて、之を亡ふなかれ。造物主は汝の達し能はざるが如き憧憬の心を汝に與ふる事なし。

我等の日常生活が何故に、如此狹隘にて而して無趣味なるか、想ふに我等の慾望と憧憬とを赤裸裸に持出し實現する事を憚れるが故なるべく、これ私共は餘りに現實に拘泥し餘りに實感にのみ倚頼し私共の心の中に眞の力の潜在せることを感得する能はずして私共の力を限りあるものと信じ私共の希望を達し得る力を信じ得ざるが爲に非ずや。私共は誤りたる思慮と信仰の缺乏によりて、自ら啓發の力を亡くするものである。私共は行路に横はる障害物を見るに急なるのみで、神と共に活動せる人は其意志に逆ふ如何なる抵抗物よりも偉大なるものであることを忘るゝのである。

ベンチャミン、デスレリーが嘗て「人は環境の動物にあらず、環境は人の作る處なり」と云ひしが、彼は確に如上の意味を了解したものであつた。彼の生涯は是を説明した。人種も宗教も異つて、當初より全く逆境にあつた此青年猶太人は凡ての障害に打勝ち、遂に彼の生涯の最後の目標に到達した。彼は遂に大英帝國の大宰相となりヴキクトリヤ女皇によりて、ビーコンスフキールド卿として貴族に列せしめられた。

詩人ローウェルが吾人の憧憬は現實を超越せる瞬間にありと歌つたのは單に調子よく詩的な感想を言つたのみのもので無く、確に千古不磨の眞理を悟つたものだと思ふ。詩人は常に豫言者で、科學者よりも前に進み、常に私共の理想を指導して向上させる。詩人は信仰と同じく、遂に私共の實感に先立つて之を視且つ之を察知するのである。私共の感奮せる瞬間に於ける希望は、是れ聽て現實に實現せられねばならぬ事實の原本である。(中略)

ツイ此頃迄「オハマ」と「ロッキー」山脈の間の諸地方は廣大な荒れたる沙漠であつた。そして其れが全く無價値の様に見えた。多くの人々は是等幾百萬英反の地積が示してゐる様な荒涼たる廢地を造物主は何故に造つたのかと不思議に思つた。そして嘗て國會に於て政府は宜しく「ミズリ」河より落機山麓に至る鐵道の敷設を補助すべしとの議論が出た時、ウェブスターの様な人でもが此考を一笑に附したのである。ウェブスターは此計畫を公金の罪惡的消費であるとさへ云つた、彼は此西方の沙漠を横ぎつて郵便物を運送する爲には、宜しく駱駝を輸入すべしと云つた。此廢地

を利用するの途は只だ是のみと信じたのである。

然しユニオン、パシフィック鐵道を心に畫いた人等の見たる幻影は全くの空想では無かつた。是は確に現實の前影であつたのである。是等の人々の眼には未だ軌道が一本も敷いて無い内に、早くも殷盛なる都市や、大なる住民や、數百萬の豊饒なる菜園が是迄は全くの草叢や山芋の外には何が生えようとも思へ無かつた處に、魔術の様に盛んに發生してくるのが見えたのである。且つ此沙漠を一朝にして美化し、未曾有の富と變じたのは、全く目前の事實にのみ拘泥しない、そして實感に囚はれ無い人々の力であつた。人間は此沙漠の様なもので、驚くべき可能性を持ち、その潛勢力が何物かによつて覺醒せられ、美と力との花を爛漫と咲かすに至るのを待つて居るのである。私共に必要なるものは私共が感激した瞬間に視る處の幻影に對し動かざる信念を持つに至る事である。私共にして己の神性を自覺し、私共の理想とする或る者に成り得べしとの確乎たる信念に醒め、潑刺たる力の勃然として起るを知るに至らば、私共の生涯は美と壯大との花を咲かし得られる。私共の理想を心に創造し、之を現實に發現せしむべき私共の力の活躍は總て此世界を革新する力と成るのだ。蓋し私共は理想によりて私共の生涯を造り出すからである。此心を養成する力は即ち成功の道途である。そして、此道が黄金世界へ通じて居るのだ。私共は此理想即ち幻影を力とするに非ずん

ば、何物にも成功し能はず、何物をも爲し能はず、又何物をも創造する事が出来ぬのである。ジェームス、アーレンの云へることあり『汝の心が憧憬する幻影や、汝の心中の王位に尊崇して安置せる理想——是を基礎として汝の生を營め、汝は必ず其境に達すべし』と。(中略)

建築家は其設計圖に向ふとき決して其圖面を見ない。其圖は其建築其物を想はしむるので、其心に視る處のものは現に見る事の不可能なる建築其物である。此圖によりて眼に見るものは決して建築物の實體では無いが建築物の詳細を心中に畫くのである。若し之を畫き得ざるならば、到底是を實現し能はぬのである。只だ單に其設計圖に拘泥するのみのやうでは、遂に眞の建築家とはなり得無いのだ。(中略)

人若し歩行の力を持つてることを信ぜざるならば、遂に歩行し能はざるべし。何となれば之をやつてみる氣にならぬからだ。如斯く汝若し其希望する處のものを得べき力ありとの自信なくば、遂に汝は之を得ざるべく、汝若し汝の慾望を愛着し、之を實現し得べしとの自信なくば、遂に之を爲し遂げ得ざるべく、今日の境遇より脱出し得べしと信ぜざれば、遂に脱出し得ざるべし。思慮の範圍は汝の將來の範圍なり、自己に關する理想の制限はやがて實現の範圍である。汝は汝の夢想と共に對する信念以上には遂に達し得られ無いのだ。

汝若し自ら自己の完成せる性格を夢想して見性を遂げ其れが平素心中に潛む己が理想を達すべき、自己の能力の閃きである事を自覺するに非ずんば、汝は此世に處してさして大事をも成し遂げず、又其能力を發揮することも可能^で無^いであらう。神は本來私共に其志望を達し得る丈の才能や機會を與へてゐるから、私共に志望といふものを附與したのだ。私共の身體や腦の構造を巨細に檢すれば、私共は成功と幸福、其他壯大にして光輝ある各種の事業を爲すに適當する様に造られて居る事が判る。汝の周圍が如何に不幸であるとも、今日の境遇が如何に不安であるとも、其思ふところを固守し、其實現を熱望するならば、汝は其理想を建設し、其理想を擴大し、心の磁力を強大にして行けるのだ。

反對を氣にするな、批評を氣にするな、人が狂と呼ぶも、病的なりと云ふも、意とするな——世人は基督をも此く呼んだのである——心中の鬱勃たる不思議の使命に忠實であれ、自己を呼び起せよ、進めよ、と云ふ神の聲に聽け。之が爲に何を棄てねばならぬとも、如何なるものを犠牲にせねばならぬにしても、必要とあれば萬事を放棄せよ。而して汝の夢想する理想に取り縋れ。其れが幸運に汝を導くのである。かくすれば遂には暗黒より出でて光明に入るのである。汝の最高の理想、汝が常に實現せんと熱望する汝一生の事業の夢想——之が即ち汝に取つて唯一の良友である。之と接

觸を保ち、之に執着せよ、其れが汝を標的に導く。汝は何故に星は高く懸り、前途に幾多の妨害と困難とが横はれるかを了解し得られずとも、汝の眼中常に此星を見、汝に登れと命する心の聲に傾聽せば、遂に汝は之に達するのである。

多くの人は如何にして自己が成功を贏ち得たか、説明する事が出来ない。己が當初實驗したる、暗黒なる背景や、冷酷なる境遇や、到底不可能とも見えし難境を、如何にして經過し能ひしかを説明することが出来ぬ。想ふに彼は斷えず、活路を拓きつゝ自ら手引の星ともなり、成功の天の使ともなり、困難と逆境の谿谷を通り、失望の惡水沈澱せる沼澤に於ける瘴癘の氣中より、遂に自己を導きて數段高き處にある清淨の空氣や、光明ある前途の内に進めたのであらう。其れが暗黒より光明と自由と成功に彼を導いたのだ。汝は或る店舗に、又は工場に於て惡闘しつゝあるの故を以て、汝の意志に反したる事を爲しつゝあるの故を以て、或は又汝自ら父母や不具の弟妹を保護しつゝあるに關らず、汝を助くるもの無きの故を以て、汝の豫て懐く夢想が撲滅せられたりと速斷することなかれ。唯だ汝の最善を盡して進め。而して汝の希望を達成すべき不可思議の力を抱く事を肯定して進め、汝よりも一層憐むべき運命の下に生れたる貧困なる幾多の青年男女ですら尙且つ萬世不滅の大事を成し遂げたり。之れ只だ彼等が其理想に信頼し、其理想を達すべき己の力量を信頼したる故

のみ。

エヂソンが今日生存せる最大の發明家たるべき其力量を己に集注し得たる理由は、科學上の問題の解決に、己の思想を不斷に集注したる事、又是等の問題を解決し得る、自己の力に對する信念の強かりし事である。彼の心は常に一步を先んじ、其夢想を客觀的實在に齎來せんとして、之を寤寐の間にも書いて居るのである。彼は常に二歩先んずる自己を夢想し、一步を進めて考へるのである。如此にして成功は其夢想と、信念とに隨伴してくるのだ。(中略)

汝の途は如何に暗黒に而して逼迫したりとも是を意とする勿れ、只だ汝には自ら携へたる提灯あり、其れが汝と共に前進し、次の一步に對して充分なる光明を與へつゝあることを忘るゝなかれ。やゝ遠き前途は如何にも暗く、失望的に見ゆるにせよ、汝が其處に至る時には、光明も亦た其處に達するのである。

基督は其教の始中終を通じて、人々皆な同じく神の性を有するものであることを教へた。基督が「我と我が父とは一なり」と云うた話の内には、己が特に他人より秀でたりと云うた譯でもなく、己が他人より特に神々しきものであると云うた譯でもない。彼は却りて常に其弟子に、己の爲すところは彼等にも等しく爲し得るものであることを教へんとして居つた。彼等が己と等しく神性を有

するものであること、並に彼等に奇蹟と見えた事が出来ないのは、自ら其神性を信する念が缺如せるに依る事を教へた。(中略)

又言へ「私が己に宇宙の實體の一部で、早く永劫の昔より存在し、且つ無窮の久遠に存在するものであるならば、何をかクヨクシ、何によつてか驚倒せらるべきぞ！偶然の出來事や、日用の事件に對して、何ぞ心をさわがすの要あらむ！其様な事は私に何の影響も無い！私は宇宙の本體の一部だ。私の存在は有爲轉變の埒外にある。私の内面には如何にするも破滅し得られざる或る物が潛在してゐる私は不安に左右せられたり、又は自ら能く左右し得るやうなものによりて失望させられたり忤しない、私は永久に安心の境地にある事を知つてゐるのだ。故に私は如何なるものにも心を苦しめられたり又は擾されたりしない。何物たりとも永久に私を侵し得ない。私は斯る決心を以て堅く立つのだ」と。

失敗、失望、落膽と云ふ様な念慮が起つたときに、其正反對のものを以て之に代へ、其等を全然念慮の内から、驅逐する習慣を作ることには、眞に無限の價值がある。之を遂行し得る能力、乃ち心を害せんとする諸物によりて己の心を曇らせぬ様にする事——其れが即ち、總ての成功や、幸福を得る祕訣である。全く傾向を異にする思慮や感情を一ツ心の中に同時に把持し能はぬと云ふ科學

的事實は、矢張り私共の運命を絶対に支配するのである。換言すれば向上的の生活を爲すのも、墮落の生涯を送るのも、成功に達するのも、失敗に終るのも、只だ之れ私共自らの選擇如何によつて決せられ、私共の近づきたる傾向と、私共の好んで思ふ事とによつて私共の心は支配せられてしまふのだ。私共は落膽によりて自ら覆没せられたり、或は其上に立つて、之を壓することも出来るが、何れも私共自らの決心次第である。私共にして若し前途に横はつて私共の成功を阻止せんとする障害物を驅逐することさへ可能きたならば、私共は當然眞に偉大なる事業を爲し得らるのである。さりながら、失望や、心配事や、各種の試練に遇つて苦戦を経てからの後で無ければ、私共の生涯を勝利の旅行たらしめ得ぬものである事も考へねばならぬ。汝が如何に大なるやは、汝は果して汝の大志を徹底的に成し遂げ得るや否やによつて試験せられ、又諸の事物が汝を引き倒さんとして、如何に努めつゝありとも、汝の大計畫を立派に且つ見事に遂行し得るや否やによつて試験せられる。

想ふに勇氣と成功とを期する念慮程落膽に對抗するに有力なる助勢は無いのである。積極的念慮の力は消極的念慮を驅逐するのみならず、又總ての能力を健全に發達させ且つ之を強くする。

各人は常に自ら「我は諸王の王の子なり、我恐るゝ處更に無し。我若し何事に付けても我が最善を盡さば其結果の如何を顧慮するの要無し、又之を顧慮すべきにあらず。我は勇氣なり、我は成功なり。我は天上天下獨尊の神と共にあるが故に何物も我を害ふ能はず。我は失望する能はず、我は敗亡する能はず、何となれば我は總ての生命の無窮の源泉と常に接觸を保持しつゝあるが故に」と云うて居るならば、其勇氣を増し、而して其力を倍加し能ふのである。

此にウエヴスターあり、シエクスピヤありとする、催眠術者は彼等をして自ら痴者なりと信ぜしむることも可能きる。我はサンドウをして、自ら一脚の椅子をも支持し能はぬと信ぜしめもする。換言すれば彼の如く力の強い人でも、信仰と自信とを回復するに非ずば斯る簡単な事をも無し能はぬのだ。

覺醒状態にあつては到底可能なき無様な難事を催眠術者は其命令なり、暗示なりによつて容易に爲す遂げる様にするが、此力は催眠術者の内に生ずるので無く、却て常に被術者其人の内にあるもので、術者は只だ此人を奮起させ、暗示された事を爲し能ふべしとの自信を有するに至らしめ、此人が之を實行するに過ぎぬのだ。

大なる重量を提げたり、之を支持したりする様に、訓練された筋肉でも、其力の十中八九分迄は運動家其人の心より出づるもので、同じ筋肉でも、一朝其支配する心より引き離され、心身の統一

を缺くに至れば、是迄支持し得た重量の十分の一をも支へる事が可能無く成る。解剖學上の實驗によれば、或る運動競技者が突發的に死亡した時に、直に其腕から三角筋を取り來つて計つて見ると、五十英斤迄は先づ支へ得る力量を持つて居つた計算に成るものであるとの事だが、此人の生前には、優に數百英斤を支へ得たのである。此大なる相違は全く心理的原因から來て居る。運動家の自信が全く特別の力を生ぜしめたのだ。實際、人間は若し其手を上にあげ得べしと自ら信ぜず且つ斯く手を擧ぐる力のあることを自ら信ぜぬならば、手をあぐることにすら可能無いのである。私共の信念の大きさは、私共と神とを聯結するケーブルの大きさを示すものだ。若し全能の電流を通じて居る此信仰の電線が小なれば、天に向つて流るゝ強力の電流から私共が受くる力は眞に些少となるのである。私共の信念が大であれば、私共は必ずや、偉大なる丈夫であり、偉大なる婦人である。そして強速度を以て常に神の方向に進むのである。

世人の事を爲すや常に其爲し能ふものよりも小にして終る所以のものは、彼等が人生を夢と觀じ、彼等の大志を心の想像畫に過ぎないものだと思ひ、現實には何の根據をも持たぬものだと想うて居るからである。是等の人達は人生の使命を眞面目に考慮せず、隨つて伸びられ得る自己の長所すら伸ばし得ずして終るのである。彼等は神の計畫が常に合理的である事を認識しない、隨つて各

人が其本分に隨ひ、各其特色を發揮すべきものである事を認識しない。が、お互に此世の人と成つたからには、是非とも此點に力を注がねばならぬ。私共は宇宙間に、全く獨立して、各別々のユニットとして、此人生に放り出されて居るのである。併し私共と神との關係は、丁度葡萄蔓と其枝の様なもので、私共は神意の延長であり神意の一部であり、私共の大志や、慾望は、宇宙意識の反射であると云ふべきだ。自信の強い人は、己の大望は必ず之を成し遂げ得べきものとなし、自己の夢想はやがて之を現實にする能力ある結果だと感ずるのである。(中略)

歴史を作る程の人は、己の一生の事業に對し甚大の確信を持つてゐる。乃ち彼等は己の前途を信じ、將來何を爲すべきかに就いても確信を有つてゐるのである。彼等は己の大望はやがての成功を豫言するものであると信じ、己の大望は將來に期待する事物の實體であつて、架空や假想にあらずと信じてゐる。語を換へて言へば、世界を征服した程の人は、自己の將來に對し、深甚の信仰を持つてゐる人であつた。如此き人の如何にも強い信仰は、其人の自己の力に對する如何にも強い確信と共に私共に深い印象を與へる。自己の將來を信すること如此き人を見ては其内に何物か、私共の尊敬と崇拜の念を禁ずる能はざるもののあることを感ずる。人生の舞臺に於て重要な役を勤むる爲に生れたのだと自ら信ずる人に對しては恰もオルレアンスの一百姓の娘に對して爲された如く世間は自

ら其進路を開いてくれるのである。ジャン、ダークが、佛國の軍隊に對して行つた、奇蹟的行爲の殆んど全部は、其國を敵の手より救ふべしと云ふ神意に對する確信より生れたのである。此確信なかりせば、彼女は一兵士に過ぎなかつた。神意に對するこの信仰なかりせば、到底太子チャールスに逢ふことは可能き無かつた、チャールスの率ゐる軍の總指揮をする許可を得ることは可能きなかつたのである。彼女は自分を措いては他に佛國を救ふ人の無いこと——全軍の勇氣は己が一身に集つて居ること——彼女の率ゐる軍は、勝利を得ること更に疑ひなしと堅く信ぜる事——を強く主張した爲に、遂に太子から大任を委托せられたのである。

父の畜ふ羊の群の番をして居た此少女が、其心の内に始めて神の聲を聞いた時以來、終始其信仰は全く不動であつた。娘が佛蘭西を救ふ杯と云つて自己が空想を頑固に主張した時、ジャンの父は彼女を水に溺らすべしと恐喝したが、其れは何の役にも立たなかつた。

如何なる惡罵——殊に兵士共が女性に與へた、粗暴極まる惡罵——も深く根ざした確信に對して、何の影響も與へ無かつたでは無いか。牧場で羊の群の番をして居つたばかりで、是迄に一度も家庭の外へ出た事も無く、そして戰略と云ふ事に就いては、一寸の練習もせず、何の知識も無かつた單純なる百姓娘が、敗退せんとする軍隊を勝利に導いたと云ふ様な、馬鹿げた事が、是迄嘗てあ

つたであらうか？彼女は、如此き懸念や、惡罵や、輕蔑を如何に取扱つたのであらうかといふに、彼女の優越したる信仰は此様なもの凡てに超越し、是等は彼女を寸毫をも動かすことは可能きなかつたのだ。彼女は只だ信仰によつてのみ、歴史上に於ける大事を爲し了したのである。例へば那破翁オールドマンの様な強い意力を持つた人であつても、非凡の軍事的鍛練無しには此無教育な訓練も無い、百姓娘が爲し遂げた奇蹟を爲し遂げる事は可能き得無いのである。(中略)

耶蘇は幾度か、『汝の信仰によりて、……汝の望む如くに成らしめよ』と云はれた。何よりも耶蘇が力説した二つの言葉は信念と信仰とであつた。此言葉は恰も魔力でもあるかのやうに、驚くべき勢を持つて居て、其力は電氣よりも強かつた。基督は『恐るゝなかれ、只だ信ぜよ』『歡び勇むべし是れ我なり、恐るゝなかれ』『汝の信仰により』などと絶えず信念と信仰の力とに就いて説いたもので、かく信仰を勧めるのが、十二使徒に對する彼の使命の中の最も重大なるもので、彼は常に之を繰返して居つたのである。耶蘇は使徒等が、信念を失つて居ることや、其臆病なることや、其恐怖して居ることや、其不信なることなどに對して、隨分度々叱責したもので、例へば耶蘇より與へられた使命を果さずに、使徒共が歸つて來た時に、彼等を責めて『何故に汝等は然く怖れるか？何故に汝等は信念を持たざるか？』と叱りつけて居るのが其れだ。耶蘇が使徒等に爲さしめんとし

て、訓練して居る事業は、只だ一の條件によりて、之を爲し得ることを保證した——一の條件とは彼等が只だ信念を持つことである。此信念さへ持てば、十二使徒は恐らく、耶蘇よりも大なる事業を爲し得たであらう。されば、耶蘇は「眞に誠に我爾に告げん、我を信するものは、能く我が爲す處を爲すべし、我爲し能ふものよりも大なるものを爲し能ふべし。我はやがて父の許に行けばなり」とか、或は又「病を癒すべし、癩病患者を清くせよ、死者を蘇らしめよ、悪魔を追ひ拂へ、汝が他より得しものは、亦た之を他に與へよ」なども言つてるのである。(中略)

『考へるからには存在するのだ』と云ふ格言ほど、人の健康に的確に應用さるゝものはない。

健康は只だ自ら健康であると考へることのみによつて、得らるゝものだ。同様に自ら病氣であると考へれば病氣になつてしまふばかりだ。

汝にして若し成功を思ひ、之を期待し、寤寐の間にも之を忘れず汝の心を大なる磁石に化して成功を引付けたとすれば、必ずや之を引付け得らるゝ如く、汝若し健康ならんと欲せば、矢張り同じく之を期待せねばならぬ。乃ち汝の心を健康に對する大なる磁石となし、一層充分の健康を引付ける様にせねばならぬ。己の體質に缺點あり、其れが虚弱で病的状態にあると云ふ思想や、自分が多少なりとも不健康であるとの妄幻像が心の内にある間は、身體は必ず不健康になり、病的になる。

何となれば私共の身體は私共の思想の延長であり、私共の心を客観化したものであるからだ。健康の基は體的完全と疾病を絶対に否定する思想より始まる。換言すれば、理想的健康状態の外は、凡て之を否定し、人間の利益(其最高意義に於ける)に成るもののみを眞の實在なりとし、總て身體の不調和は心の不調和より來り、其れが決して私共の存在に必須の實在でも無ければ又私共の實體でも無いとするのが、是れ私共の爲に健康の基礎を作るのである。されば、健康とは、無窮の實在をいへるに外ならない。疾病は實在の缺乏を稱したものに過ぎず假想即ち疾病だといふ事に成る。醫師が患者を治療する力の能否は、健康を暗示する技倆や、患者の心に理想的に健康な身體を畫かしめ、病的な不調和の爲に苦しんでる如き人を想像せしめず、常に理想的な健康人に就いての印象のみを、深く強く與へ得る力の強弱深淺如何によつて決せらる。

千八百六十六年のことであるが、當時英國で最も有名であつた一醫師、サージエームス、バシエツトは、永らくの間自分を手古摺らして來た一婦人患者が、其内似而非醫師の手に懸り、其醫師が無茶苦茶に氣息の言葉を患者に言つて聽かせるのが、效を奏し、之によつて其患者が旨く病苦を忘れ、病苦を制し、遂には多年の疾患より癒されてしまふに至る如き事態を生じ、免許狀を有する正式の開業醫なんか、何の役にも立つもので無いとの譏を受くるに至らうといつてゐるが、かく

堂々たる開業醫に匙を投げさせた患者で、屢々似而非醫師の手により、却て全治する如き場合のあることは、多數の醫師によつても既に承認せらるゝ處である。然し、似而非醫師に斯る醫治力のある所以は患者の精神、彼の健康に關する確信を與へ、彼の身體が素とく病體にあらずして、健康體であることを信ぜしめ得る、其大膽不敵の力にあることを、彼等はまだ覺つて居らぬのだ。

其の似而非醫師たると、施術者たると、免許狀を有する醫師たるとの如きは問題で無い。兎に角、疾患は單なる假想で、決して私共存在の實體では無いとの原理に基きて患者に接する者が、患者の健康を恢復せしむるに最も成功するのである。蓋し、かくすれば患者の體中に潛んで居る活力が、頗る能く活動し出して、其醫師が其患者の精神に感得させた、完全にして強健なる理想の健康人を自分の體組織中に築き上げ、之を實現するに至るからだ。

さる外科醫の大家から聞いたことであるが、此醫師は患者をして己を信ぜしむる爲に往々必要も無き手術を行つたとの事だ。乃ち多年の間或る機能に疾患の種を持つてゐて、其れが爲に恐怖心を抱いてゐたが、遂に疾患の微候が見えて來る様になつた如き患者に對しては、先づ手術に必要な總ての準備行爲をした上で、その患者を手術臺に横はらしめ、麻酔劑を用ひ、恰も手術を施したかのやうに見せる爲に、僅かに皮膚の一部を剝ぎ之に縋帶し、一定の期間病室の寢臺に寝かして置くの

である。すると、やがて不思議に其患者は全然恢復して、常態に復するを例とする。併も此方法によりて治療を試みたる患者は、殆んど全部全治したとの事である。なほ其醫師は、患者が幾月にも互りて、頑固に苦痛を訴へて居た場合でも、此種の信仰方法によりて、全治することが可能きたとさへ云つて居た。勿論此外科醫は自ら正當なりと信じてゐる、かゝる虚偽の行爲に付いて何等患者に話しをしない。何となれば、彼の目的は最少の危害を以て、患者を治せんとするにあるからだ。又他の外科醫の話にも、ヒステリー質の婦人に對し、矢張り屢々此種の偽手術を施したといふのがある。それは悪性の腫物が出来てきて手術を必要とする病狀にあると自ら勝手に想像し、決して其様な心配は無いと如何に謂つて聞かしても遂に了解しなかつたと云ふ様な婦人に對してゝあつた。又此同じ方法で治療をした他の事例に、内臓に瘍が出来たと云つてた一婦人もある、此婦人は從來四回迄手術を受けて、瘍を剔出したのだが、或時突然ランプを倒した爲に激動して、狂氣になり、又々瘍が出来たとの妄像を畫き其生命を救ふには手術の外に方法は無いと誤信する様になつた。如何にしても此婦人の心を和らぐことが可能なき爲に、醫師は手術の眞似をすることに決心したとの事である。

その患者は先づ手術臺の上に置かれ麻酔劑の爲に半醒状態に陥り、聽くことや、知覺はあつた。

が、視ることの可能な程度に睡らされたのだ。次で外科醫と看護婦は室内を靜かに動き廻り、あたりの人々に忙がしさうに、種々指圖し、如何にもむつかしい手術にでも従事してゐる様に振舞つて見せ、やゝ高き處から、五六分間程、氷の滴を局處に落して患者をして恰も綱帶をしてゐる様に感ぜしめたのである。後刻患者は病車にて自宅に運ばれたが、目ざめた時に、寢臺に看護婦が二人迄居るのを見た。婦人はやがて薄い茶を一杯飲みたいと云つた。此時婦人は自ら恐しく力が無く、且つ疲勞して居ることを看護婦に話す様になつた、是非共努めて力を出さねばならぬと人に勧められて、漸くのこと、少許の茶を飲み了せたが、病人は其れより十日間病床に居たあとで、漸く面會を許され、次第に元氣を恢復したのである。外科醫の刀痕は少しも無く、眞の手術をしないにも關らず自らは眞に手術を受けたものとのみ信じ切り、手術の爲に助けられたとの信仰を獲るに至つたので、之により、其時まで、健康が危険の状態に瀕せりと思つてた先きの妄想を緩和し、遂に之を無くしてしまひ、己を救つたものは全く此手術の外に無いと、今に至るも信じて居るのである。

同じ外科醫から又一層面白い談を聞いた。或る若き婦人があつたが、婦人は不斷頭を左右に動かすのが癖で、その自ら醫師に語るところによると、頭の内部に絲があつて、其れが頭部を左右に引

くのだと云ふにある。是は全く妄像であると云つて聞かしても、到底婦人を納得させることが可能無いため、其醫師は遂に之を或る外科醫に向けたさうだ。其處で外科醫は偽つて外科手術をすることにした。其外科醫が手術を必要とすることを語つた時に、婦人は手を拍つて悦び、其婦人が是迄診察をした内科醫や、外科醫は、婦人自身は頭部に絲があることを承知して居り、是非手術を受けて、其れを除く必要があると云うて居るにも關らず、只だ笑つて、愚にもつかぬと云つて取りあはなかつたと語つた。その外科醫は不取敢少許の麻酔劑を用ひ、うるはしい金髪を少し切り取つて、皮膚を少し切開して、恰も手術をするかの如くに見せかけ、次で外科醫は「ヴァイオリン」のイ一の絲を水に浸し、それがバラ／＼の纖維と成つて見ゆる様にして置き、やがて病人が覺醒状態に復つた時に、此絲を示し、之が即ち婦人の頭部から出たもので、手術は實に經過よく行はれたと語つたのだが、斯くして絲が取り去られたことを婦人に信ぜしむる迄は、如何な手段によつても、絲が頭を左右に動かして居るのでは無いといふ事を信ぜしめて之を妄想の因より救ひ出すことが可能になかつたのである。

此の信仰治療は、パンを丸藥にして服用せしむる療法と同巧異曲で、パンの丸藥を外科手術に應用したものだ。然り、此方法たるや全く心理療法たるに外ならぬもので、病人に信仰が出来さへすれば

ば、それが直に醫治效驗と成つて顯るゝのである。

醫師や、其處方若くは賣藥の效能とても、全く之に對する患者の信仰、乃至は期待、又は自ら之によつて治癒せられ得べしとする信念によつて始めて顯れ來るもので、一たび之に對する信仰を失つてしまへば、治療の效驗は忽ち何處かへ消え失せて行つてしまふのである。醫師も之を充分に承知して居るので、病人の心に信仰と希望を失はしてしまへば、悔復の望は全く無くなるものだと思つてゐる。之が即ち醫師が病人に對して、可能きる丈け長く、絶望状態を告げ無い理由である。蓋し之を告げた曉には恰も死刑の宣告が罪人に甚しく影響するのと同じで、全く患者の希望を奪ひ去つてしまひ、その將に危機一髪のところを乗り越えんとする、元氣集中の力を打ち減ぼすからだ。かくして、勇氣と望と、期待とが、治療に對する強力なる援助であることは醫師と雖も猶且つ之を信じ、是等によつて、専門的施術の及ばざる處を補はんとしてゐるのだ。

救援の期待は其れ自體實に有力なる治療法である。此處に私の記憶にある或人の實例を擧げるが、此人は特種の病氣にかゝつて數年間苦み続け、病院の手は到底届かないと云つて居た。折しも或る外國の醫師にて、嘗て同じ病氣を治した爲に、非常な名聲を博したと云ふ人が、幸ひ此國に渡來した頃は、已に此病人の病勢は次第に悪くなつて居た時であつた。此病人は醫學雜誌や、新聞

で、此醫師の擧げた偉大な成績に關して、幾度も讀んで、遂には此醫師に診察されるれば必ず全治するとの、狂的信仰を持つやうになつた。此人はやゝ貧乏ではあつたが此病苦より解放せらるゝを得ば、如何な費用も、安いものであると感じた。病人の此醫師に對する信仰は實に大したもの、特に此醫師の許に行く爲に、只だ一弗でも多く、費用の用意を爲さんとし、其家を抵當に入れ、あらゆる所持品を賣却してしまつた程である、此病人が此専門醫が住まつて居る町に到着したが、此専門醫の醫院は病人の爲に門前市を成す盛況なりし爲め、愈々醫師と會へるまでに成るには、随分永く待たされたのである。併し病人の信仰は非常に強いもので、醫師に面會をして、其手術を受くる前に、已に其病が大半癒えてゐたのだ。やがて身體の檢診をして貰つた時に、醫師は、此病症が必ず恢復すると云ふ確信を與へた。そして其爲に處方を使用しない内に已に大いに病苦を忘るゝ様になつたのである。此事例に徴して如何に疾患に對する心理的影響の大なるものなるかを考へ見よ。此病人の心は當時此醫師の治療によつて快氣に向ふべき恰好の状態にあつたのである。病人は少しの疑心を持たず、只だ／＼全治さるものと思つて居たので——。彼は全く、其信仰によりて全快することを得たのである。世人の多くは強き信仰によりて、一文の價値も無い專賣特許の藥を用ゆるのみで全治せられて居る。さる人は多年の間己の病氣は或る特種の藥さへ得れば、必ず

全治するものと信じ、又それが實現せられてきて居る。彼等の期待は大にして、其希望も大であり、其信仰は力強くて、斯くすれば必ず全快するものと思ひ込んでるので其條件が實現されさへすれば、屹度彼等が樂觀的に思ひ込んでた通りに成り、治癒の結果ををさむるのである。(中略)

心理上の法則はいつでも眞に簡單明瞭で、恐怖の心は更に恐怖を起さしめ、心配は一層餘計な心配を集め、苦慮は更に苦慮を生み不安の念は更に不安を生み憎悪は更に憎悪を生じ、嫉妬は更に嫉妬を、而して貧困と想ふの念は更に貧困を生むものだ。是は即ち引力の法則であり、其他の法則と同じく萬代不易である。「貧困」と稱せらるゝ病氣を癒す其特效薬は即ち「幸福」の思想で、之に依りさへすれば必ず全治し得らるゝのだ。貧困や缺乏や萎縮的壓迫やを打破する爲に、汝は常に汝の心の内に此特效薬を用意して居らねばならぬ。貧困の病氣は常に此薬を用ひて、自ら治療すべきである。蓋し、幸福の念は直に貧困の萌芽を枯死せしむるからである。(下略)

以上がマーデン氏の所説の要領であるが此れを本書の第二章(丑林)と讀み合して、信すれば現はれる「出来ると思へば何でも出来る」といふ「信の力」を手に入れて貰ひたい、否な腹に入れて貰ひたい、思へば信念の力ほど恐るべく不可思議なるものはないので、靈學に於ても此の信念の力を本統に會得した人が傑出するばかりでなく、世の中の一切の事業に於ても此の信念の力のこつを呑み込ん

だ人が成功するのである。我れといふものは宇宙大神靈の延長であり、一部分であることを忘れずに、我が思ふところは即ち大宇宙の思ふところなることを忘れずに、神と俱にあり、神と俱に歩み、神と俱に思ひ、神と俱に喰ひ、神と俱に寝ね、神と俱に歌ひ、神と俱に働き、神と俱に生けることを歡びて、この大光明裡に活動せねばならぬのであります。眞に驚くべく、眞に歡ぶべし、吾等は何れも斯くの如き殆んど無限の能力と無限の威力と無限の神祕力とを有せるものであります。吾等が若しも小さな働きより出来ぬものならば大宇宙も平凡な小さな頑然たる何の神祕も靈妙もないものでなければならぬ、然るに小さな椗の實から蒼々として天を蔽ふ千年の大樹とならしめ、直径八千哩の地球を一瞬間に七萬二千里も飛ばしてゐる大神靈の働きが事實である以上吾々も摩訶不思議の大能力者であらねばならぬ、それは大神靈と我等と本來一體のものであるからであります。我れみづからを小さきものと思ひ、つまらぬものと思ひ、弱きものと思ひ、不自由なるものと思ひ、汚れたるものと思ふほど、神にそむく罪の大なるはなく、みづからを罪する大なるは無しであります。人は眞に「神の子なり」との自覺が人生に於ける最重最大の發見であります。この大自覺の上に立つといふことに徹底しない人には、靈學上のどんな秘義を傳へてやらせてみても卓拔せる成績の擧がらぬことは多年天行居の實驗より得た實證であるが、これはひとり靈學上のこつを講ずる上からばかりではないので、嚴

密に申しますとこの眞の「神の子」といふ自覺、直接に世界最高絶對の大神靈につながつてゐるといふ自覺のない人は、人としての資格のないものといふことになるのであります。これは甚だわかり切つたことのやうで實は甚だわかりにくい問題で、深く／＼省察して頂かぬと折角に寶の山に入りながら手を空しうして去ることになります。老子も我道甚だ知り易く、能く知る無し、甚だ行ひ易く能く行ふ無しと嘆じて居ります。一度はつきりと眞解されて手に入つたやうでも、また日を経て更らに一段と妙境に入ることが體驗され、山上尙ほ山あることを誰れでも神悟するに至るものでありますから萬事早合點が大禁物で、本書全卷を一字々々氣をつけて善く讀み、善く味ひ又た他の天行居の出版物と彼此照合しては時々こんきよく繰り返しては讀んで行くうちには段々と霞中の樓臺を認め來るやうになるので、これは「時」と「こんき」との結びついた妙力によつて發現してくるので此のこつと申すものは普通の言説を以て傳へ難いので、決して門戸を高うして法を惜むわけではないのであります。孔子は易を讀んで韋編三たびすりきれたとか傳へられて居ますが、孔子の聖智を以てして尙ほ且つ然りであります。此の「ものごと」の數を重ねる」といふことは實は宇宙の祕密で、數靈の不思議力は茲にあるのです。眞言密教の事相を研究した人は何々の眞言を百八回唱へるとか、何々のガラニを五百回念誦するとか又は八千枚大事とかいふことがありますが、あれは數を重ねるところに不可思議

力が生れてくる其の祕機を捉へて居るのであるけれども五百年來此の祕義を知つて居る人は高野にも醍醐にも一人も居らぬので、世界の密教は既に實際に疾くの昔に滅亡して居ります。弘法大師の如きは今日のありさまを見て血の涙を流して居ります。わが天行居の學人はすべてこんきよく精修を積まれねばなりません。漫然と卒讀して其れなりけりにする人々は、我が森嚴なる種々の所傳も他の紛々たる俗靈術と擇ぶところ無しと雲烟過眼視去るので、實は斯くてこそ我が道の尊きこと他に百千倍なることを知るべしであります。老子曰く、上士道を聞く、勤めて之を行ふ、中士道を聞く、存するごとく亡するごとし、下士道を聞く、大いに之を笑ふ、笑はずんば以て道となすに足らずと。天行居の出版物は皆な已むを得ずして出るもので、小冊子なりと雖も見る人が見れば宇宙の祕典と化して十二彩の光芒を放ち、受用無盡であります。奇なるかな。奇なるかな。語の淺劣、製本の卑俗をみて、これを手にする者には何が書いてあるか眞にわかるものでない、書籍は固より無自性のものであるから何にでも化けるのであります。

福澤桃介なる者の小星、むかし、川上貞奴と名乗つた婆さんが九州醫科大學の神博士に就てスタイナハ氏の若返り注射を受けたとか云ふ噂さを昨年聞いたやうに思ふが、笑ふにも笑へないやうな世の中になつて來た。スタイナハ氏の注射の價値は私は知らぬが、數年前或る何とかいふ醫學士が若返り

法の研究を發表した小冊子を誰れからか送つて來たので其れを一讀した記憶がある。それはスタイナハ氏なんかに關係のない研究で、一見すれば極めて平々凡々な話を書いてあつたのと出版の體裁が卑俗な片々たる小冊子であつた爲めか格別世間の注意を惹かず學界の問題ともならず消えて了つたが、此の某醫學士の言ふところは悉く同感であつて、その若返り法は一錢の資本も要せず誰れにも直ちに實行の出来ることで又た其の効果は必ず確實であることを私は信じて疑はぬものである。その内容は其の醫學士が十數年にわたつた研究の結果を發表したものであるが、ジャガ芋や犬について色々實驗を積んで好成绩を挙げた後、人間（老人）にいろいろ試みて非常な立派な効果を舉げて居る、その方法は甚だ平凡簡單なことで、なるべく若い人達と談笑し、野菜物を喰ふにもなるべく若いものを食し、魚類等もなるべく若いものを選んで食ひ、庭の草木もなるべく若いものにして若い草木を見るやうにし、衣類も出来るだけ柄の荒いものを着るやうにし、音樂を聞くにも成るべく元氣な愉快なものを書くやうにし、床の懸軸等も荒涼たる寒山落木の景色などをかけずに若草に小鳥の嬉遊せるやうなものにし、五官に觸るゝもの一切を事情の許す限り若い元氣な雰圍氣に包む工夫をするのである。あまりに平凡な話で、むつかしい學術上の論據が並べてなかつた爲めに世間の注意を惹かなかつたのかも知らぬが左りとは情けない世の中である。六かしいことを云へば勿體ないやうな氣がして信

用し、平凡な話には耳をかさぬといふのは現代人類の病的心理状態である。道は近きに在り道にして人に遠きは道にあらずと古人は言つて居る。孔子も「邇言を察す」と言ふ、邇言を察すとは隣りの爺さんや肴屋の熊公の言ふことにも眞理があるといふ意味である。それは其の筈で肴屋の熊公も孔子も同じく「神の子」だ、故に時として神の啓示を洩らすのに不思議はない、邇言を察せぬものは「明きつんぼ」である。なんぼ笛を吹いても踊らぬ奴である。——元氣な愉快な若い雰圍氣に包まれて居れば若返るのは靈學上の見地から言うても至極尤ものことで、この若返り法は何等の危険も障害もなく且つ奏效確實であることを私は保證する。本來からいふと年をとつて老人になるのは自然であつて若返るといふことは神慮にもとるやうにも聞えるけれど、福桃の妾などは別として一般に此頃の人間は不自然に早く老い込む傾向があるから大いに元氣を作振して一人あたり平均二十年位は若返つて貰はねば日本の將來は心細い。今の世界の一二等國の中で日本國民位は早老的傾向の著しいものは他にあるまい。日本國民も神武天皇前後は大抵百歳以上まで活動して居り、ウガヤフキアヘズノミコト時代は二百歳三百歳乃至五百歳まで位は活動したものが多し（尤も百歳以内で夭折したものもあるが）。誰れかの唄に、「四十五はまだ青二才、男ざかりは眞八十」といふのがあるが此れ位は元氣はあつてほしいものだ。近代では渡邊幸庵の百三十歳、前野默軒の百十四歳、甲斐徳本の百十七歳、伊藤圭

介の九十九歳、小野湖山の九十七歳、一井梧風の百十六歳、寺田無禪の百十二歳と云ふやうな事實があり、雨森芳洲は八十一で和歌に志し三年の後に一萬首の作を残した、親鸞は八十五歳で一多證文を撰述し、蓮如は八十一の時に子を生ませて九九丸と命名した、例の三浦觀樹將軍が六十八で女中をはらませて六八郎と命名したのと同格である。子供を産ませることは問題外であるが元氣だけは偉とするに足るであらう。西洋人でもピタゴラスの門人のアポロニウスは百歳以上、ソクラテスは九十八歳、チチアンは九十九歳、ランダアは八十五歳で「イマジナチブ、コンヴァセイション」の大著を書き上げ、ソマーヴィユは八十八歳で「モレキュラー、サイエンス」を著し、ハーネマンは八十歳で結婚して九十を過ぎても仕事をつづけた。現にエチソン博士の如き高齡を以て今日も尙ほ殆んど不眠不休で研究をつづけて居る人もあるのである。そんならイツタイ天行居の理想とする人壽はどれだけかと問ふ人あらば直ちに答へん、曰く東方朔九千歳。

人間の思想感情は善惡正邪ともに一種の氣體となつて身體から發射するといふことは日本でも古來から言ひ傳へたことだ(タトヘバ天保年間に櫻寧主人の著はした「養生訣」などにも説いてある)ありますが、西洋の方では近來これを科學的に證明して來ました。神靈學は殆んど我國特占のものであ

るが人靈學は昔は印度に於て精研せられ近來は歐米に於て盛んに研究せられて來たから歐米に於ける研究によつて訓へられることも随分尠くないので、此の靈氣説も其の一つである、人間(動植物でも左うであるが)の身體からは常に靈氣を放射しつゝあるものであるが、これを西洋ではアウラと稱へて居る、このアウラは善惡正邪の感情によつて色彩も異り、神聖崇高敬虔な感念のときには青色の光が出るとか、愛慕の感情の燃ゆるときはうす紅いばら色の光が出るとか、嫉妬怨恨憤怒のときには赤色の光が突角的形狀に噴出するとかであつて、それは普通の肉眼には見えぬけれど三昧に入れば見えるといふのであつた。何しろ普通の肉眼で見えぬといふのでは科學的に證明するわけに行かず従つて學説として學界に肯定せしむるわけに參らぬのであつたが、こんな研究には西洋人は熱心なもので遂に英國の醫家キルナル博士によつて一種簡便の機械を發明し、この機械を以てすれば誰れの肉眼でも見えることになつたので學界の八釜しい問題を惹き起して來た。その機械といふのは至極簡短なものでデンアニン(コールドターの中から製出した青藍色の染料)をアルコールに溶解したものをガラス器に入れたものである。人間に限らず總てのものは其の思想感情が噴出して他のものに影響を與ふることは實に驚くべきで、普通の肉眼にこそ見えぬにしても此れは輕視することの出來ぬ重要な大問題である。母親が何かの問題で激しい忿怒を抱いて居るとき子供に乳を啣ませると、子供は直ぐに乳を

吐き出すか下痢を起すのは誰れでも知つて居る事實で母親の忿怒の感情が直ちに乳汁に毒素を生ずるのであるが、これは單に乳だけな問題ではない。一切萬事かくの如しであるから人間が邪惡の思想感情に包まれて居るときは此の世界は毒氣に充ち満ちて居るので正しい神は寄りつかれることも出來ず邪惡の魔靈が自在に活動するのであります。これは社會に於ても家庭に於ても深く注意すべき活ける大問題であつて、一見して何でも小さい様な問題で其の影響するところの非常に大きな問題であります。實際問題としてその一つを指摘するならば悲劇物の小説や演劇が人生を毒害する程度を考へてみるのもよいのである。この毒の大なるにくらぶれば淫蕩なニキビ文學や、毒惡な活動寫眞の毒もくらのものにならない程である。小説でも演劇でも新聞雑誌の雜報的記事でも活動寫眞のフィルムでも、すべて悲哀困憊の材料を取扱へるものは皆な極めて有毒有害で、その毒は普通人間の眼で知り得る數倍、數十倍數百倍のものである。悲哀な小説を書き上げて不幸にもそれがよく賣れて文豪といふ虚名を博したほどの所謂世界的大家でも、神々の眼よりみても、又た人生の正しい批判の上よりみても、全く無價値のものであるのみならず極めて有害なもので、其の所謂文豪の罪は千人の男女を刃を以て慘殺したものよりも大である。かく言へば藝術は道德を超越すといふかも知らぬが、悲劇的なものでなければ人情美なり人間の真相なりが表現されない、味はれないといふ間は決して眞の藝術なる

ものは向上しない。今日の所謂文化病の人々の持てはやす藝術なるものは實は汚らはしき惡魔の夢である。今日の多くの病人や不運者の大部分は何等かの悲劇物中毒者である。自身も其れとは氣づかず、近親者も氣づかないが、實は何時か知ら讀んだか見たかの、何等かの悲劇物が、その人間の魂ひに喰ひ入つて居るのである。故に一般の家庭からは一切の悲劇的な讀物を一切焼き棄て、了はねばならぬ。古本屋に賣つたり人にやつたりすれば又た他の人が知らず、其の毒を受けるから、惜まずに焼き棄てるがよい、これを「惡魔の葬式」といふのである。謡曲の如き濫い高尚なものでさへ、蟬丸だの俊寛だのいふ悲哀なものは餘り感心しない。若しも家庭の中で一人でも悲劇物に讀みふける人があれば、その毒は其の一人だけではなく、靈氣の作用で其の家庭全體に及んで何等かの災厄が起つたり不幸な事件が出來たり病人が出來たりすることはトテモ普通の心理學などでは説明の出來ぬほど強力なものである。併し此の悲劇物を讀みたがる人を其の「惡魔の書」から解放することは案外にむづかしいもので、かくれても讀みたがるものであるから、家長たるものは能く考案をめぐらして、他の愉快なもの、希望の光を起させるやうな讀物に漸次に轉換させるやうに仕向けて其の人を救ひ出さねばならぬ。否な是れは其の家庭全體の除禍作福の祕術の一つであります。——人間の思想感情は其のまま靈氣となつて發射するといふことを能く考へ、信念の力の如何なるものなるかを深く味へば、ひと

り靈學上のこつを呑み込むことが出来るのみでなく、眞の若返り法の原理にも通じ疾病を驅逐し悲運不幸を驅逐し去る道理も手に入り、家庭生活の上にも事業の上にも國民生活の上にも其れづくに活用して考へて大いに啓發するところがなくてはならぬ、啓發すると同時に實現に努めなければならぬ、世界の眞の改造は斯うした靈的見地から徹底的に出發しなければ期せられるものではないのであります。

辰 林

今日は音靈法のことを講ずることにするが先づ靈學筌蹄の第六章を今一度精讀した上でこちらの方を讀んで貰ひたい、猥りに讀み急いでは得るところが少ない。此の音靈傳は修行の方法が餘りに簡單な爲めに非常の誤解を生じやすく或ひは一種の聽音催眠術と同一視せられ、或ひは禪觀の一種と早合點せられるが、實は森嚴なる神傳のものであつて、自他の治病の上にも又た靈通の上にも即座に忽ち大效を擧ぐるものである。人靈を土臺とする靈學としては最尊至上の奥儀とも申すべきものであるから此章だけを卒讀して直ぐに着手するやうな輕學を試みず、本書全卷を繰り返し々々味讀體讀して充分の信念を養ひたる上、大決心を以て着手して貰ひたいのである。靈學のこつは錐をもみ込むやうなもので、充分の信念を養ひて信念が充ち溢れんとするとき、一氣に懸命に修行するを要する。この術は誰れも彼れも必ず通徹することを私が確く保證する、坊間の種々の類似の蕪穢の書を何百冊讀んでも何の役にも立たぬ、この一書で澤山であることを信じて貰ひたい。再讀の價值無き書は一讀の價值無し、再讀の價值ある書は百讀の價值あり、世間流行の〇〇〇とか何々術とかの特別奥傳まで進み百金の束修をしても根つから格別の所得の無かつたものが此の天行居の音靈法だけを得て忽然として乾

坤一變し、驚くべき靈能者となつて歡喜雀躍したものが何人あるか知れぬ、かくの如き片々たる小冊子で印刷實費に近い廉價で手に入れた書だからと思つて輕視せられてはならぬ、茲に平々白話を以て説いても實は惜むところなく極秘が解放してあるので天行居の犠牲は至大である。上古の眞仙が「これを出せば泄寶の咎を受け、これを藏せば斷道の罪あり」と嘆じたのは直ちに今日の吾徒の苦衷である。本書中の或る章を心讀せられると或る機微が洩らしてあるが實は靈界に於て今や一大時節に切迫したから敢て此の擧に出でたので洗手、端座して此書に對し一字々々氣をつけて見て行つて何ういふ處に千古の祕事があるかを看取して貫はねばならぬのである。さて我が古傳と音靈法との關係は稍や靈學筌蹄に於て説いておいたから茲には直ちに其の修法の心得を講ずるのであるが、これは人靈を土臺とした修法であるから便宜上印度の心理學たる佛教の言葉を假りて説明することに致します。眞の道といふものは印度流に説いても西洋流に説いても支那流に説いても少しも差支へなく、時の便宜に従ふを可とすることは本書全卷を讀まれた活眼の士には合點が參る筈である。——茲で又た讀者は前に述べた「丑林」の電子説を念頭において考へられると最古の心理學と最新の科學との力によつて一層わかりやすいのであるが、私は佛教八萬四千の法門はギリ／＼結着の處つまりが、心は工畫師の如く五蘊を畫く此の世の中に一切の法として造らざるなしと云ふ其の「五蘊の闇を破する」にありと解

して居ります。加藤咄堂氏はかつて長い間佛教の講釋をした結論として「佛教は要するに轉迷開悟の四字に盡く」と謂つたさうだが轉迷開悟も離苦得樂も五蘊を破することである。五蘊の妖雲を拂ひつくせば吾等は宇宙の第一義諦と格致するから何者にも束縛されざる光風霽月の境地に立ち、所謂天上天下唯我獨尊で時として處として通ぜざるなく一片の暗影にも犯さるゝわけのものでないことになる。眞宗で「罪惡生死の凡夫」といふが其の罪惡とは念(五蘊)のことである。念慮なくんば直ちに是れ十二光を發して阿彌陀佛となるのである、この道理を親鸞は「阿彌陀佛とは心の異名のことぢや、ナムアマミダブ／＼と稱へて心呼びさますのぢや」と説いて居るが心が眞に呼び醒まさるれば一切の念慮は姿を消し、身もなく我れもなく心もなく稱名もなく成るほどこいつは間違ひのない阿彌陀様に相違なからう。五蘊を念の一字に歸したのは少々がさつ、の様に聞えるから少し説明してみると、蘊(Skandah)とは元來Skand語尾の變化から生れた言で、「動きつゝあるもの」と云ふ意味であるが支那人は「集まつて居るもの」といふやうな意味の文字に譯して居る、どちらにしても格別の不都合はないやうであるが原語の意義の方がウマイやうに思はれる。五蘊とは色、受、想、行、識の五つをいふので、色(Rupa)とは對照物のこと、火鉢とか机とか美人とか犬の糞とかいふ一切の形あるものだ、受(Vedana)とは感覺だ感情だ、美人だとか犬の糞だとか意識することだ、想(Samjna)

は觀念とか概念とかいふやうなもので、火鉢は火を容れるものとか、犬の糞は臭いものとか其の働きを考へること、行 (Samaskara) とは意志、判断とでも申さうか美人は一見恍惚たらしむるがウツカリ引ツかゝると輕井澤の別荘へ行つて首を縊らねばならぬとか犬の糞は不潔だから掃除をせねばならぬとか考へるのが其れで、識 (Vijnana) は理性のこと、智のことで最高の感情である。人間が犬猫と異なるのは此の識の素質、程度、分量が異なるので、あとの色、受、想、行の四つは大きッぱに謂へば異なるところはマア、無いと見てよからう。これは有爲の五蘊であるが此れに對して出世の五蘊といふことを説いて居るが煩はしくて茲に用はない。人間は此の五蘊めの爲めにめぐら滅法に暗闇をやつて居るのである。最後の「識」の如きは人生に於ける最上尊貴なもので五倫の道も茲に立ち、藝術も政治も宗教も茲に培はれてゐるのではあるが、實は此の「識」の正體も妖怪の所現に過ぎぬもので古今無變の大賊である、人間この賊のために煩はされたことは莫大なもので思へば身の毛もよだつ程のものなのである。故に我が或る神仙の化現たる老子も「道の道とすべきは常道にあらず、名の名とすべきは常名にあらず」と示し「天下皆な美の美たるを知る、これ惡のみ、皆な善の善たるを知る、これ不善のみ」と喝破したのである、併し學人尙し容易の看を爲して惡平等に墮せば地獄に入ること箭の如しだ、野狐禪者流も不落因果で五百生の苦を嘗めながら又た性こりもなく不昧因果で二度の左り

棲を取らねばならぬ醜態を演じるので仔細に點検してかゝらぬと丸呑みの破れ圓頓は天行居の禁制である。——とにかく人間は此の五蘊を破了すれば神人合一、宇宙第一義諦と融通無碍となる、印度の心理學で佛といふのは、梵語の Buddha であつて此れは「知る」といふ字から出た言であつて、つまり一切を知つて居るものが佛といふことになる、五蘊の雲を破了すれば神人格合、宇宙第一義諦と歸着するのであるから至大無外、至小無内、三世十方通達せざるなく知了せざるなしといふ境地に達するのである。國訓ホトケといふのは此の五蘊の絆累が解けたものをいふので、一切から解放せられた靈妙の状態を指すからやはり同じことを意味するのである。その一切から解放せられ、忽ち五蘊を破了する速疾第一の至極の妙術が此の普靈法であるから即ちコレは佛教の最極意であるとも云へると同時に二千年來の佛教各宗が色々の店構へで計畫しながら何れも其の及ばぬところを茲に速疾第一の神法でドンナぼんくらにも直ちに如實に大覺を得せしめるのであるから、佛教諸宗を超越したものの、佛教諸宗で及ばぬところを及ばすの神法、佛教諸宗で實現できぬところを實現させる妙術である。故に世間にわかり易からしむる爲め世間で比較的 generally 普及してある佛教の知識、佛教の言葉を取りて説くけれども斷じて佛教の精粕を嘗めたものでないことがわかる筈だ、つまり二千年來の佛教で出来ぬところを出來すのであるから佛教の亞流でないことがわかるであらう。釋迦 (釋迦が歴史

的の一人格であるか古代印度思想の代表的假定人格であるかを論ずる必要はない」といふ男が製造した教説が佛教といふものなら佛教といふものは三文の價値もないものであるが、釋迦君が発見した宇宙の眞理が佛教であるならば其れは何時、いかなるところでも通用すると同時に釋迦君が発見せられた宇宙の眞理なるものが外の人に發見せられぬといふ筈はないので佛教の所説に符合するところがあるからとて佛教の畑から生えたものとするのはがさつ、の考へで、宇宙の眞理なるものはキリスト以前、釋迦以前、プラトニー以前、孔子以前からまめ息災で宇宙に充ち満ちて居る、その部分々々を啓示した神々は遙かの太古からおはしますので神さびたりとも神さびたる問題であります。いつたい佛教は幾百千の印度の思想家によつて洗煉せられ整理せられた爲めに其の店構へが堂々として壯嚴を極めてゐる上に世界第一の文飾國たる支那を通過して日本に入つたが爲めに、非常に神祕な、むつかしいもののやうに見えるけれども洗ひさらひ突きつめてみると實に簡短明白、轉迷開悟學（破五蘊術）を説盡したものに過ぎないのである。（盡の字が字眼だ、眼あるものは看よ）成るほど昔の支那人が道は近きに在り道にして人に遠きは道にあらずとやつてのけたのに嘘はない、故に日本の古代は哲學も宗教もない、天地惟神の、ありのままの道が、おのづからに教へとなつて居た、時世が幾千年經過しても崩れることも變化することもない赫々たる超日月光は千古萬古を照らして居るのみである。弘法大

師も心經秘鍵の劈頭一番に、「夫れ佛法は遙かにあらず心中にして即ち近し」と喝破した。佛教各宗はアレだけな店構へで、あれだけ澤山の坊さんが徒食して居るのであるからモットしつかり破五蘊術を實現せしめて貰はねば何んぼ高僧だの智識だの言つてみたところで要するに智識的遊戲に過ぎぬので實效が擧がらぬではないか、一人や二人の神通自在なものを出す爲めとあつては餘りに犠牲が大き過ぎはせぬか、第一釋迦君にしたところで神通自在な弟子は目蓮一人ぐらゐなもので、あとの連中にはナカナカうまく行かなかつたではないか、それを今、十人が十人、百人が百人、どんなボンクラにも短時日の間に五蘊を奪却して宇宙第一義諦に通徹せしめることを實現するのが此の音靈法で、今この深深微妙速疾第一の法門の除幕式を執行するから三世諸佛も跪坐禮拜せねばならぬ大時節が到來したのであります。

これまで佛教各宗が、どういふ店構へを以て五蘊の迷雲を拂はせようとしたかを一瞥しておかぬと話の筋が立つまい。少し詳しいことは世間に解説書が馬に喰はせる程あるから勝手にお調べになればよいので茲には正味の一點を擧げておけば話は進め得られるが、いづれにしても吾等の心靈（吾等の心霊といつても身體の何處かに小さな固塊がころがつてゐるやうに考へては大間違ひだ、本田先師の

示された至大無外至小無内の靈々妙々のもので宇宙の大神靈と融通し湛然として宇宙大の一滴水の如きものだ）が五蘊の邪魔を受けず、何者にも占領されず何物の影も舍らず獨立した状態に導く方法に外ならないので、換言すれば心靈獨立のテダテを説いたものに過ぎぬ。吾等の心靈が獨立すれば神通自在で、一世界は水晶球を見直すやうなものである。この何物の影も舍さぬ確乎獨立の出來た心靈の状態が所謂大日如來で天日と光を争ふものだ、即ち阿彌陀如來で直ちに十二様の光明を發するから十二光佛だ、心靈に生死無し（丑林參照）だから時間的には無量壽如來だ、空間的には盡十方無碍光如來だ、これは決して私見ではない觀無量壽經に是心是佛の堂々たる明文がある、是とは山縣有朋でも有島武郎でも誰れでも彼れでも持ち合せの是の心だ、そこで達磨は心外無別法とわかり切つたことを言ひ、弘法大師も夫佛法非遙心中即近とわかりきつたことを立證して居る。愚夫愚婦には理窟が解らぬから先方に靈體があるやうに拵へて拜ませる、これも入我我入一體とならせる仕掛けで、何れも祖師の血の涙であらう。耶蘇のは飽くまで二元説で、どこ迄も神婢神僕で行くのでチーレ教授の所謂神人隔絶教だが佛教は神人同格教で宇宙の眞理を能く見て居る、此身此心から直ちに盡十方に無碍光を發せしむる仕掛けである。而して今眼前に誰れにも彼れにも十二光を發せしむるのが此の音靈法であるが佛法各宗のは店構へはしてあるけれど品物が偽物なのか店員が腕が無いのか兎に角實效が擧がらぬ

のが遺憾である。しかし看板だけは先祖代々の老舗で申し分なく、眞言宗では父母所生身即證大覺位といふ、極樂往生を待たず父母所生身に心靈獨立をさせて十二光を發せしめることになつて居る、三密とは口が祕密、身が祕密、意が祕密、祕密とはつまりが黙るといふこと、身口意が皆な黙れば他の干渉がない、他物が舍らぬから心靈獨立で赫々たる大日の大光明を放つのである。天台でも即身成佛と立てるし日蓮宗でも極樂に往かず此の肉體のまま十二光を發させることにしてゐる。禪宗では是心是佛で、他宗は修行して十二光佛となるが我が宗は今が十二光佛と決定する、さうすれば即ち十二光を發するといふのだ。淨土宗、淨土眞宗では、見い、禪、眞言、天台、其他八家九宗では此世で十二光を發するだの今が十二光佛だのと力み返るけれども一も實效が奏せられぬではないか、それ故に拙者の店では此世で十二光を發する希望を起すことを嚴禁するのだ、體慾に妨げられて現世で心靈獨立は思ひもよらぬ、論より證據、釋迦君以來十二光を發させたものが何人あるか、それよりも彌陀佛國に往き生れ（丑林參照）十二光を發し此世に還相回向して十二光を發し善道に導かんとの宣傳である。ところが諸君、天行居では現世で十二光を發させるのであります。淨土門で申すやうに佛教では此世で十二光を發させたものは滅多にない、釋迦君でさへもウマクは行かなかつた、衆生に六神通を得させる店構へでありながら實際は誰れも彼れもといふわけに行かなかつた、それを今、誰れも彼れも

十二光を發せさせるのでありますから、今、便宜上佛教の言説を假りて説くからとて斷じて佛教の畑から生えたものでないことが合點が參る筈であります。釋迦君は固より豪傑の士、その釋迦君でも極めてわづかなことで極めて大きな缺點があつた爲めに却々ウマクは行かなかつたのであります。天行居では店を張る野心がありませんからよその店の悪口を叩く必要は毛頭ないのであります。この音靈法を講ずる上に於て、佛教の方で一番近いやうに思はれる禪門でさへも隨分をかした葛藤が澤山あります。道元禪師は禪門の偉傑であるが、その普勸坐禪儀なども實は身心脫落の四字の外に何一つ取るところは有りません。第一題名の坐禪儀からして大葛藤であります。結文の非思量のところのまづさ加減などは問題になりませぬ。あの人は學徳兼備の立派な人格者であり又た弟子に對しても「書物に讀まれるな」といふことを常に注意して居た人であり、一あの人位は書物に讀まれて居る人も珍らしいやうに思はれます。又た正法眼藏九十餘卷なども大概抱腹絶倒に値ひする閑葛藤であります。

さて此れより愈々誰れにも彼れにも必ず實行の出來るところの心靈獨立の第一妙法凡人が忽ち宇宙第一義諦に通徹して現世に十二光を發する音靈法の修法及び其の心得を申し上げますが、茲に約束をして

おく、これを讀んで直ちに輕卒に着手せられてはならぬ。その方法が餘りに簡易平凡で、俗の聽音催眠術などと紛ひやすいから、本書全卷を尠なくとも二三回は繰り返して精讀し、茶蹄の音靈章等も能く參照し、充分の覺悟が出來た上で、一氣に錐をもみ込むやうに修行して貫はねばならぬ。從來多くの人々にやらせた經驗によると、始めの皮切りが最も大切であります。この音靈法が、どういふところに、こつがあるか普通の坐禪や聽音催眠術と何ういふ點が違ふか何故に此の音靈法が宇宙の第一義諦に通徹する最上速疾の法であるか、音に徹すれば何故に一切界に徹するか、心靈獨立して第一義諦に徹すれば何故に自他の治病が出來、神通が得られるかといふことを本書全卷を繰り返し／＼精讀して深く玩味し、得たところの信念を養ひ、然る後、錐をもみ込むやうの決心で一氣に着手せらるれば第一回目から通徹して大歡喜を得られることを私が保證する。その信念を養ふに一週間や二週間の費しても決して損はない、禪の安悟りをするさへ二十年三十年を要するものがあり、眞言密教などでは多年の苦修苦行で僅かの法驗しか得られぬ世の中に、直ちに現世で心靈獨立の妙境に必然的に誰れも彼れも確實に徹するのであるから一週間や二週間が待ち遠いやうでは寧ろ始めから靈などいふものに手を着けない方がよい。始めの皮切りが最も大切である。私は同じやうなことを繰り返して言ふことが大嫌ひの性質であるが此の點に就てだけは、いゝやうに申します、其の苦衷を能く嚙みわけて頂き

たいのであります。——本書の丑林を能く／＼腹に入れてみると宇宙の本體は無形であり無形であるから清淨極まるものであることがわかる。清淨そのものが宇宙の本體である、禪家で山色清淨身といふ、山色に限らず一切の物も本來清淨極まる第一義諦の化現に過ぎぬといふ意味である。然るに一切のものの中で何が一番清淨かといふと音である、音は無形で音ほど清淨なものはない、故に音が直ちに宇宙の第一義諦である。宇宙は一大音であるが人間の肉耳は或る程度より小さい音や或る程度より大きな音は聴えぬだけのもので、老子も第四十一章に於て「大音は聲希し」と云つて居る。(何故に老子が特にこれを第四十一章に於て説いたかは數靈と音靈の合一の秘機を示したものであつて本書の戌林を能く讀むものは啓發するところがあらう) 音は即ち聲であつてバイブルに「はじめにコトバありコトバは神と俱にあり」とも云ひ筌蹄にも詳述しておいたやうに音は即ち靈そのものなのである。故に眞に音に徹すれば宇宙の本體に徹するのである。——佛教は一面からみると戒定慧である。戒は定を得んが爲め、定は慧を開くが爲めである。慧を開くのが一切佛教の主眼であるが、慧とは何かといふと心靈獨立で、眞の心の働きである、五蘊の中の「識」のことではない、五蘊を滅盡した心靈獨立の無碍十方の状態をいふのである。故に此の慧と音とは相關的のもので殆んど同一物の兩面觀に過ぎぬものである、清淨極まる眞清淨のものである。觀音經に慧日破諸闇とあるのを能く眼をつけて看

取せねばならぬ、觀音經には更らに説く、「梵音海潮音、勝彼世間音」更らに又た「眞觀清淨觀、廣大智慧觀」世間普通の佛教學者の講釋を讀んでも決して得るところはないから此の經文そのまゝを直視して神悟するがよいのである。佛教には觀法の種類は頗る多い、例の三部經の中にも彌陀の觀法に十三觀法がある。眞言門(眞音門)には觀法其の數を知らず事觀も理觀も澤山にあるが其の中で音觀が眞觀なのであることを法華經(其の中に觀音經あり)で明言してあるのである。つまり幾百の觀法ありと雖も音觀が眞觀であるとの意である。この第一義の場合に於ては「佛の一字も心田の汚れ」と彼の徒の申す如く佛であれ美人であれ些少でも雜るといふことが汚れである。音聲は無形無象で何物もないから無類無比の眞清淨で其のまゝが第一義だ、佛教の修行中幾十百の觀法があるけれども無類無比の音觀こそ眞の觀法で、他の觀法は準、もしくは補助觀である、音觀そのまゝが正眞の第一義だとの明文である。觀音經の「雲雷鼓掣電、降雹澍大雨、念彼觀音力、應時得消散」さすが猛烈の雷公も第一義に對しては閉口頓首せざるを得ぬ、その他觀音經には音に觀じた效能が三十三通りある。梵音は清き音或ひは第一義の音と見てよい、海潮音、波濤の音は成るほど雄大だ、尤も觀世音だから世の中の音なら何でもよい。和漢の畫では瀧が觀音の附きものだ、瀧には不動もつきものだ、心の寂黙不動たるには瀑布の音に觀するのは妙である。そのまゝの第一義だによつて音觀は「廣大智慧觀」であ

る。宇宙遍滿の第一義に同化するのだから廣大に相違ない。(海潮音は雄大であるが岩笛の音は幽邃で而かも神々しい)こんな風に観音をみるのを理體の観音と云ひ、日に千圓も賽錢のあがる淺草の観音様などをみるのを事體の観音と云ふ、音聲に觀すると云ふことは幾千萬人の叩頭に値ひする尊いものだから萬人に呑み込ませる爲めに大きな堂を建てたものとみるのを理事不二觀と申すのである。千手観音といふのがチヨイ／＼あるが、誰れでも能く観音三昧に入れば千體ほどの活用もなすので其のひろげた掌に悉く眼がつけてあるのも考へたものである。つまり観音の効能が餘りに偉大で、愚夫愚婦に呑み込めぬから人格を具へさせて其の効能を表したのが各種の観音だと解釋しておけば宜しいのである。十一面観音は音觀をすれば十一面の作用を起す、如意輪観音(輪は輪圓具足の意でカゲメナクと譯する)は音觀は何一つ如意ならざるなした。衆愚を拜ませるのが面白い、衆愚には音觀の妙を説いてもわからぬ、尤も音觀の効は千禮萬禮に値ひするのであります。我國の賢哲菅公も此の観音を拜された。公の筑紫における臨終の偈に「病は衰老を追て到り、愁は謫居を趁て來る、此の賊逃るゝの處無し、観音を念ずること一回す」といふのがある。浄土眞宗でも臨終の時に一族が集まつて靜かにリンと稱する小さな鐘をチーンと鳴らす、観音三昧で安らかに往生させる意であります。——さて其の音觀、わが音靈法の修行は如何にと申すに普通は一室に靜坐し、靜かに一定の音を聽くことで

す。たつた其れだけのことであります。當時では時計といふ便利なものがあるから大抵其のカチ／＼といふ音を聽かせることにして居るのである。懐中時計のは少し音が小さ過ぎるから普通の人は置時計の音が丁度よろしい、適宜の距離に置いてこれを聽くのである。病人は仰臥したまゝでもよろしい。普通の人は自分の勝手のよい様に靜かに坐して聽く、時計は何處においてもよろしい、風呂敷に包んで天井からブラ下げて耳の近所においてもよろしい。いづれも銘々に工夫してやつてみるがよい。坐法は筌蹄に説いた鎮魂の坐法が正則ではあるが必ずしも拘泥するの要はない。時間は一回に三十分以上一時間二時間にわたるも宜しく一日に二三回までは修しても差支へない。さうして自分の病氣を治する場合にも只だ右のやうにして音を聽いて居りさへすれば宜しいので、自己の病氣を治せんと思念する必要も何もなく、又た其他の物事を思ふもよし思はざるもよし無念無想にならうなぞ夢にも考へる必要はない、雜念起らば雜念も結構、雜念と一しよに時計の音を聽いて居ればよろしい。ただ音を聽くことだけを忘れぬやう、音を聽くことだけを心に離さぬやうにして居ればよろしい、修法中に或ひは身體が動揺したり或ひは涕涙または汗などが出るものがあつても捨ておいて自然のまゝにまかせておけばよろしいのである。また一回または數回修行の結果、特別に惡臭ある糞便が出たり或ひは大小便の量に異常の現象が起つても心にかくる要なく、日ならずして平常に復するものである。

他人の病氣を治せんとする場合には患者を靜坐もしくは靜臥させておいて患者に相對して行ふので、患者にも閉目させて時計の音を聽かせる、その心得も前以てよく話して聞かせておく方が宜しい、即ち患者と術者と相對して同様の形式をとるのである。この場合にも「患者の病氣を治せん」など思念の要はない、たゞ時計の音を聽いて居るだけで宜しいのである。所謂潛在意識の活機で普通意識を超越して働くのであるから「病氣を治せん」など妄想が往來すると却て直靈の活動を妨げる、世の俗靈術の念力波動説などいふ低劣なものと混同しては天地の差を生ずるのである。重症者或ひは特殊の患者、又は頑是なき小兒等に對しては患者に知らせずとも術者のみ修して確實に奏效する。この場合は成るべく患者の睡眠時中を可とするのである。また代人に對して施術して奇效を擧げた實驗が多い。(代人にも閉目させて時計の音を聽かせる)、たとへば小兒の病氣の際に於ける其母、良人の病氣の際に於ける其の夫人、親の病氣の際における其子、或ひは相互の兄弟姉妹或ひは主人の病氣の際に於ける主人思ひの雇人、いづれも本人(患者)に知らせずとも又た距離は何百里距つて居ても差支へない。又た術者が一時に數人或ひは十數人に對して行ふ場合も同じ道理である。あまりに簡易平凡な方法で餘りに神驗いやちこなるに誰れでも驚嘆せざるを得ないのである。危険な外科手術を要する程のものがこの音靈法で立派に自然的に平癒したものとさへ尠なくない。熱の如きも必ず下る。修法前に檢温器

を以て測つておくがよい。幾多の難症固疾が此の音靈法のこんきよき精修によつて全治したことは類例を擧げることの出来ぬほど無數にある。また病氣のない人も此れを平常修行して行けば、隨時隨所に修し得て日々夜々に三昧トラスに入ることが出来るし次第に身心の調和がよくなつて眞の元氣を作振し延命長壽を得るのである、のみならず此れによつて靈眼を開き、被、小、細、遠を透視する能力を發揮したのも澤山にある。宇宙の第一義諦に合體するのであるから何でも如意自在はあたりまへのことである。此の外に何の秘傳も口訣もない。私の門人中には毎夜定めて二三時間宛この音靈法の三昧に入る人がある、その爲め睡眠時間が短かくなつても少しも差支へない、三昧の眞境に入れば妄想(五蘊)が滅盡して居るから睡眠してつまらぬ夢をみたりするよりも却て心身の疲勞を正調に恢復するのである。さあ茲に問題が起つた、この修法には妄想が起つても少しも差支へないと云うたではないか、それに今、妄想が滅盡して居るからとは一體どつちが本統のこと乎、妄想を滅盡し得られれば無論それは至極の妙術に違ひないけれど其れがナカ／＼口には言ひ易くも實際に行ひ難いのだ、そのためにこそ禪家でも其他いかなる修行でも此れが爲めに苦しんで此れを病んだのであるのだ、天行居のいふところは何處にあるの乎と斬り込まれるところであらう。善い哉／＼此の疑團や、實は茲にこそ南天竺の鐵塔中にも一粒の種子だに發見することの出来なかつた秘中の秘義が存して居るので、これあつてこそ

此の音靈法が「釋迦の馬鹿やあい」と大笑して宇宙を濶歩し、手あたり次第に誰れも彼れも十二光を發せしめ、宇宙の第一義諦に出入自在ならしめることが出来るのである。今一度繰り返して言うておくが佛教は二千年の洗煉を経て居り五千餘卷の經文があり此れを註釋論議して幾千萬卷となり、世界第一の文飾國たる支那を通過して來て居るから此れを遠望すれば壯嚴神祕にしてヒラマヤの雪嶺に對するが如く此れに接近すれば多岐多端にして亡羊の嘆を發せしむる陣立てが充分であるが、これを洗ひさらひ突きつめて正味のところを直視すると簡短明白なものであるといふことである。それから又た孔子が邇言を察すと言つたやうに眞理といふものは手近なところにあるといふことである。禪の悟りといふことも實を申すと悟らうと思ふ心のなくなつたときが悟りなのである。經には「言說無きを名づけて佛教といふ」ともある。所謂求心やむとき則ち無事である。釋迦君が看ることの出来なかつた爲め、多くの弟子にウマク神通を得させることの出来なかつたのは「心の癖」が何ういふものかといふ極めてわづかな極めて大きな點であつた。心の癖といふものは何ういふものかと申すと、つまり反對に働きかけるものである、西洋でも心の自由不自由の問題が長い間論議されて居るけれど今に決定せぬといふが不自由説が眞理であると私は認めるのである。天アマン邪鬼シヤクといふ昔噺があつて、山へ行けといへば川へ行く、川へ行けと云へば山へ行く、これが心の癖で、人心の持ち前の働きである。見

るなといふものは見たい、人に言ふなと云はれたことは言ひたい、來てはならぬといふところへは行きたい、飲ませぬといふと餘計に飲みたくなる、思ふなと云ふと益々思ふ、これが賢者も凡人も通有の間違ひのない心の癖である。釋迦に若しもタツタこれだけな此の癖を見つけることが出来たならば、彼れはアレダケな信望と倚頼と崇拜とを受けて居たのであるから神通自在なものを片ツ端から製造して行つて理窟抜きに救済が出来、布教が出来たであらうが、彼れの豪傑を以てして此の極めてわづかな、此の極めて大きな謎の鍵を握ることの出来なかつたのは遺憾である。——妄想を滅盡することには古來の大宗教家、大賢哲で苦心せぬものはない、實はこれが一切の解決點であるからである。禪家でも三祖の信心銘を見ると、「動を止めて止に歸すれば止更らにいよく動く」とある。成るほど思ふまいと思へば思ふほど益々物を思ふ、三合の病に一石八斗の物思ひだ。これは一寸でも靜坐めいたことをやつた人には誰れにでも經驗のあることである。三祖は「無憎愛洞然明白」と云ひ「順逆を存する莫かれ」と云ふ、専門理窟でわかりにくいのが、三祖のは憎愛無しだからたゞポーツとして居る、曹洞は今も此れを學んで居るのである。ところが此のポーツとが仲々むつかしい、本來が空を得る爲めに取り掛つて居る仕事であるから自然に雜念に對する憎、空に對する愛が出る筈のものだ、故に天アマン邪鬼心理學の法則によつて雜念が湧いてくるのである。この天行居のは左うでない、心が散れく

と催促して居るのである、思ふことがなければこしらへても思へと云ふのが極秘のことなのである。わづかの差のやうだが三祖も云ふ通り「毫厘も差有れば天地懸隔」であります。多数の人々によつて實地に経験したところによると「思へく何でも思へ、思ふことが無ければこしらへても思へ」でやつて行くと天ン邪鬼心理学の法則によつて到頭思ひの材料が盡きて了ふものである、たいてい三四十分間もすれば盡きて了ふのである。少し手に入つてくると五分間位で第一義諦に徹するのである。それを雑念を拂へ、無念無想になれといふ様な心持ちが少しでもあると雑念の材料は無盡蔵に出て来て何時間でも何日間でも幾ら思ひつゞけても思ひの絶えることはないものである。静かなところで修するに越したことはないが東京の眞ン中で、電車の音の轟々といふところで初めての人にやらせて靈眼を開かせたこともあるから不思議といへば此れほど不思議のことはないのである。而して實は不思議でも何でもないのであります。車力が通る按摩の笛が聞える、子供が泣き出す、少しも差支へない、それと一しよに時計の音を聴いて居る、病人などはこんきの弱いものでトモすれば時計の音を聴くことも途切れくゝに忘れるが、それでも宜しい、立派に奏效する、確く保證しておきます。本書に開放した外に何の祕密も口傳も有りませぬ。「思へく何でも思へ、思ふことが無ければこしらへても思へ」とやつて行くうちには、いつともなしに思ひの綱が切れて、カラリとした別乾坤が打開

する、その妙趣は筆舌の能く盡すところではないのであります。子供にでも眼に一丁字無き婦人にも能く話しておいてやらせると皆な出来る。宇宙の第一義諦に徹する術として至上至妙速疾第一の神法であります。昨年刊行の「神機鈎玄」音靈章等も参照して能く此の講傳の終始を精讀して、充分の信念を養はれた上で實修して頂きたい。そして十二光を發して大歡喜を得て自他救濟の實を擧げて貰ひたい大誓願であります。

蘇洵明曰く、

雨は吾れ其の萬物を濕す所以を見る也、日は吾れ其の萬物を燥す所以を見る也、風は吾れ其の萬物を動す所以を見る也、隱隱絃絃、而して之れを雷と謂ふ者、彼れ何の用ぞや、陰凝て散ぜず、物豎まつて遂げず、雨の濕す能はざるの所、日の燥す能はざるの所、風の動す能はざるの所、雷一たび震はんか、而も凝りたる者、豎まる者、一時に解揚す、遂に曰く雨なる者、曰く日なる者、曰く風なる者、形を以て用ゐる、曰く雷なる者、神を以て用ゐる、用は聲より神なるは莫し、故に聖人は聲に因て以て樂を爲る。

巳 林

今日は天地御柱傳を講じますが、それに就ては先づ乙中甲大事を前以て披露しておきます。これは甲州流軍學の祕事の一つとなつて居るが私は明かにこれを天地御柱傳の中世より分傳したものと信じます。いま参考の爲めに天行居に傳はる乙中甲大事の卷物の全文を左に寫させることに致します。(現代人に読み易からしむる爲め句讀點や送り假名を附す。)天地御柱傳は千古以來全く埋没して居たものを神示によつて私が靈寫したもので、これは今日の地上に於て唯一つ我が天行居に護持して居るものでありますが、今は一大時節切迫の折柄でありますから惜むところなく公開して同志にお分ちするのであります、先づ其れに就て左の乙中甲大事を一讀しておかれます。この乙中甲大事の卷物は全國に五六卷は今でも散らかつて居る筈であります。

乙中甲大事相傳口訣

此傳ハ當流三箇ノ大事ノ其一ニテ人事ノ大事神心ノ傳也、此相傳有テ始メテ天地ニ竝ビ立テ三才一貫ノ人トナル、サレバ至極ノ大事也、世ニ品々ノ心傳アリテ誰々モ志アル者ノ覺悟ヲ磨ク事ナレドモ多クハ空論ニシテ影ヲ捕ヘ風ヲ握ル如ク實用ニ立ガタシ、當流ノ自負スル所ハ無形ノ心ニ所作ヲツケ

テタシカニトラヘテ武邊ノ用ニ立ル所ヲ示ス、是レ師恩ノ重キ所、我、神國上古神人明教ノ尊キ事ニテ異國聖人ノ道ニモ適合スル也、凡ソ人ノ性ハ善ニシテ善惡是非ヲ分ツノ智具リ、五倫五常ノ人道タルコトヲ尊信スレドモ善ノ勸メ難ク惡ノ懲メガタキハ小人ノ常也、特ニ武士專務トスル一番鎗ノ場ニ至テ一命ヲ抛テ二念ナク千萬人出ガタキ瀬戸ヲ破ルノ氣ヲ發スル事智慧學問ノミニテハ儒法ニテモ佛法ニテモ慥カニナスベキ覺ノ付コト甚ダ難シ、乙中甲ノ傳ハ其所ヲタシカニ覺ヲ付ルナレバ武士タル者ノ大事相傳コレニ過ルハナシ、其ノナリニクキ事ヲ未ダ知ラザル者ハ無上至極ノ神仙妙藥ト云ヘドモ病苦ナキ者ニ與ヘテハ信仰スルコトナク石面ニ水ヲ灌グガ如ク身ニ染ヌ故稽古ノ始ヨリ生死ノ覺悟ノ決シガタク生ヲ愛シ死ヲ惡ムノ一念容易ニ離レ得ヌ事ヲ常ニ示シテ重ク荷ハセ、如何シテカ此場ノナルベキ覺エハ付クベキゾト十分疑團ノ凝ルヲ待テ後之ヲ傳ル也、十分疑團ノ凝リ固リテ暗夜ノ如ク手モツクベキヤウモナキ時ニ至テ是ヲ傳フレバ臆病ヲ治スルノ神方此傳ヨリ切ナルハナキ故ニ暗夜ニ灯ヲ得タル如ク木佛ヲ開眼シテ忽チ利益ノアル如ク千人ノ後楯ヲ得タル如クタシカニ其ノ效ノ見ユルナレバ敬スベク尊ムベキ義也、古ヨリ良將勇士皆此傳ニヨツテ名譽ヲアラハシ玉フ事師資相承紛レナキノ祕訣、代々誓言ヲ以テ傳ヘ來レリ、武門ノ士タル者此傳ヲ受ク冥加ノ至リ此上アルベカラズ、是ヲ以テ三日潔齋シ室ヲ掃ヒ壇ヲ設ケ三社ノ神號ヲカケ奉リ祭具ヲ供シ神前ニ於テ照覽ニカケテ偽リ

ナキ師傳ヲ授ル也、ユメ／＼輕易ニ思フ可ラズ、信ズル者冥福ヲ受ケ、侮ル者冥罰ヲ蒙ル影ノ形ニ隨ヒ響ノ聲ニ應ズルガ如シ、能ク深ク體認シテ骨ニ刻ミ心ニ銘スベキ也

一、乙中甲之習

方圓神心ノ大事相傳ハ中ノ一字ニアリ、甲乙八十干ノ首東方發生ノ氣五行ノ本人生ノ運ニ當レリ、故ニ假ツテ上下ニ置ク、甲ヲ抑ヘ乙ヲ揚ゲテ中ヲ得ルノ義ナリ、木芽ノ生ズルモ黃ナル綿ノ如キ乙ノ上ニ冒フヲ甲ト云フ、其下ニ弱ク芽ノ縮ミテ未舒ヲ乙ト云フ、乙ノ字即チ木芽ノ縮ミテ曲レルヲ象ル也、サレバ甲中乙トアルベキヲ乙中甲ト云フハ上下スキカヘノ習トテ地天泰ノ義、活物ノ體也、中ノ字圓ニΦトモ書キ方ニ中トモ書キ上下ノ二字ヲツマケテ卓トモ書キ天地相交ノ象、人ノ形トナリ方圓ノ身體ヲ頭上ヨリ脚下マデサシ貫クモノハ神心ノ象也、此神心ヲ我身ニ具ヘ奉ルノ相傳也、佛道ノ心傳ニ拈華微笑ト云フ事アリ、心々相通シテ無聞ノ悟ヲ開ク也又タ心ヲ足心氣海ニ置クト云ヒ或ハ臍下心穴ニ心ヲ置ク等ノ教アリト云、其如ク置所ヲ定レバ無繩自縛トテ偏ニ礙テ自由ナラズ、或ハ心ヲ留ル所ナク一切放下シテ水ノ流ル、如クナルト云フモ有リ、其レニテハナリニクキヲナシ遂ルノ教トハナリガタシ、要スルニ皆自己安心ニ止ツテ神心安坐ノ直旨ニアラズ、夫レ人心ハ一身ニ遍滿シテ止ル所モナク在ラザルトコロモナキモノ故頭上ヨリ足ノ爪先マデ觸ル物有レバ知レズト云フコトナシ、タ

トヘバ紙ノ袋ニ息ヲ吹キ込ミタルガ如シ、息ノコモルニテ活々シテコロ／＼コケテツブレズ、方圓ノ體中ニ滿チタルモノハ氣ニテ神靈其中ニアル也、故ニ氣ノ至ルトコロ心即チ至ル、氣ヲツケヨト云テ心ノヌケヌ所是レ也、此ノ心氣滿タザレバ息ノコモラヌ紙袋ノ如クツブレテ死物トナル故何事モ爲スコトナラズ鎗ヲ突クノ氣勢モ發セヌ也、心ノ宮ハ思フトテ神聖教ヲ垂レ玉フ所ノ道ヲ尊ビ禮義ノ分ヲ備ヘタル也、人慾コレヲ蔽フ己ニ克テ禮ニ復ルハ是レ仁ノ道、敵ノ立ルヲ見テ之ニ勝ノ教神心ヲ託シ奉ル也、一切事ヲ行ヒ形ヲ成ス皆ナ氣ノ所爲ニテ心ノ知ル所モ氣ノ稟ハザル間ハ其事行レズシテ性ノ德アラハレズ、行フ事ノ難キユエン氣ノ修行ニ在リ、知ル事ハ心ニアリ行フコトハ氣ニアリ、氣中ノ靈ナルモノ是レ心也、此心即チ神ヲ宅シ奉ル舍ニテ天ノ我ニ賦スル所 天照大神ノ分魂一身ノ主宰也、是ヲ天御中至尊ト申奉ル、國常立尊ト申シ天之御柱國之御柱ト申スモ同體異名ニテ此柱ト云フハ木德ノ仁ヲ主トスルノ謂也、此神靈ヲ我方圓ノ體中ニ安置シ奉ル、是ヲ血脉相傳ト云テ本邦ノ人ハ貴キモ賤キモ神明ノ苗裔ナラヌハナシト云ヘドモ只肢體血肉ノミニシテ其ノ心主異ナルモノ多シ、然ルニ今此傳ニヨツテ眞ニ血脉ヲ受繼ギ本邦神人傳統ノ大道ヲ踐履ス、人生ノ大幸士門ノ冥加此上ニ出ルコトアラシヤ、天之御柱トハ人々ノ體中ニ心ノ柱立テ人慾ニ引倒レザルヲ云フ、國之御柱トハ 天子將軍ヲ始メ奉リ一國々々ノ管領トシテ政務ヲ司リ仁德ヲ荷フ君主ヲ云フ也、夫レ氣ハ風也、風ハ天ノ使

也、天人一體息風往來彼是感通ノ妙ヲ行ル、息風ノ通フトコロハ心存ス、呼吸即チ心ノ候也、故ニ自
心ト書キテ息トス、氣ノ往來ナキハ死物也、黃帝曰、恬憺虛無真氣從之精神內守病安從來ト、虛無ノ
内ニ真氣アツテ精神内ニ守ル、氣ノ滿ルトコロ神在スノコトヲ云フモノ也、是マデハ傳授ノ地歩ニテ
如此云フト雖モ未ダ身ヲ奮テ必定鎗ヲ入ルベキ手ニ捉ル覺ハアラズ、茲ニ傳アリ、無形ノ心ニ所作ヲ
ツケテタシカニトラヘテ用ニ立タシム、是レ當流ノ極秘ニテ小人ヲシテ君子ノ行ヒヲナサシム、素ヨ
リ君子ノ器アル人ハ自力ヲ以テ行フ故ニ傳授ハ入用ニナシ、小人ノ自力ニカナハザル所ヲ教ノ功ニテ
行ハシムルナレバ下段ノ教、君子ノ前ニ述ベカラズトイヘドモ學者ノ勉強ニ決定功ヲ立ルノ覺ヲ付ル
大秘傳也、其傳ハ先ヅ方圓ノ體ヲ正ス法有是ヲ上下正位ト云、内ヨリ帶ヲシムル習傳口神心ノ方圓ノ體ヲ
貫クヲ上下相交位ト云、天ノ氣降り地ノ氣升リ上下相交ニ氣和合神靈コ、ニ備ル（心氣一體當常ニ習
シ有テ氣ノ滿ル位ヲ覺ユベシ、是ヲ常住兵法ノ習シト云、氣滿レバ心ノ欲スル所ナラズト云コトナク
事ニ臨テ動轉ナシ、是レ兵法常住トテ常ノ氣ニテ生死ノ大事ニ至リテモ動轉ナシ、是レ習ヒノ功ニヨ
ル、今日傳ヲ受ケ糸ホドニ心柱立ち、其レヲ習シノスルヲ以テ後ハフトク棟梁ノ如クニナリ、ソレ
ヨリ一身ニ滿チ、天地ニ充ルニモ至ル、孟子浩然之氣孔子君子ノ三戒皆是ヲ云フ也、師友ヲ會シ書籍
ヲ講ジ仁義ヲ明ニシテ心ニ薰シ身ニ馴レ善惡是非ノ惑ヒナキ習シ積ムヲ養氣ノ修行ト云フ、事ニ臨

テ眼ノ色ニ溺レ心ノ慾ニヒカレ神明ノ明晦レテ忍ビガタク離レガタキヲ傳授ノ習ニテ脇差ノ柄ノ膝頭
ニアタル程ニ張りツケテ幾度モ發スルヲ發氣ノ修行ト云フ、是レ習シナクシテ傳授ノ儘ニテ捨テ置キ
テハ用ニ立タザル故乙中甲ノ習シト云フ也、此傳ヲ信ジテ一氣撓マズニノ氣ニ隨ハザルヲニゲヌト云
フ、乃チ一番鎗モタシカニナルノ相違ナキ事、始メニ誓ヲ立テタルノ虚ナラザル事ヲ知ルベシ此傳ハ
甲州ニ始マルニアラズ神代以來名將ノ傳ヘ來ル所也、異國ノ聖人堯舜ノ心傳ニモ惟精惟一允執厥中ト
アリ太公望ノ文王ヘ七日潔齋ニテ天地之經四時之所生仁聖之道民機之情ヲ傳ヘントテ告ゲ玉フ天地ノ
經ト云フモ天地ニ互リテ不變常ノ道アル事ヲ云玉フ也、又論語第一章ニ學而時習之不亦說乎トアリ、
學ブハ道ヲ明カニスル也、博學審問慎思明辨是レ也、時ハ二六時中也、習之ハ篤ク行フ也、事ヲ知ル
ハ心ニアリ事ヲ行フハ氣ノ習シ、學問ノ緊要タル此聖教ヲ以テ知ルベシ、近來儒學者習シノ氣ニアル
コトヲ知ラズシテ浩然三戒ノ義ヲ受用スルモノナキ故ニ物知リノ名バカリニテ實行實事ノ器稀レニシ
テ聖學塗炭ニ隨フ悲ムベキニアラズヤ、サテ古傳ニ臍下ヲ乙トシ額ヲ甲トスト云ヘリ、乙ヲ揚ゲテ甲
ヲ抑ユルニテ心ノ中スル位ヲ得ルト云、是懸中待々中懸ノ義應變ノ口傳也、一己ノ小事ニ局ハラズ天
下ノ廣居ニ居シ天下ノ正位ニ立チ天下ノ大道ヲ行フ、大人ノ事畢ルト云フモ乙中甲ノ修行熟スルトコ
ロニアリ、勉ム可シ々々々々、或人ノ云、乙中甲ノ傳猶或ハ偏隨シテ氣ノ凝リトナルコトヲ免レ難カ

ラント、曰ク、凝リト云フハ一所ニ固マリシヲ云フ、是レ氣ノ滿タザルガ故也、一身ニ滿チ天地間ニ充ルモノ何ノ所ニ凝ランヤ、始ノ糸ホドニ立チタルハ凝リノ如シ、ソレヲ滿チ滿チシテ凝ルトコロナキニ至ル是レ習シ也、タトヘバ酒樽ニ酒ノ十分滿々テ鏡ニツカヘタルハ鳴リ音ナシ、少シヘリテ隙間アレバゴホ〜ト鳴ル如ク氣ノ滿チタルモノニ胸ノ躍リハナシ、サレバ胸ノ騒グノ氣ノ凝ルノト云フハ皆ナ斯氣ノ滿タザル故ト知ルベシ、然レドモ滿チテ動キナキハ又タ死氣トナル、呼吸息坂ノ秘傳茲ニ在リテ張りタル氣ハ弛マネバナラズ弛ム氣ヲ又タ張り日々新タニ時ニ新タニシテ天地晝夜ノ如ク永久無窮ノ神備ル、氣ハ浮キヤスク退キヤスシ、浮氣ヲ鎮メ退氣ヲ張ルトキハ滿ル也、鎮メルト張ルトハ習ハシノ修行也、退ト浮トハ小人ノ氣自然ニ燃ユル也、習ハシ怠ルベカラズ

一、上中下之位

乙中甲ノ習ニヨツテ人タルノ道行ル、故ニ上中下ノ人ノ内ニ入ル也、是故ニ當流此傳ナキモノハ人ニアラズトス、上ハ生知安行ノ聖人也、中ハ學テ知リ利シテ行フ賢者也、下ハ困學勉行令名ヲ失ヌ人也、此神心備テ三等ノ内ノ下ニ入ル也、修行次第ニ進ミ上ルヲ位ト云フ、乙中甲ノ習ハ勉強力行ノ大事、下等ノ人傳授ノ力ニテ中上ノ人ト一揆ノ功ヲ立ル也、中上ノ人ニ傳授ハ入ラズ、吾人皆下等ノ學者師傳ノ恩光ニ頼テ武門ノ名ヲ恥カシメザルコト實ニ感戴ス可シ、サテ人ニ在位ノ君子有德ノ君子ノ

別アリ、在位尤モ尊ム可シ、孔子ノ聖モ位ナケレバ其德行ハレズ、故ニ聖人ノ位ヲ大寶ト云フ、豈是ヲ輕ンズ可ケンヤ、然レドモ位ヲ得ルコトハ命アリ、求メテ得ベカラズ、故ニ修行ノ上ニテハ是ガ爲メニ心ヲ役セズ有德ヲ尙ブ也、桀紂ハ天子タレドモ人コレヲ賤シム、孔顔ハ位ナケレドモ後ノ天子コレヲ拜シ玉フ、尊キコト德ニ在テ位ニアラザルコトヲ知ル可シ、修行ノ功ニテ將卒ノ位定マル、其人將トナリ相手ヲ卒トシテ使フ故受太刀ヲ致サセテ勝負ニ勝ツ也、神心ノ光發シテ暗キトコロナキヤ大明ノ位トテ目ノ明カナル人ト云、其ノ明ナキハ盲人ノ如シ、目アル人ノ盲人ニ負ルトイフコト決シテ無シ、勝負至極ノ大事神光ノ發スルニアルコトヲ知ル可シ、武門心傳ノ大事是ニ過ルハナク、乾坤ニ獨歩シテ一世ヲ睥睨スルノ氣此ノ習ノ養ニヨルモノ也、上ニ屈セズ下ヲ侮ラザルノ義ナリ

一、天人地之位

上中下ノ人ノ内ニ入ルトキハ天地ニ竝ビ立テ三才一貫ノ貴キ位ヲ踐ム也、人ハ上ニ天ヲ戴キ下ニ地ヲ踐ム何レノ地ヘ行キテモ天地ノ外ニ出ルコトナシ、行クモ天地來ルモ天地、外ル、コトナラザルナレバ人タルノ道ヲ勵ミ勉ムル修行須臾モ忘ル可ラズ、假リニモ人道ニ外ル、トキハ微小ノ體廣大無邊ノ天地ニモ容レラズシテ死刑ニモカ、ル、恐レザル可ケンヤ、故ニ聖人ハ競々業々トシテ以テ天地ヲ畏ルト謂ヘリ、又タ小人知ラズシテ不畏ト云ヘリ、畏レザルモノ常ニ天賦ノ職分ヲ怠リ自ラ天誅ヲ招

ク也、乙中甲ノ習ニヨツテ其ノ意ヲ勵マシ人タルノ列ニ入テ天地ニ竝ブノ大功ヲ成シ貴キ位ニ升ル、有ガタキ心傳ナラズヤ、精誠純一ニ拜服シテ神明ノ德ヲ備フ可シ、此心柱主宰ヲ本トシテ分度ノ規矩四方四維ニアタリ方圓ノ形勢ヲ備ヘテ天理ノ時ヲ失ハズ、發シテ節ニ中ルノ知行シテ大明ノ光輝世界ヲ照スノ大徳圓滿ノ位ニモ至ルナレバ三傳一致ノ大事トス、敬崇スルモノ擁護ノ利益ヲ蒙リ、不信不正ノ者天誅神罰ヲ蒙ル事、即座ニ其ノ效驗アリテ踵ヲ廻ラサズ、神目電ノ如シ、照覽ヲ恐レテ努力ス可キ事也

甲州流之兵法雖無窮御熱心不淺、終日通夜依鍛鍊有之福島家之蘊奧極意乙中甲三ヶ條悉令相傳畢後來於懇望之輩有之者撰實則神文誓約可被授與者也、仍印書如此云爾

明治三庚午五月吉日

波邊源四郎花押

これが乙中甲大事相傳口訣の卷物の全文でありまして、支那思想の空氣に染み又た武門の專用のやうになつて居りますが、これは確かに我が上古の天地御柱傳が中古に分傳して斯うなつたものであるに相違ない、天地御柱傳は必ずしも武邊に用を立たしむるのみの爲めでもなく神人合一の術として何人の用にも立ち人をして靈化せしめ神化せしむるの秘傳である。併し右の卷物にも平凡の語句の間に甚

だ意義のある力のこもつたこつが示してあるから能く熟讀玩味した上で、天地御柱傳に着手せらるれば一層しつくりと氣分が呑み込めるであらうと思ひ態々右の卷物の全文を寫させておいたのである。この天地御柱傳の五字は私が勝手につけた題目であつて、神示には何といふ名もつけてはないので、單に左の短章のみである。

天乃八重雲乃上爾黃金奈須御柱突立利大地乃下津岩根與利出氏八百萬竹奈梨(傳口)

神珍御子八良纏慕斯女火水乃產靈爾凝氏御柱乃裏爾趺坐夜(傳口)

天照皇大神乃十言乎宣留十日(傳口)

天御火水良地御火水良天爾女九良日地爾女九良日佐吉理千五百萬柱登富貴出千五百萬

柱波黃金如御柱登化留(傳口)

產靈乃凝石萬葉爾傳氏九二乃四十米登奈壽

わづかに百四十一字だけのものであつて、又た右の文字には何等の意味はないので言靈を寫された假りのものに過ぎぬ。右の百四十一字を別の清淨な紙に書き移しておいて左に示す訓讀を附しておかれたいらよろしからうと思ふ。この御柱傳は普通の靈學上の見地から申すと、觀念法の最上至極のもので

あると言ひ得られぬことはないが、尊き神傳のものであるから吾々の猥りに言議することの出来ぬ神祕な威靈のこもつて居るものたること勿論である。たゞ觀念法といへば佛門で所謂觀法のこと、本書の丑林や卯林を精思してみれば、宇宙萬有は無形の電子より成つたものであつて、信念、觀念によつて一切が化成するものであるから靈學とは觀念法なりと定義されぬこともなからうが、とにかく此傳は觀念法の極致として見ても不都合はあるまいけれど、神威を畏るゝものは一切の小智の判断を離れて、赤ん坊のやうな素直な純潔な心持ちで體信し修行すべきものなりと確信して居ります。孔子や老子を始めとして西洋でも東洋でも古來の大智大哲の偉人は、いづれも天を畏れます、理由なしに畏れます、併し畏るべきことを知るの明があるから畏れたので凡俗は彼れ此れ理窟をつけて天を畏れませぬ、賢哲と凡俗の差は天を畏れると畏れぬとの差であります。茲に天と申すのは宇宙の原律を規定し支配する神靈または神威といふやうな意義に解すべきであります。さて此れより神示に基づき修法の概要を講傳することに致します。

天乃八重雲乃上爾黃金奈須御柱突立利大地乃下津岩根與利出氏八百萬竹奈梨
神珍御子八良纏慕斯女火水乃産靈爾凝氏御柱乃裏爾跌坐夜

先づ普通に正坐して數回乃至十數回深呼吸をして身心を正調にする。わが道に於ては如何なる修法を

するときでも先づ始めに數回乃至十數回の深呼吸をして身心を正調にするのでこれは別に特記せずとも如何なる場合に於ても左うであります。深呼吸の方法については世間に種々の形式があつて勿體をつけて甲論乙駁して居るやうであるが此れは何ういふ方法でもよろしいので其人に適した都合のよい方法で差支へない、たゞ普通の呼吸を深くし靜かにしさへすれば其れでよろしいのである。坐法はやはり普通の正坐で筌蹄に説いた鎮魂の坐法そのまゝが正則である、「アツキ跌キヨ」とあるが座禪の跌坐や普通の胡坐フツラのことではないのである。この頃の普通の人の正坐が最も正しい天地自然の道理に契つたもので、一と一との結びになつた正しい形式である。孝經に「フツラ仲尼問居、曾子侍坐」とある曾子が何ういふ風な坐り方をしてゐたかは知らぬが、支那の昔に於ても坐るといふことの行はれたのは明かであり、子に凭るといふことはズツと後世に起つたことで、昔は少なくとも一般の民衆は椅子に凭つたものではないのです。山東省にあるところの孝山堂の畫像や武梁祠の石室に彫刻してある畫像は後漢時代に出来たもので今日に遺つて居る畫としては最も古いものであるが其中の曾子とか閔子騫とかいふ人物が一種の坐り方をして居り、周の文王や齊の桓公なども胡坐をかい居る、文王は天子様であるが胡坐をかい居る。尤も椅子に腰をかけて居るものもあるにはある。今日の日本人の一般の「カシコマル」といふ正坐は學者の研究によると僅かに二百年以來の習俗で、その以前は他の種々の坐法であつ

たと云ふけれど、それは佛教渡來このかた種々の坐法が行はれたので上古に於ては神に對するとが上者に對するとか謹嚴な場合は皆なヤハリ今日一般日本人の「カシコマル」といふ正坐をして居たものである。文天祥正氣歌に「爲張睢陽齒、爲顏常山舌、或爲遼東帽、清操厲冰雪」といふ句があるが其の遼東帽といふのは後漢の管寧といふ人のことであつて、此人の如きも今日の一般日本人の正坐のやうな坐り方をして居たものであります。といふのは此人は嘗て足を投げ出したこともなく五十年間木の床のやうなものの上に坐つて居たので膝のあたるところに穴が掘れたといふことが書いてあるが現今の日本流でなければ膝のあたるところに穴が掘れるわけがないのです。法隆寺の五重塔にある佛像の中にも現今の日本流の坐り方があり、京都の大原の三千院の極樂院にある觀音と勢至の像は惠心僧都の作であるがヤハリ現今の日本流に行儀よくキチンと坐つて居る。古代の埃及の繪にもギリシヤの古畫にも日本流の正坐の姿がある。マホメツト教徒が禮拜するときにも日本流に似た坐り方をする。中央亞細亞あたりの土人にも現今の日本流の坐り方の繪がある。トルキスタン人は禮拜の時、敬意を表するとき、食事の時などには現今の日本流の坐り方をする場合が多い。それは兎も角として現今の日本流の正坐は現代的に言へば精神統一上最も適當な坐法であることは最新の生理學者も認めるところであります。平常の活動には椅子が便利かも知れぬが精神的修養をするには理窟の上から云つても現

今の一般日本流の正坐が適當であつて上古に於ても敬虔の態度をとる場合は今の如き坐り方であつたのである。況んや神示でありますから此れを疑ふの餘地はありません。坐法に就ては從來種々の反抗的質問を受けますから序でに一言しておいたのです。——紫雲白雲が十重二十重に柵引きわたつた遙かの大空に一基の黄金柱がそびえ立つて居る。靈光八方に燦然と輝き、大地の底から屹立して居るのであるが其の柱の上から下を見おろすと瑞雲搖曳して大地を見ることは出来ぬ。その黄金柱は僅かに一人が坐し得るだけの二三尺廻りのものであつて其の尖端に吾れ一人坐して居るといふことを先づ繰り返し〜能く〜觀念するのである（無論閉目）。先づ此の修法にとりかゝる前に晒木綿サシモウの腹帯をこしらへて廣く腹一ぱいに巻きつける、あまり厚くない方がよろしい、その上にゆるやかに着衣して坐るのである。坐るとき、我れは是れ大神の珍ウツクの御子ミコなりとの固き信念を以て決定して了ふのである。「御柱ノ裏ニ」とあるが、この裏はウラサキのこと、即ち尖端のことと表裏の裏ではない。先づ此の壯嚴なる金剛信念の上に住すること現今の時間の五分間乃至十五分間。（修法前に身體衣服を清潔にすべきは勿論ほんとうは水をかぶつてから修するのである。）

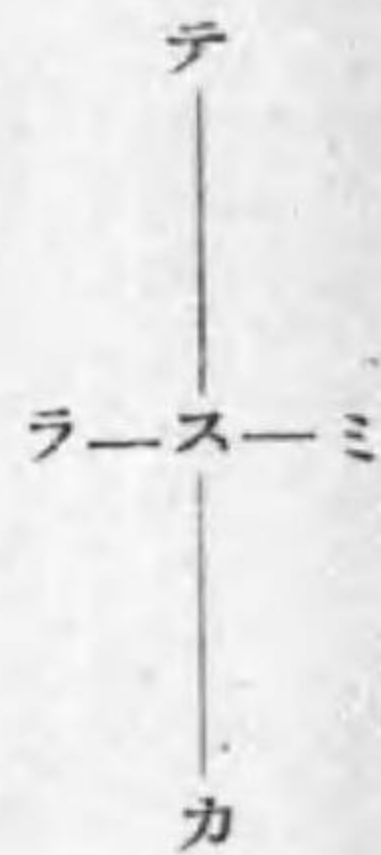
天照皇大神乃十言乎宜留十日

それより靜かに「アマテラスオホミカミ」の十言を十回稱へるのであります。これは大きな聲でなく

てもよろしいが一言一言敬虔森嚴の金剛信念を以て唱へるので、一言一言大光明を放つて口より出で、大宇宙に漲り渡るの確信を要するのである。元來一切の生物は天日と大地とによつて生けるものであるが其の大地も天日によつて生けるものであるから天津日が一切の生命體の本源であつて、男女を古言でヒコヒメといふも此れより出でたものである。人の古言「青人草」といふごとく人は恰かも植物の如きもので更らに約言すると木のやうなものである、日の光りと地の恵みと水と風とによつて活けるものである。



「アマテラスオホミカミ」の十言は極めて深い神祕の幽契の存することで普通の神道學者が輕々しく解して居るやうなものでは決してないであります。太陽そのものが天照皇大神ではないが、太陽の神徳が天照皇大神の神徳なのである。「アマテラスオホミカミ」の十言を十回唱へることによつて我れは天照皇大神の靈幸を稟け居るもの也との誓約が確立するので此れは言靈の奇しびの活機であります。アマテラスオホミカミは實は美稱を除くとテラスカミであつて



である、この中央のスは電子の奥の玄子の靈徳であつて一切のものの根元である。一切の生命體は此のスの爲めに生きスの爲めに働くのである。老子が第四十一章に「大音希聲」といつたのは此のスの音聲の靈徳を指したものであるが古今老子を解説するもの幾百千家なれど一人として此の秘義を看破したものはない、まだ老子や易には幾多の深義が藏せられてあるので總て古人の書は俗の學者と號する輩の着手を許さぬものであります。神祕の扉は蒼茫三千歳依然として固く封ぜられてあるのであります。一切の生命體はスの發動であつて、人間も現今の肉體を有する間は呼吸によつて生きて居るので起きても寝ても「スースー」の呼吸をして居るのである。耶蘇教徒であれ佛教徒であれ唯物主義者であれ行住坐臥この天照皇大神のスースーの大神號を唱へて居らぬものは未だ曾て一人もないのであります。

天御火水良地御火水良天爾女九良日地爾女九良日佐吉理千五百萬柱登富貴出千五百萬柱波黃金如御柱登化留

それより正呼吸をすること今の時間二十分間乃至三十分間である。この正呼吸といふのは普通の平常の呼吸を靜かにするだけのことである。呼吸の度毎に天地の靈氣が身體にめぐりわたり、身體中幾萬の毛孔から狭霧の如く噴出する、それは始め糸の如く金銀の線の如きも次第に太くなり行きて幾千萬の黄金柱となつて大宇宙に充ちわたる、その光芒燦然陸離として壯嚴言はんかたなく我れは是れ神にして光明宇宙を照破すと金剛信念を決定するのである。

産靈乃凝石萬葉爾傳氏九二乃四十米登奈壽

これは茲に説くことを許されぬが此の修法其のものに直接の關係のないことであるから以上説いただけによつて精修を積まれんことを希望する。(四十米はヨドメとも訓む、古言には多く此種の祕義あり、易の勿用を用フルナカレとのみ訓みて勿ズ用ヒヨの反義ある如きを知らぬやうな俗學の前には説明しても一寸には腑に落ちぬことなるべし。)さて此の御柱傳を精修して行けば追々に我れ神に格り神我れに格るの妙境に進み日常に於ても一言一行一舉手一投足にも知らず識らず神異の冥護あるに至り、著述を爲すにも演説を爲すにも藝術を爲むるにも學問をするにも商賣をするにも戦争をするにも農事に従ふにも或ひは治病施術にも其の能力を數倍ならしむることを知り、愈々進みて至處に及ぶと人間業とは思へぬ奇蹟をあらはすことさへ出来るやうになる。(尤も奇蹟的のことは日常好みて爲すべ

きものでなく何か特別の理由に迫られた時でなくては行ふべきでない、日常こけおどしの奇蹟を行ふ邪術と伍してはならぬ。)これを修練して行けば種々の觀法が自在になるのであるが其の妙趣は到底此處に述べるわけに行かぬ自ら修練し神悟して冷暖自知すべきのみである。この御柱傳は主として朝に於て修すべく、前の音靈法は主として夜間に修すべきである。初心の間は夏はとも面白くないが秋冬春の間は何時として修行に不可なるを見ぬ。尤も注意すべきは呼吸器や心臓に疾患のある人は此の御柱傳の修業に着手せず音靈法のみを修し健康になつてから此の御柱傳を併修するやうにせねばなりません。この御柱傳を修練して第一に誰れにも著しく現はれてくる神驗は治病施術の能力が見ちがへるほど發達すること現に治病施術を以て世に立つて居る門人等に此傳をひそかに授けて修せしめ、忽ち驚くべき靈能を發揮するに至り殆んど神人のやうに見られ出した人が随分ある。併し此法は、こんきよく修練を積まねば駄目で始めの十日間や二十日間位は僅かに身心の爽快を感じる位に過ぎない、そして其れから暫く続けると今度は大概の人が何等の感じがなくなり修練の興味が薄らいで中止する人があるが實は此處が大切な瀬戸際で、そこをこんきよく續けて修練を積んで行くうちには忽ち豫想しなかつた世界が眼前に展開して大光明を炳現する境地に達するのである。それも行きつまりではなく更らに又た一段々と靈格が向上して行くので此の修法の成績の差は要するに信念とこんきと

の數位の和の差である。飛彈の工匠左甚五郎が師匠に別れるとき師匠が「人間は何事によらず死ぬる迄修行と心得ねばならぬ」と云つた一言を忘れなかつた甚五郎は遂に天下無前の神技を揮ふに至つたが、この一言は移して以て吾徒の學人の骨肉に刻み込んでおかなければならぬものである。本田先師も「其れたゞ專修に在り」と證明して居られる。數を重ねるといふことの神祕力は既に前に第何章かで言うておいた積りである。音靈法は念を滅して至上清淨體たる宇宙の第一義諦に歸入するの術、御柱傳は念を統一し淨化して至上清淨體たる宇宙の第一義諦に格合するの術。その出發の方向は正反對のやうであるが、これは開合の變で同一處で本來の眞面目に徹見するのであります。シカモ相互に相たすけ相啓きて進むから帆を有する汽船が順風を得たやうに進むので、鎮魂も歸神も此の天下無雙の兩刀を以て斬り拓いて行つた素地なら決して狂ひのない正しいものとなつて行くので此れは修行者みづから追々に啓發し神悟することを保證しておく。一面からいふと音靈法は頓の法であり御柱傳は漸の法であるが、音靈法を修しつゝ御柱傳を修すれば千里江陵一日に還るの快速力で進むのである。御柱傳を習熟すれば觀法が自在になるといふことをいうたが、それは何う云ふことかと申すと、これは詳しく説けば一冊の書物にも述べきれないから本書には略するの外はないが、佛教に「心を一所に制すれば事として成らざるなし」とあるアレを能く考へてみられれば見當はつくのである。一所懸命

といふ語は佛經から出た語で世人が俗に訛傳して一生懸命といふが一生懸命では語をなさぬ、一所懸命と書くのが正しいのです。勝つと思へば必ず勝つ、出來ると思へば必定出來る」さきに述べた丑林や卯林を玩味して彼此研究せられれば宜しいので總て本書一卷だけで靈學の妙機は悉く盡されてあり神通の術も此外にないのであるから仔細に眼を着けて眼光紙背に徹するやう此の形容詞を形容詞とせず文字通り眞に眼光紙背に徹するやう心讀して、本書全卷を讀者各自の所有とせられなければなりません。本書は説述の語が例によつてぞんざいではあるが一語一句にも深い用意があるので一見して何でもない様な點や靈學に直接關係のないやうに見える點も輕々看過されてはならぬ。本書は何處と何處が正味といふことはない、本書全體が正味である。今こんな手前味噌のやうなことを云ふところにも賊機は句々にして存すで、つまり平たく云ふと一切が心持ちの問題であり、わづかの差のやうなところ天地懸隔の差が生ずることを腹に入れられねばならぬ。世の蕪穢の書を山積して揚々たるものがあるが、そんなものは邪魔にこそなれ天行居の所説の参考にも補助にもなるものでない、我が所傳の眞學神法は、俗流と系統を全く異にする正純キツスキのもので、平々白話の如くに見えても實は我が犠牲は至大であります。

午 林

今日は島田幸安幽界物語の第二巻を寫させて一見して貰ふことにする。籤から棒のやうな話の順序になるやうではあるが少々思ふ筋あつてのことである。此の物語の前篇は天行居で大正九年九月九日に刊行した「神仙靈典」に載せてあるから彼此参照せられるが宜しい。前篇の方は寫本ながら以前から随分世間に傳はつて居たが茲に示すところの第二巻は世にも珍らしく二三の篤志家が傳寫して秘笈に藏して居たものである。島田幸安は和歌山市西瓦町南側裏の者で天保六年十一月二十六日卯刻生れ、ふとしたことから仙界に出入するに至つたのであるが同地の參澤宗哲明(平田篤胤翁の門人で桃之舎と號す)が嘉永五年(當時幸安は十八歳)頃しばしば幸安の宅を訪問して仙界の消息を聞いて書き取つたものである。本書の寅林かでも言及しておいたやうに仙界にも種々の階級と地方的色彩があり又た時勢に連れて消息の變移する場合もあるので或る一二の仙界の消息のみを聞いて一切の消息を概斷し去るのは群盲の大象を評するやうなものであり、況んやこれを以て更らに高級の神界の消息を類推するやうなことは絶対に失當の甚だしいものであること勿論であります、併し此の幸安物語や平田翁の寅吉物語や河野久の眞誥や八田知紀の霧島山幽郷眞語や田原篤實の神變奇録や名古屋の醫師柳田

泰治の門人澤井才一郎が慶應三年十月九日以後仙界に出入するに至つた記録たる仙界眞語やと云ふ類のもの、すべて記述者が實地に見聞したことを何等の私意を挿ます有りのまゝに記録したもので幽界の一端の活消息を知るに何れも貴重なる資料であります。

島田幸安幽界物語(二)

紀伊國 參澤宗哲明聞書

神方醫師幸安が宅に張出し有之文

口 演

一私方醫藥之儀は神傳之法に付龜末に不相成様御給べ可被下候、且私仙境へ參り候は一大事の儀に而
他言不相成候間右の御尋は御用捨可被下候、外に二兩人へ譯合有る相傳書留候物も御座候間御信心
の御方様は其筋に而御聞可被下候事

一人間の身の上何事に不寄難知事御尋の御方は其人の姓名年齢住處産土神社等委敷御認越可被下候、
名所を隠し何才の男女と御申越の類に而は一向相分り不申事

一八卦占ひ加持祈禱體の事一切不仕候間堅御斷申上候、且又當時難澁に付御藥の儀は現銀に而差上候
定に御座候間左の通銀子御差越被成下候様奉願上候

御藥上分 八服ニ付 價銀五匁
御藥中分 八服ニ付 價銀三匁
御藥下分 八服ニ付 價銀二匁

神方諸藥調合所 玄 江 舎

左に認候條々は明が八月十五日已來追々承候次第且書面を以て幽境へ問に遣し候仙君の答語又は他の人々よりも問に遣はしたる答の趣承候をも共に相記し候物也

明問、幸安が産れたる時何ぞ奇異なる驗の有たる事も無きかと同人の母に問ひたるに母さき曰、奇異なる程の事は無之候但し幸安が生れし天保六年十一月廿六日の前夜夢に此瓦町御城下一圓稀なる大雪降積りて甚だ奇麗に見え其雪を手を取候夢を見たる計にて御座候、悴兄弟多き中にも幸安計は性質正直にて幼少より兩親に能く仕へ群兒の遊を好まず只手習讀書杯を望候へども貧乏に付左様の稽古もいたさせ難く悴娘共皆奉公に出し候程の事に付幸安は無據寺奉公致させ御座候處誠に不測の譯合に依て今は幸安に掛り日々を相慕候と家内共歡び居申候實に珍ら敷事に御座候

○明問、汝が身に前生ありや、幸安曰、是は其許に可申事なり私人間に生れてより一昨年迄は何も不存候處師の清淨仙君より承り候には私は元唐土の産にて神仙の道を好みて青眞小童君と申す藥師神を

信じて西域の藥山に登り異人の官に迄は進みたるが彼の青眞小童君と申す少彦名の大神より勅命ありて今世間は幽深の大道甚衰へたり汝を以て此道を現界に傳へしめむと思ふに未だ行功足らずして其事に使ひ難し今一度人間に生れ德行を施して後來るべしとて其事を計られるが程無く唐土乾隆帝の時に人間に生れて名を寒敬夫と申たり、然れ共未だ道の行はるべき時至らざれば空く人間にて過けるが漸く東方大日本には幽界神仙の古道を開き玄理を現し世人を導く聖者杯も出て其教の行るべき徴も見え候ひければ頓て此國に島田幸安と再生したるが時至りて清玉異人と成り今は斯く幽境に往來せる也必ず篤志の人に逢て道を傳へ漸々世に榮行くに到るべしと承候

○明より書附を以て神社に坐す神達に正從一位二位何品云々と位階を贈り申す事有り又神より位階を奉れとの御告有し事もあり神達は幽界の官位あれば是等は不用の理にも成候や如何と利仙君の方へ伺候、答、位階を奉るは人界の敬ひを増さむ爲に神の望み給へるなるべしと申越候

○明問、電光りし雷鳴り又墮ると云理を知りたし、又大雷神の御所爲は如何有けむ又雷難を除る術もありや承りたしと利仙君の方へ伺候、答、稻妻は空中の水火相戦ひ摩合て火光を發するなり雷鳴は其水火の氣強く凝り迫り争うて音を成す也、此時は必ず清王海金神と申神海中より出來りて其事を司り給ふ、大雷神と申すは此海金神の事なり雷の落ると云は其凝結せる物の此神に觸れて打彈かるゝなり

是も此雷神の御所爲に據る事也、人間の雷難を遁れむ爲には此神を尊信せば死亡を免るべしと申越候

○明問、人間界に大天狗と云ふ狗賓の形を鼻高く色赤く背に翼を畫きたり是妄像なる由兼て清玉より承り候如何なる譯にて如此く畫き始たる事にやと利仙君の方へ伺候、答、是は猿田彦神の色赤く鼻高きと又た木葉天狗と云ふ鳥の翼ある姿とを混雜したる物也、又人間は天狗の面於多福の面と云へるを玩弄せる由鼻高き天狗の假面は猿田彦の神於多福の面は天の細女の神の御面也神代に猿田彦神細女神と相對せられし事あり神社の祭に此假面を用ふるを天狗と稱し誤れるより起れり、是は甚宜しからざる事ゆゑ人間界の畫工等に篤と申聞けてかゝる妄像を書さる様にいたしたき由申被下候

○明問、天竺の釋迦法師日本の空海が如く人間にて變化異驗を顯して佛法を弘めたるは何なる術にや、又今放下師の劍を呑み五體を貫き杯する術又梓巫の口託狗神遣ひ稻荷狐寄せ等も怪しき物也此事も如何承りたしと利仙君の方へ伺候、答、釋迦空海並に放下術皆妖魔を使ふ所なり、梓巫狗鬼遣ひ稻荷下げは獸類を遣ふ也是らは皆善からぬ業にて決して入らぬ事也と申越候

○明問、此人間が高き處に登り遠く下を視るに地に落むかと恐ろしく足震ひ上氣する事あり汝空中飛行の時は如何、幸安曰、何程高く空を歩き遠き下を視れども危く思ふ事無し平地を歩行よりも心慥に御座候綿の上を踏む様にふはくとして地を歩行如くどすくとして足に響きは不致候

○明問、汝幽界へ行べき用あれば山人來迎ある由なれど近頃は其用事も繁く候に付ては毎夜來迎も有るにや、幸安曰、祕事なれども實は幽境の御迎を私より招き申候、何の仙人様と申如く御名を唱申候
○明問、汝人間にても夜中幽境の狗賓の往來杯視る術ある由然らば闇中に物を見る事も有りや其術はいかに、幸安曰、闇夜に燈なき時道筋を明かに視る術あり是らの法皆呪文也

○明問、汝が同學淨玉の外なる六人皆唐戎の某山の産など承り候は現界の山名なりや、又所謂五仙人と申は何なる仙に候や、幸安曰、山名は幽界の名にて御座候、扱五仙人とは五山之仙人とて唐土の五處の山に在る仙也、清悟神仙人生國唐寂山壽八百歳、清利神仙人生國唐鏡山壽七百歳、清王神仙人生國江戸叡山壽七十二歳、清立神仙人生國唐若立山壽七百歳、清白神仙人生國唐白山壽六百歳如此に御座候

○明問、仙境にも長壽を祝ふ事有りや、幸安曰、仙人の賀の祝有り千歳の壽を始とし夫より五百歳五百歳とにて壽を祝ひ申候、其時は歌を詠み詩を賦し書を認て贈る也、先日君に進せ候壽福々々と書たる物は師仙君の千歳の賀の時認たる文を當年書れたるなり

○明問、人間の壽命長短定り有る事にや、幸安曰、壽數は定有り夫を不養生また横難にて縮むる者多し、又問、定壽よりも長く生る術は無きか、幸安曰、仙境に術あり願ふ時は延しくれ申候但し諸人を

救ひ導かむ爲の延壽は叶ひ申候榮花の長壽は決して願叶不申候

○明問、清淨仙君の館に門ありや館の模様はいかゞ、幸安曰、大門有り冠木門にて上に額を掲げ候、文字は幽境の篆字也、又中の御殿の四方口にて神社の廣前の如く造り其櫓に皆額あり篆文也、屋根は皆檜皮葺にて檐口建出しの處は竹葺の屋根に致し候、館内の柱には聯を掛し處多く御座候、文字は皆幽界字なり、扱利仙君は赤山の君長にて仕ふる所の諸仙人異人狗賓等みな官人にて御座候

○明問、山人異人汝が如き輩は皆利仙君の館に住居致し候や、幸安曰、左に非ず是らの官人皆イホリと申て自分々々の居宅あり、皆檜皮葺也、私は去年來淨玉と同宅に住居致し候、今其家は淨玉が宅と成申候、利仙君の許へ當番に詰め退出後は皆自分の宅に居申候、定れる休日有て非番いたし候

○明問、仙境の家宅は何人が造り候や、幸安曰、無官の平民を雇ひ木材を取集め造營致させ候事也、無官の平人を木仙又休仙とも唱へ申候、是は世の凡人の死たる魂也、現界の農工商の類にて心境と唱へ其住處も廣く御座候、家は一度建候へば萬世朽倒るゝ事なし但し建添などは致申候

○明問、當國美幸山の紀法仙人高山の清淨仙人の身柄は如何、幸安曰、紀法仙人は一山の主なり清淨仙人は異人の境にある官人なり、又曰、彼木仙は皆家無き者なり

○明問、鬼は天狗より上官なる由天狗に大小二種の稱あり鬼も異形ありや、世に赤鬼黒鬼杯五色あり

是等の品承り度候、幸安曰、鬼は木葉天狗より上なれども大天狗よりは餘程下官の者也、鬼に青赤黃白黒ある山甚しき妄説なり鬼は人の如く肉色の一種也位階に依り形容の替もなし、扱賓の次第は大天狗の次は小天狗其次は木仙次に鬼次に木葉天狗此下は魔天狗邪鬼と成申候、先達て鬼も狗賓の中に籠り候様答申たるは未だ辨へ不申故也、委く承候に狗賓と申すは大天狗小天狗と木葉天狗を申す事にて役儀筋目の卑きに依る事也、元來天狗と申すは人間にて名けたる俗稱なる故幽界にては左様に不申彼大天狗の方を山靈と唱へ次の天狗を山精と唱へ候、又木葉天狗をば境鳥キョウトリと唱へ候、又魔天狗などは妖魔の部類にて殊に賤き者也、扱八天狗と申す名も幽境にては八山靈と唱へ候、斯有る譯故天狗と申すは不宣名目なれ共人界には天狗々々と云觸したる故に不得止通稱に申すまで也、但し狗賓の名計は唱へ申候、九州赤山より東なる山靈の住處を狗山イヌヤマと申候

○明問、山靈山精鬼境鳥の住家皆杉皮葺なりや是らの輩食物如何、幸安曰、山靈の家は皆檜皮葺なり、山精の家のみ杉皮葺なり、鬼と境鳥は家無く只杉林などの中に住み申候、山靈山精ともに食物は仙人に同じ、鬼境鳥は禽獸に同じく活物鳥類をも捕て食ひ申候、扱鬼は仙人達の使役と成り境鳥は狗賓の下司に使はるゝ物にて御座候

○明問、鬼並に境鳥の姿委く承り度候、幸安曰、鬼形は先達て申たる餘は顔しかみ眼丸く口は人より

大きく牙齒獸の如く耳は縮たり髪は毛株黒く末赤し但し白髪は無御座候、額鼻の上シ嘸みたる皺あり、額の皺は無き物も有り皺筋多きは力量勝れたる鬼也、又境鳥は嘴の本に鼻穴あること鳥の如し顔は人に似て眼正面にありツツ瞼上より覆へり耳に小き輪郭あり兩手は人の如く手首と腕に環を入れ申候、指五本にて爪は鳥の如き袋爪也、肩の後に兩翼あり尻に尾羽あり足は鳥にて太さは手と同じ股より前へ折れて座せり、鱗甲あり前指三本後指一本にて飛で樹の枝にも留り申候、大さは人の如し、位の差別無く只ツツ鬚の黒きを上等と致し候、又問、その姿認め見せ可申や、幸安曰、容易に圖し難く候

○明問、往昔唐戎には幽冥を疑ふ人に靈魂妖鬼を現に見せしむる術有り汝は不知や、又仙境へ參る術夜中に限るは如何、又汝が夜行の時鬼物を見る事あるは狗賓計に候や、幸安曰、此現界にて幽冥の鬼物の眼に見えるは昔の事にて今の世は其術有ても一向出來不申候、若左様の事あらば必衆人は無き物を現はす魔法者也と言ひなすべし又私幽界へ來る事も白晝には其術を爲ても驗無くとんと出來不申候、誠に今の世は幽と顯との道理急度差別立ち御座候、且又夜中に見え候は狗賓のみならず木仙魔天狗變化の物悉く相見え申候也、此時母人さき申候には私幸安が幽界へ出入の移替りを見留たしと存候て空行の夜は眼を離さず氣を付居候へども今に往來の境を急度見たる事無し鳥渡目を振り候間に消失せて參りいつの間にもやら歸りて着座いたし居候事に御座候と申候、幸安曰、幽顯の理を混雜せる幻術

魔法の類は仙家には甚嫌ひ申候、且現界にても御制禁なり此人間は顯道にて形を慎み幽教にて心を修め徳を積可申事に候、誠に神仙の道は幽理なる故已に今信仰の人々追て出來候も皆内實の信心に御座候、善事を勧め物を救ふも皆世間を忍び名をも隠し中也、凡人の人に隠して惡業を爲すとは替りて仙道には人に隠して善行を修する事を第一に仕候

○明問、人の相を視て其心の善惡を知る術ありや、幸安曰、仙境には人心の善惡は其音聲を聞て知り申候

○明問、羽團扇の形はいかゞ又拂子を持つことは無きか、幸安曰、團扇は羽は兩面合せて貳拾枚別に壹枚眞中に指添たり此一枚に譯の有る由也、都合貳拾壹枚にて柄に房を下ゲたり如圖（圖略）羽の色は上位は黄色、中は白、下は青色也、柄の色は上位は朱次は黒塗次は白木次は青色也、下房の色は定法なし、又拂子は常に持たず他行の時持申候、毛は白し其柄は上位は黒塗中は赤、下位は白木なり

○明問、汝仙境へ來る時裏表の戸を閉たる夜はメリを明けて出候や、又寢衣を着替て行候や、呪文は大音に唱候や、又體の儘行く時と魂計にて行く時と心持替り不申や、幸安曰、夜は戸を閉たる儘にて表なり裏也とも自在に出行かれ申候、寢卷は着替不申候、呪文は小聲に申上る事也、扱體の儘行は人界にて用を足すと同様なれども氣行は分魂の事故歸り候ては夢に似たる心持あり

○明問、剃髪は僧の遺風なる故神事に忌事あり仙境にてはいかゞ、幸安曰、剃髪計は忌不申候、但し常に頭巾を冒り居る故に頭を現す事は無御座候

○明問、仙境には印を結ぶ事は無きか、幸安曰、印を結ぶ法有皆親指を内へ入れ申候、又常に禮するに兩手を突にも親指は隠し申候、現すを不敬といたし候、又頭を地に付るをも無禮也と申て額突時は頭を手の上に附ヶ申候

○明問、汝此道に付て別段信仰の御靈代様の品有や、幸安曰、御神像石の外是々也とて見せ吳候は清淨仙君の認め候青眞小童君少彦名神と書たる左右に神字様の物認め掛物次に清淨利仙人紀法仙人清淨仙人と認めたる掛物且幸安が七指の牛形の靈符の掛物等也

○明より書付を以て私輕き仕官小身の處家人多く候に付融通の爲内業も仕度候へ共幼少より諸人の爲に成候事致したき志願にて農工商の業は好き不申只神教幽顯の大道を以て人を導かむと存じ其書を弘め且讀書を授け或は諸人の病難等を除き候呪禁の術等を相傳居候處格別の助力にも成不申候に付傍神方の醫藥を弘め可申哉とも存居候何様の所業宜く候也と利仙君の方へ伺候、答、宗旨は醫術よりも今迄の通り神幽の道を勞き人に授け候は自分の樂にも成り世界の人の爲に成るは無此上事に付生涯其筋を第一に致可申候必功を立可申也其上には何也とも心次第にいたすべく候と申こし候

○幸安曰、我師の清淨仙君の後あり名を大女オウメノメと申候、此ほど始て御館へ參り拜謁仕候、此後の御殿は矢張赤山中の別殿にて御座候御姿は繪に書し唐女の如く肩には領巾を掛申候、實に美麗端正の御相なり、數多の女仙人並に童女をも多く召使はれ候事に御座候

○明問、仙境の女に人の妻と娘との姿差別ありや、裝束は男仙女仙何れの方立派なりや、又年老たる女も有や、幸安曰、妻妾と娘の形差別なし、何れも面容美しく稚き娘の様に御座候、女仙に限り官位に依て服色の替る定め無之、立派を第一と致し殊に赤色を用ひ錦繡を着し男仙よりは見事にて大夫傾城の粧を見る如く姿は繪に書し唐土女の如く也老婆などは見え不申候

○明問、世に十月には諸國の神たち皆出雲大社へ御集會し給ふに付此月を神無月と言へども出雲國ばかりは神在月と云山實に然る理も有や、幸安曰、此事は師の仙君より承り御座候尤毎年十月には諸の神々仙人等必出雲の大仙境に集會あり吾師の利仙君も此月は參府致され候去年參られし時私も彼地の山上まで見送り大社を遙に奉拜候、彼御社を幽界にては闕宮クハツミヤと申候、東王父西王母の本宮神仙の大都なるゆゑに古より參觀有り、然れども跡に残り御留守を守り候神達仙人等も多く御座候、世間の凡人の思ふ如く總抜けに出雲へ集會せらるゝには無御座候、又神無月と云は此事に拘らぬ別の義なりと承候、又問、女仙は來府なきか、幸安曰、來府あり利仙君の御后大女も出雲へ相詰申され候

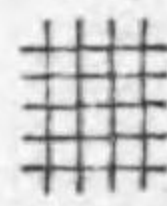
○明より書附を以て當國日前宮は幸安並に明が産土の神にて一代の守神なれば此神の幽宮へ我らが通じて神世の事共を承候事の出来る術は無しやと利仙君の方へ伺ひ候、答、日前宮は神代より日前の神國懸神と申す兩神御配體にて現界にも兩社並坐せり、此神の御本體は天上に鎮り給ふ天仙にして彼御社は分形の神なれども殊なる譯合ありて人間より容易く御許に往通ひは致し難し、都て斯る天仙の類は境界異にして幽宮を伺ひ難しと申越候

○明問、當國府城の傍に仙境山と云あり其奥に仙人が硯と稱して石上に天造の古文字現れたり、此字を古より讀たる人無し、近頃或人の考に岡山の二字か若然らば若山ツツヤは岡山の轉語ならむと云し人も有り決定し難し實は何なる文字にて何なる譯ならむと申て彼字體をも寫して利仙君の方へ伺候、答、彼文字は城山シヤクと讀む也此山は往古には仙境にて有しか共後世此處は人界の城廓を構ふる地と成べき事を神仙の前知し給ひて石上に城山の文字を記て現界に残し傳られて仙人の居住を止られたりしが果して後に斯の如く人間の城廓を營む堺とは成たるなり、岡山に非ず城山が本名なり、此後幸安も彼仙境山へ行き幽術を以見候へども仙類は一人も無きよし申候

○明より書附を以て東照神君家康公また厩戸聖德太子は幽界にては何様のさまにて在すや、又役の小角久米の仙人次に法然上人日蓮大士親鸞法師又紀伊國の徳本行者又京都の江文坡匡彌これ等の人々幽

界の有さま如何、また吾師の平田大壑先生が幽境の居處承りたしと利仙君の方へ伺候、答、東照神君家康主は今日光山の幽宮に居住せられ神仙と成れり、厩戸太子は佛仙境に在れども分魂は又神仙にも成居候、役行者は異國の佛仙境に在り、久米仙は葛城山の神仙なり、法然日蓮は佛仙境の山精なり、親鸞は卑き妖魔なり、徳本は佛仙なり、江文坡は異國の仙境に在り、平田大壑は伊勢の山室山より九州へ移りしかど今は山室山に留りて神仙と成居候と申越候

○明より書附を以て六甲秘呪の事臨兵闔者皆陣列前行と書き又臨兵闔者皆陣列在前とも傳たり何れの方正敷候や、又世に九字を切ると申て



かゝる事を書て符に用るも有り是は人界にて作たる事に

や又此記如此き物を書て尊むこと有り吾師には天地循環の象なりと承候幽界にもある事かと利仙君の方へ伺候、答、六甲秘呪の事列在前と有るは誤なり列前行と無くては叶はず是は實に尊き物也、又九字を切る事萬字の神符の事皆幽界の神傳にして人間の作たる物に非ず敬ひ尊みて相用候様にと申越候、又明が次の問條に穢跡金剛法禁百變法門經中より傳れる四十六符を書て此符佛書中に出たれば偽作にて有むか眞偽承りたし且此等の符字の讀方はいかにと利仙君の方へ伺候、答、是は元より仙境の秘符にて甚尊き物なり中々佛家より出し物に非ず斯有る神符の人間に洩傳はりし事は不測なり、此訓方は皆分り居れども都て符章は人界に語り傳ふること嚴禁也と申越候、又明が問條に熊野牛王神符の

文字並に唐三藏が西域より傳へて人に寫させ門戸に安じ魔鬼を避けしむと云る異字とを認めて是等は何方より出たる符字ならむかと利仙君の方へ伺候、答、何れも佛仙の方より出たる物にて熊野牛王は混雜せる處もありと申越候（中略）

○明問、吾師の考説に唐戎の上皇大いと申すは天之御中主大神なりと云ひ又盤古氏夫妻元始天尊大元聖母と申すは西域の大梵自在天王と同く吾が高皇產靈神皇產靈神に坐し又西域の童子天は少彦名神唐戎の日君西域の帝釋天王日天子は共に天照大神也と申し又海中大神九氣丈人九原丈人九老仙都は上津綿津見神中津綿津見神底津綿津見神なりと云ひ或は唐戎に九夷とて畝干方黃白赤玄風易の名あるは筑紫九州の事也とも云れたり、是等の配名相當候や前に清玉より青真小童君少彦名神と申す御名また杵築大社を閼宮と唱へ東王父西王母の本宮と承り候事も吾師の考説と符合致し候、右等委く承たしと利仙君の方へ伺候、答、右等は實に能考たる説にて皆相當候と申越候

○明問、汝空行して日月星の境へ近寄り見たる事は無きか、幸安曰、左様の處まで未參り不申候、清離仙人が天漢の星を視極めむとて最高く空へ騰りたるを見受し事あり

○明問、此大地の形は平遠なりや圓形なりや、幸安曰、地の實形は丸き物の由兼て承候、私西域へ空行せる折も左様に思ひたる理有り

○明問、佛説には大地の下に八大地獄ありと言へども其國廣大にして此地球の中に置れぬ事也、又西方極樂と云國も大地圓形なる上は何れを西と極め何方に極樂ありとせむや無理也然れ共世に死て蘇生したる者に地獄極樂と云を髓に見て歸りし人も有る山なれば外にかゝる國も有るにや、幸安曰、極樂も地獄も焰魔も佛も實は頓と無き事なれど佛仙境の榮を思ふ魔天狗どもが左様の事を現じて人間に見せ誑す術にて皆佛仙境にある事也、明問、佛仙境とは何處の境なりや、幸安曰、八山靈の住む山を始め總て邪鬼妖魔の住む境也、當國の高野山杯も幽界にては佛仙山と稱申候、此山も魔境にて空海大師を始め佛魔共の居る處にて御座候

○明問、異國の道に何の鬼神某の佛杯云には一身に數頭ある物また手足幾つも有る物又は五體より火焰の出る物杯を作れり、或は白澤貌天吳杯の類あり幽界には斯有る姿の神佛も有や、幸安曰、是らは人間の怖畏に作設たる物にて一向の空語也、若遇々左様の怪しき物出たりとも假に異形を現せる化物なれば本體に非すと知るべし

○明より書附を以て私が毎朝拜神の詞且清淨仙君の御前を遙拜せる詞仙境へも通じ候や又我が家に自身に分魂和靈を祭り日々拜禮をも仕候此分魂幽界にては一箇の神靈とも成居候や又死後には靈魂神仙と成て幽顯兩界を守り諸善人を助け分魂は高貴の人に産れて神教幽顯の大道を弘めしめむと神祇へ

祈奉る事に御座候此心願彌成就いたし可申や且又御迎を戴きて現身ながらも幽界へ参り候事は相叶可中やと利仙君の方へ伺候、答、宗哲が毎朝拜禮の詞何れも幽境へ能通じ申候、斯く無怠慢相勤候義奇特なる事の旨譽被申候、又分魂も相應に分れ居候、且後世靈魂の行方願望分身の再生は少彦名神の御上にも其例あること故必成就可致候、又幽境往來の事は當時其方が参り候用事も無之間今は出来不申候へ共信心德行に依り自然と幽界に通じ候場所にも至り可申候と申越候

○明問、世に唐戎の擬五岳に據れる皇國の五岳とて近江の比叡山を東岳とし大和の金剛山を南岳とし日向の高千穂峯を西岳とし山城の愛宕山を北岳とし又同國の如意寶山を中岳とせり然るに此五岳は五方の位にも當らず山の大小遠近相對せず其杜撰の愚説なれば外に正き説も有らむかと尋けれども絶て異説も無き由なれば予今試みに地の遠近里程山の大小を測りて駿河の富士山を東岳と爲し大和の金剛山を南岳とし伯耆の大山を西岳とし加賀の白山を北岳とし近江の比叡山を中岳と定めて曰く、

さす方も違ふ五嶽をいつの代に誰が日の本に名をや立てけむ
やま人もいかゞ視るらむ戎さまに五嶽をたてし己がさかしら

斯く言擧して此定めは善きか悪きか如何と利仙君の方へ認め贈りたる其答、今新に作れる此日本の五岳の定めは誠に道理に叶ひ至極能く出来申候かゝる事は中々人間の出来る事には非ず甚珍しき事にて

此歌も面白く後の歌殊に感じ候、彼參澤宗哲と云る者は形は人間にて在れども魂は凡人の種に非ずして幽境にも通すべき人物なりと厚く賞譽せられたる旨申越候

○明問、汝飛行の時諸々山々の仙境も見え候や、幸安曰、諸の山々皆仙家あり誠に賑かなる世界也、其家は悉く檜皮葺なり但し山精の家は杉皮葺也家の棟立並て眼下に見え申候

○明問、仙人の館の屋上千木ありや、幸安曰、都て屋根には千木に似たる物あり如圖(圖略)人間の神社の千木は是に習ひたる物なるよし承候

○明問、仙人の乗物にする鳥類且幽界に在る活物は人界の生類と同様にや、幸安曰、仙人の使ふは皆幽冥に入たる活物にて人間の眼に見え不申候、現界の鳥獸の死たるは即幽境の鳥獸なり

○明問、幽界よりは此人界を常に見通す事にや、又仙人の身を小さくする事有や、幸安曰、現界の様に常に見通すには非ず見むと思へば見ゆる也、仙境には數百里の遠き處をも眼前に縮め移して見る術有り又當國の紀法仙人の宅に壺あり其中に身を甚小く成して久しく這入居たる由承候

○明問、汝風を乞風を止る術は不知や、幸安曰、其術も出来申候仙人へ願ひ候て致す事なり

○明問、山靈は言語人と同きか境鳥は鳥に似たれば物言はぬにや、此狗賓の飛行の様はいかゞ、幸安曰、山靈は異人の類にて何事も人に替らず飛行は通力にて仙人の如く起て行き申候境鳥は翼を打て制

匂ひ鳥の如く飛候へ共言語は山靈に同じ

○明問、佛説には境鳥に似て天人の面なる迦陵頻伽と云ふ鳥有りと實なりや、幸安曰、佛家に云天人迦陵頻伽は皆妄説也、全く境鳥の事を偽傳たるならむ、扱師の利仙君空行の途中にて鞍馬山の僧正坊と申候山靈に逢ひ物語せし事有り、明問、其時の僧正坊の姿は如何彼は八山靈の中にて候や、幸安曰、僧正坊の頭は白髪のお惣髪にて頭巾を冒り腰より上は黒く下は白き服を着、手に白き羽團扇を持候白衣の僧一人を召連たり世間の凡人の繪に書る様に鼻高く翼生ひたる姿に非ず、尤僧正坊は八山靈の中に非ず狗賓の君長惣主宰正一位なり、聖武天皇天平廿年戊子産にて壽命は千百五才と承り申候

○明問、世の橋慢者や愚人を魔境へ連行き誑す狗賓は何なる筋にや、幸安曰、理不盡に愚人を誑す狗賓は佛仙境なる無官の魔天狗なり所謂三熱の苦は是等に有るよし此程承候此魔天狗どもは都て僧形にて御座候

○明問、仙境の人々の口髭は生れ附の儘延し候や又色々形を造りたるも有や剃髪のは髭無しや又手足の爪は剪候や、幸安曰、仙境には男に髭無きは一人も無し生の儘延せしもあり形を様々に成し少づつ延したるも有て物好き様々なり、但し剃髪ハゲの筋計は當國の武士等の延したる如く顛ウラの下計を延す事に御座候、爪は長くして切る事無し然れ共垢付かず白く奇麗にて候私も山中に居候内は爪も延し顛

髭も置き申候

○明問、仙童の頭の形はいかゞ又仙境より出産する兒も有や、幸安曰、利仙君の方にも召使はるゝ仙童多し小供の頭は禿なると芥子結なると有り如圖(圖略)扱女仙の方より生れ出る兒も御座候

○明問、汝は剃髪にて仙境にても坊主の由なれば月代の延る事有や、又狗賓にも剃髪の人あれば剃落すにや剃髪ハゲの冠は何なりや、幸安曰、髮髭共に延び申候剃刀は遣はず藥物にて髮毛を拂ひ申候實に美しく落ち申也、剃髪も頭巾を冠り申候又利仙君の申されしは剃髪には法帽また法夫とも唱へ候冠あり私杯には宜く候と申候

○明問、幽界に年頭五節句など祝ふ事も有や、幸安曰、年始五節供の祝事あり嚴重に御座候、其節は衣服を改め申候さて九州赤山にて正月元日年賀あり利仙君を始め仙人等、赤色の服を着山人は黄色を着し異人は黒色を着し狗賓は青色を着す如此く一同服色を改め各々装束の上に肩と腰とに青葉の木葉ハハを纏ひ申候(是は幽界にても衣服の始らざる時にかく爲たる故實を用る也云ふ)扱一統出會して六角の三方に白木の平盃を用ひ(圖略)圖の如き銚子にて一同年酒を飲申候但し上官より始め申也此盃事終て後上は八間下は三丈六尺ある谷の中間に行き各々布の引すぎきの手纏を掛(木葉ハハは着たる儘なり)木太刀キタチを持て武術を成し申候利仙君も加はり跡にて仕合を致し候此式法濟み候て又一統打寄り酒宴に相成申候、扱七日の節供は無御座候、次に同月廿八日には各酒を呑み一統赤服にて青き差貫をはき手纏を掛け六間の谷間へ行き各力を極め太刀打の

勝負真剣の戦を爲す此時勝たる者にて位階を進むる定例にて御座候、明問、勝劣の證はいかゞ、幸安曰、負て打倒されたる人は身より少血を出し申候然れ共拭ひ候へば忽本の如く成り少も疵は無し、又打たれて痛む事は無し、此日も利仙君は終に武術を致され候

○明問、弓の稽古は無きか、幸安曰、弓箭は有れども稽古は見不申候

○幸安曰、三月三日には一統白衣を着し五色酒を吞申候紫雲英ムラサキクワを摘取りて盃に浮べ申候、五月五日には一統黄衣を着し菖蒲酒を吞申候、七月七日には一統白衣を着し空行して西域の薬山と申候少彦名神の住給ふ御山へ行申候、式法は年頃同様にて御座候

○明問、小童君の館は瓦葺にや、幸安曰、矢張檜皮葺也、九月九日には一統青色の麻衣を着し式禮を行申候、此日は酒を給べ不申候

○明問、仙境の酒を吞たるは人界の如くに酔ひ候や或は酒宴の時人間の様に手を拍ち踊り拳を打様の戯も爲す事にや又肴には野菜鳥獸も用ひ候や、幸安曰、仙界の酒は吞候へば忽酔ひ申候、目の光ユラユラとする様人間の酒に似たり、然れ共其快き事五體の置處も無き程樂く面白く成申候、人界に譬ふる物無御座候、又手を叩き拳を打様の亂雑なる業は不致候、只歌を唄ひ舞を見候迄の事也をかしき事を見ては笑ひ申候(笑ふ事をホボこ申候)酒の肴には野菜果物魚類相用候、鳥獸は幽界に近き物也とて食不申候、

殊に獸類は人體に近く尤穢るゝとて堅忌申候

○明問、幽界の正月は子の月と云今の十一月なりや又月の大小閏月も有や、幸安曰、此界同様寅の月が正月なり月の大小閏月も御座候

○明問、汝が師の傳書に幽界の年號を棄て現界の年號を記されしは如何、幸安曰、人間へ傳ふる書なる故人界の年號を書れたり譯の有る事に御座候、幽界の年號は出雲仙境より出候よし承候

○明問、汝が家業とせる神方の藥種は如何様の品々に候や、幸安曰、藥種は多御座候顯幽兩界の品を組合せ製法仕候、現界の藥種は藥店より買入れ幽界の藥物は遣ひ切次第に仙境へ取りに參り申候、但し藥山より九州赤山に取寄せある品なり、明問、其藥を見たしと云に今持合せ候藥種は是々也と視せくれ候は氣老圓長大白粉見立泉白神羽生氣白西清子泉公黃白西葉白平等キハクサイバビョウクの如き人間に無き藥種數品あり何れも奇麗なる藥物にて艸木玉石様々に見え申候、明問、此神方他傳は相成るや如何、幸安曰、祕方にて人界へ傳難く候、傳へたりとも現界に無き藥種あれば其術行はれ不申候、明又問、内科計に候や針灸の法も無きか、幸安曰、内科外科相兼申候但し針灸は無御座候殊に灸治は身の皮を燒き惡臭四方に達するとして仙境には甚穢れとして忌申候、夫故に仙境往來の者は灸は一切不致候又私が藥を與へ候病家へも服藥中は灸治を斷せ申候、又問、穢人の病家療治はいかに、幸安曰、忌中死穢の人

には藥を與へ不申候

○明問、汝幽界にては病氣は有まじくや、幸安曰、最初の中は頭痛腹痛腫物なども聊有る事なり藥を以て忽癒し申候、尤仙人山人山靈等には病無し異人已下の狗賓の分には稀々に有り

○明問、人間の火葬はいかゞ、幸安曰、死人を焚くは重き穢ゆる神仙達は別て嫌ひ申候、又人の泣く事をも忌申候

○明より書附を以て神代の日文と云る物人界に傳はれり其文は比布美與、以牟奈耶古登、毛智呂良禰志伎流由韋都和奴曾袁哆波玖米迦汗游曳爾佐理閉旦乃麻須阿世惠保禮氣とあり初の十三字は數量の略言とも思はるれど其餘の字は何の略稱とも辨へ難し此四十七言は何なる義理に依て出來たる物ならむ又卜部家の龜卜術に用ふる登保加美衣美多米と云る八字有り此も何なる義理ぞやと利仙君の方へ伺候、答、此四十七字も此方に傳ありて十三字の外残る三十四字の略言の事も能分り居れども人界に傳へ難き祕事にて一切他言不相成由また次の八字は此境に用ふる事なし何なる義とも一向分り不申旨申越候

○明問、世に傳はる玄門の書に人身の中には三尸九蟲と云るが有りて庚申甲子の夜に人の罪惡を天曹に白すと云へり、此三尸九蟲は實に人々有る物にや、又甲子祭庚申待と云事仙境にも有る事にやと利

仙君の方へ伺候、答、人身の三尸九蟲と云る物は實に有る事也、但し庚申甲子祭等は人間に爲る術にて仙境には致さぬ事なり

○明問、世に禁灸日として子年産の人二月午ノ日丑年産二月寅ノ日寅年産三月巳卯年産四月申辰年産十月戌巳年産生涯無忌午年産十月午未年産十一月子申年産十一月子酉年産六月酉戌年産正月巳日卯日亥年産九月巳是等の日に灸せば死ると云ひ或は五月十四日十六日に男女交接を爲せば命を失ふ杯云へり斯有る類據有る事にやと利仙君の方へ伺候、答、是らは人間にて杜撰に作り設たる物也と申越候

○明問、利仙君の學文せらるゝ事有や、現界の書籍をも御貸申上る事は出來可候や、又仙境にては書物を何に納置候や、幸安曰、仙人達は常に書物をも見られ候、扱人界より此書物を御貸申上ると唱候はゞ彼方へ通じて視られ可申候、貸し申ても此方の物は其儘有て無くなりは不致、術を以て見る事に御座候、又書物箱は人界の本篋竝に能似て中に棚二ツ程有て卷物を入れ差蓋を致し御座候、都て白木にて蓋外面は焼板の如く木理日あり恰好圖の如し(圖面略)

○明問、仙境の字體は何々を相用候や、且詩歌は如何様の物に認候や、幸安曰、正しき書物等には古篆神字楷書相用候行草平假字は玩物に相認候、但し片假名は見不申候、歌は紙を長く切たるに認め詩は四角に切たる紙又長く切たる紙共に相用候、幸安又曰、此程私赤山へ参りたる時谷間にて杜鵑の啼

きたるに利仙君より谷杜鵑と云命題にて淨玉と私兩人へ歌詠むべしと申付られ候故に其時

谷 杜 鵑

淨 玉

谷間より雲間に通ふ杜鵑こゑほのかなる曉のそら

また私が赤山より歸る時に呼子鳥の聲を聞て人界の事を思ひて詠る歌

下山思故郷

古郷に向ふ深山の呼子鳥なく音ゆかしく歸る道か那

○明問、仙境にも毎朝顔手を洗候事有や、朝夕食時の定有や、膳に向ひ穀神を拜し食初穂を傍に供ふる事杯ありや、幸安曰、寝る事も無く別に手水はつかひ不申、只毎朝藥を以顔手を清め申候、扱酒を吞む時は印を結びて給へ申候、又樹實菓子何にても食候初も皆印を結びて神を念じ申候、但し腹の減ること無き故食時の定は無御座候

○明問、世に物忘れする人を物の記憶を能成らしむる術は無きか、幸安曰、此事兼て師仙君に伺ひ承候には是は皆人々生質の分量にて何とも致し方無之只自分より忘れまじくと心を附候より外なしと承候

○明問、仙境の長生不死の藥杯をも若し君上の命あらば現界へ携へ來る事可相成や、幸安曰、幽界の

品は樹の枝一本も私に人間へ持來ること不相成候、私が仙君より賜りて持居候品なれば仙君へ伺候上獻上にも可相成候、但し此道を信じ仙を學び候人ならば其人計へは幽境の品も相傳可申事と存候

○明問、汝仙境にて神の御姿を拜みたる事ありや、幸安曰、神の御形は容易に奉伺事不相成候、然れども西域藥山に登り少彦名大神を拜み奉りし事は御座候、御宮造は金玉玲瓏たる檜皮葺の大殿數多の仙官並居申候、神の御姿初の程は童形に御出現在らせられ候下官の仙衆より次第に上官の方へ禮を述べ奥の上段に至り青眞小童君少彦名神に拜謁仕候、宮中玉簾を掛け御前に錦繡の戸帳を掲げ大神の御本形老翁にて白衣を着し鼠色の羽團扇を持給ひ曲膝に腰を掛給へり、何とも尊く恐多き事に御座候、扱藥品はセイキョの壺と申すに入れ多く御座候

○明問、汝狐の化たるを視し事有や、又人間に病を興ふる疫鬼杯は不知や、幸安曰、私赤山より師仙と同道にて井口村と申處を行きたるに川の眞中に田の有る處あり其地に狐三四匹あり私に暫く人間に成り旅人の如く彼處を歩行見よと申され參り候に狐化來りアチコチと連廻り誑さむとせし故に捕へて投擲し以後人に斯有る事を爲るなと云けるに皆平伏し本體を顯し立去り申候、又此程若山湊東長町なる田中某が親類の女一人發狂の病にて私療治に參り候處憑物の體に見え候に付赤山に伺候處鬼病に相違無之由に付師命を以て私疫鬼の住る境へ行き相糺し候に疑しき奴共有之嚴く叱り斯有る所行致すま

じく申付歸り候、其後右の病人忽全快いたし常體に相成申候、明問、其疫鬼は何處に住居候や、幸安曰、疫鬼の境は熊野の貧久山(幽界ノ名也)と申す山に住居候其姿は人間同様に御座候家も無く只杉林の中に住て境界も甚穢く御座候

○九月下旬利仙君の方へ伺に遣し候數ヶ條の書付は追て返事可申山にて仙境へ留置に相成候間答の事を尋候處幸安外よりの伺狀有之右相兼赤山へ伺に参り候處同廿九日朝歸宅致し申候には、來月は師の利仙君は當國の紀法仙人清離仙人と同様出雲の關宮(ミヤ)へ参府に付山中用繁にて最早出立の日合も無之左様の返答處では無く候間十一月三日歸着後まで待吳候様にと被申候旨承候、夫故此度の書附類は懸御目候計にて持歸り候と申候

○明問、利仙君出雲へ参府に付ては御供に詰候衆中は誰々に候や、紀法仙人清離仙人は利仙君の御親類にても御座候や、幸安曰、赤山よりの御供詰は此度は淨玉壹人被仰付参り候筈に御座候、紀法清離兩仙人は利仙君の家老の如くにていつも附添相詰申候、此兩仙人も供一人づつ連行申候扱見送りは山中一統参り候事に御座候

○翌晦日幸安儀出雲へ御出立之御見送に空行致し候處見送の人々は皆京都迄御供致し夫より本境へ歸候由申候、明問、九州より出雲へ行に京都へ参候は甚廻り道ならずや、幸安曰、いつにても出雲へ参

府の時は必京都へ立寄申候、譯の有る事に御座候、扱清淨仙君御途中にて私へ被申候には參澤宗哲と云者は是迄度々問條を差越候事に有之右に付ては此後は同人より入門誓約之願等も爲差出可申儀と存候内實の存念承見候様被申候旨申越候に付願文左之通相認差出候事

現界紀伊國若山住 藤原參澤明宗哲

小生儀幼年より神教神仙の大道を好み其道を以て諸人をも諭し申度志願御座候て去天保十四癸卯年閏九月十一日歿故被致候平田大壑平篤胤先聖の門に入り神幽之古道仙教をも相學居候處此度不測の御縁にて兩界出入の清玉異人に近付き乍居幽理の實徴を伺ひ誠に大悅の仕合に御座候何卒此上神仙の大道玄理を學び諸人を救ひ善道を諭し幽顯兩界の榮を願は敷奉存候間乍恐今般小生儀乍人間も清淨利仙君を師尊と奉仰御門人に相成候様に御許容被成下度奉願候左候はゞ無窮の大幸無此上重疊の難有仕合奉存候將亦就夫誓約等の心得方も御座候得ば被仰聞被下置度此段乍恐縮奉伺候頓首再拜奉 清淨利仙君 玉榻下

右願書一通幸安儀赤山へ持參致候處使を以て出雲關宮に相詰居候淨玉異童の方迄差出し利仙君へ伺候處願の趣御聞濟に相成現界清玉が手前にて宗哲へ入門の誓印爲致候はゞ追々此方より宗哲へ認遣す品も有之段被申候條、幸安より承候事右誓約の印は左手の人指を突き墨を入れ口を愈し候法也、扱右